

三木市

平成 20・22・23 年度国庫補助事業による
発掘調査報告書

平成 25 年（2013）年 3 月

三木市教育委員会



這田村法界寺山ノ上付城跡 T1 堀土層断面(東から)



八幡谷ノ上明石道付城跡B T4 主郭西辺土塁(北東から)



高木大山付城跡 T2 東端横堀断ち割り状況（南東から）



二位谷奥付城跡C T2 西辺土壠断ち割り状況土層断面（北から）

序

播磨東端部に位置する三木市は、加古川より分かれ市内を東西に貫流する美嚢川の豊かな恵みにより、太古より多くの人々が生活を営み、特色ある歴史や文化を育んできました。

その代表的なものとして、戦国時代に羽柴（豊臣）秀吉が三木城主別所長治を攻めた「三木合戦」は、全国的に有名な出来事です。

秀吉は、三木城の周囲を囲むように40余りの付城と多重土塁を築き、「三木の干し殺し」と呼ばれる足掛け2年にわたる兵糧攻めを行いました。今もなお、三木城をはじめとして、付城・多重土塁など遺跡が市内の各所に残っています。

三木市は、これら遺跡群の国史跡指定に向けて取り組み、平成25年3月27日、国史跡「^{みき}三木城跡及び付城跡・土塁」として指定を受けました。

私たちは、これを機に三木城跡及び付城跡などの貴重な歴史遺産を大切に後世に伝える必要性を切に感じています。

本書は、平成20・22・23年度に三木市が国・県の補助事業を受けて実施した加佐八ヶ坪散布地、宿原大池1号窯・宿原大池2号窯・宿原大池遺跡、道田村法界寺山のうえつけじろあと、八幡谷ノ上明石道付城跡B・C、高木大山付城跡・高木大山土塁A、二位谷奥付城跡Cの発掘調査成果をおさめています。

最後になりましたが、現地調査及び本書の作成にあたり、格段のご指導とご助言、ご協力をいただいた多くの関係者の皆様に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成25年3月

三木市教育長 松本 明紀

例　言

1 本書は、平成 20・22・23 年度国庫補助事業として、国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて、兵庫県三木市教育委員会が実施した市内遺跡の緊急調査及び重要遺跡範囲確認調査の報告書である。本書では、加佐八ヶ坪散布地、這田村法界寺山ノ上付城跡、宿原大池 1 号窯・宿原大池 2 号窯・宿原大池遺跡、八幡谷ノ上明石道付城跡 B・C、高木大山付城跡・高木大山土里 A、二位谷奥付城跡 C、6 調査の成果を報告している。

2 整理作業及び報告書作成は、国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて、三木市教育委員会が平成 24 年度に実施した。

3 調査主体：三木市教育委員会。各年度における調査体制は、次のとおりである。

平成 20 年度

〔事務局〕 教育長 山崎啓治、教育振興部長 山本和民、文化スポーツ振興課主任 廣井愛邦
〔調査担当〕 文化スポーツ振興課長 松村正和、主査 畠中剛

平成 22 年度

〔事務局〕 教育長 松本明紀、教育部長 篠原政次、文化スポーツ振興課長 松村正和、主査 廣井愛邦、主任 小網豊

〔調査担当〕 文化スポーツ振興課主事 金松誠

平成 23 年度

〔事務局〕 教育長 松本明紀、教育部長 植原豊勝、文化スポーツ振興課長 松村正和、主査 廣井愛邦、主任 小網豊

〔調査担当〕 文化スポーツ振興課主事 金松誠

4 本書の編集、執筆については、金松誠がおこなった。

5 遺物の実測は舟坂祐香がおこない、挿図のトレースは金松誠・赤松恵子・宮脇美佳江・舟坂祐香がおこなった。

6 遺物の写真撮影は金松誠がおこなった。

7 本書に使用した地図は、三木市発行の 1/10000 及び 1/2500 都市計画図である。

8 本書における方位・座標はすべて世界測地系によるものを示す。方位は座標北を表し、レベル高はすべて海拔高（T. P）を表す。

9 本書記載の遺物実測図の断面は、土師器・土師質系のもの一白、須恵器・須恵質系のもの一黒とした。

10 確認調査で得た出土遺物及び図面・写真是三木市教育委員会において保管している。

11 確認調査及び整理作業にあたっては、下記の機関・諸氏にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

兵庫県教育委員会文化財課、兵庫県豊かな森づくり課、兵庫県立三木山森林公園管理事務所、
兵庫森林管理署、公益財団法人三木山人と馬とのふれあいの森協会、大村喬、鐵英記、宮田逸民、山本三郎

目 次

巻頭図版

序

例言

第1章 平成20・22・23年度の国庫補助による発掘調査

　第1節 三木市の位置と環境 ······ ······ ······ ······ ······ 1

　第2節 平成20・22・23年度の発掘調査 ······ ······ ······ 3

第2章 調査の成果

　第1節 加佐八ヶ坪散布地 ······ ······ ······ ······ ······ 5

　第2節 這田村法界寺山ノ上付城跡 ······ ······ ······ 16

　第3節 宿原大池1号窯・宿原大池2号窯・宿原大池遺跡 ······ 29

　第4節 八幡谷ノ上明石道付城跡B・C ······ ······ 43

　第5節 高木大山付城跡・高木大山土塁A ······ ······ 55

　第6節 二位谷奥付城跡C ······ ······ ······ 64

図版

抄録

挿図目次

図 1	三木市の位置	1
図 2	平成20・22・23年度国庫補助事業による調査位置図	4
図 3	加佐八ヶ坪散布地 調査位置図	5
図 4	グリッド配置図	6
図 5	出土遺物 (S=1/2)	9
図 6	グリッド断面図 1	10
図 7	グリッド断面図・平面図 2	11
図 8	グリッド断面図 3	12
図 9	グリッド断面図 4	13
図10	グリッド断面図 5	14
図11	グリッド断面図 6	15
図12	這田村法界寺山ノ上付城跡 位置図	16
図13	トレンチ配置図	17
図14	T 1 平面・断面図	19
図15	T 2 平面・断面図	20
図16	T 3 平面・断面図	21
図17	T 4 平面・断面図	22
図18	T 5 平面・断面図	23
図19	T 6 平面・断面図	24
図20	T 7 平面・断面図	25
図21	出土遺物 (S=1/3)	27
図22	宿原大池 1号窯・宿原大池 2号窯・宿原大池遺跡 位置図	29
図23	トレンチ配置図	30
図24	T 1 平面・断面図	32
図25	T 2 平面・断面図	33
図26	T 3 平面・断面図	34
図27	T 4 平面・断面図	34
図28	T 5 平面・断面図	35
図29	T 6 平面・断面図	36
図30	T 7 平面・断面図	36
図31	T 8 平面・断面図	37
図32	T 9 平面・断面図	38
図33	出土遺物 (S=1/3)	41
図34	八幡谷ノ上明石道付城跡B・C 位置図	43
図35	トレンチ配置図	44
図36	T 1 平面・断面図	46
図37	T 2 平面・断面図	47

図38	T 3 平面・断面図	4 8
図39	T 4 平面・断面図	4 9
図40	T 5 平面・断面図	5 0
図41	T 6 平面・断面図	5 1
図42	T 7 平面・断面図	5 2
図43	T 8 平面・断面図	5 3
図44	高木大山付城跡・高木大山土壘A	5 5
図45	トレーニング配置図	5 6
図46	T 1 平面・断面図	5 8
図47	T 2 平面・断面図	5 9
図48	T 3 平面・断面図	6 0
図49	T 4 平面・断面図	6 1
図50	二位谷奥付城跡C 位置図	6 3
図51	トレーニング配置図	6 4
図52	T 1・2 平面・断面図	6 6
図53	T 3 平面・断面図	6 7
図54	T 4・5 平面・断面図	6 8
図55	T 6・7 平面・断面図	6 9

表目次

表 1	平成20・22・23年度国庫補助事業による調査一覧	3
表 2	出土遺物観察表	2 8
表 3	出土遺物観察表	4 2

図版目次

巻頭図版1	這田村法界寺山ノ上付城跡 T 1 堀土層断面（東から）	
	八幡谷ノ上明石道付城跡B T 4 主郭西辺土壘（北東から）	
巻頭図版2	高木大山付城跡 T 2 東端横堀断ち割り状況（南東から）	
	二位谷奥付城跡C T 2 西辺土壘断ち割り状況土層断面（北から）	
図版 1	三木城跡・付城跡・多重土壘分布図	G 8 西壁（東から）
図版 2	多重土壘・旧道復元図	G 14 東壁（西から）
図版 3	加佐八ヶ坪散布地（1） 調査前（北から） G 4 西壁（東から） G 6 西壁（東から）	図版 5 加佐八ヶ坪散布地（3） G 15 西壁（東から） G 19 東壁（西から） G 23 東壁（西から）
図版 4	加佐八ヶ坪散布地（2） G 7 西壁（東から）	図版 6 這田村法界寺山ノ上付城跡（1） 航空写真（上が北）

T 1	全景（南から）	航空写真（上が北）
T 2	全景（南から）	T 1 全景（南西から）
図版7	這田村法界寺山ノ上付城跡（2）	T 1 全景（北東から）
T 3	全景（南から）	図版17 高木大山付城跡・高木大山土壙A（2）
T 4	全景（南から）	T 2 西側全景（北西から）
T 5	全景（西から）	T 2 東側全景（北西から）
図版8	這田村法界寺山ノ上付城跡（3）	T 2 西端横堀土層断面（西から）
T 6	全景（東から）	図版18 高木大山付城跡・高木大山土壙A（3）
T 7	全景（南東から）	T 2 曲輪盛土（北西から）
図版9	宿原大池1号窪・宿原大池2号窪・宿原大池遺跡（1）	T 2 東端横堀土層断面（南から）
北沢遠景（北東から）		T 2 曲輪盛土（南から）
東沢遠景（南西から）		図版19 高木大山付城跡・高木大山土壙A（4）
T 1	全景（南から）	T 3 全景（東から）
図版10	宿原大池1号窪・宿原大池2号窪・宿原大池遺跡（2）	T 3 西端横堀断ち割り状況（西から）
T 1	西壁土層断面（北東から）	T 3 西端横堀土層断面（南から）
T 2	全景（南から）	図版20 高木大山付城跡・高木大山土壙A（5）
T 3	表土除去状況（東から）	T 4 全景（南から）
図版11	宿原大池1号窪・宿原大池2号窪・宿原大池遺跡（3）	T 4 全景（北から）
T 4	全景（北から）	T 4 高木大山土壙A 土層断面（北西から）
T 5	南西隅断ち割り状況（南東から）	T 4 横堀土層断面（西から）
T 6	全景（北東から）	図版21 二位谷奥付城跡C（1）
図版12	宿原大池1号窪・宿原大池2号窪・宿原大池遺跡（4）	近景（北から）
T 7	全景（北東から）	T 1 全景（北から）
T 8	全景（南東から）	T 2 全景（東から）
T 9	全景（北から）	図版22 二位谷奥付城跡C（2）
図版13	八幡谷ノ上明石道付城跡B・C（1）	T 3 全景（北から）
付城跡B	近景（北西から）	T 4 全景（東から）
T 1	全景（南から）	T 5 全景（西から）
T 2	全景（南から）	図版23 二位谷奥付城跡C（3）
図版14	八幡谷ノ上明石道付城跡B・C（2）	T 4 西辺土壙 土層断面（北から）
T 3	全景（北東から）	T 5 溝 土層断面（北から）
T 5	全景（東から）	図版24 二位谷奥付城跡C（4）
T 6	全景（南西から）	T 6 全景（東から）
図版15	八幡谷ノ上明石道付城跡B・C（3）	T 7 全景（東から）
T 7	全景（南西から）	T 7 溝 土層断面（北から）
T 8	全景（南西から）	図版25 這田村法界寺山ノ上付城跡 出土遺物
T 7	断ち割り状況（南東から）	図版26 加佐八ヶ坪散布地 宿原大池1号窪・宿原大池2号窪・宿原大池遺跡 出土遺物
図版16	高木大山付城跡・高木大山土壙A（1）	

第1章 平成20・22・23年度の国庫補助による発掘調査

第1節 三木市の位置と環境

1 地理的環境

三木市のある兵庫県は、瀬戸内海から日本海に渡って広がる県域である。三木市は、兵庫県の南東部に位置する内陸の都市である。平成17年10月に北東に隣接する美嚢郡吉川町と合併し新たな三木市となっている。東及び南は神戸市、南西は加古郡稲美町、西は加古川市、北西は小野市、北は加東市、北東は三田市と境界を接している。近世以前の旧分国では、播磨国美嚢郡に属する。

三木市の地形は、市域の大部分を丘陵・台地・平野で占め、わずかな山地とからなる。市の東部は帝釈山地さらには六甲山地へと続き市の西部は丘陵や台地が広がる。これらの山地や丘陵に水源を発した美嚢川や支流である志染川・小川川・淡河川などの美嚢川水系は西流し、別所町正法寺付近で加古川に合流する。加古川は瀬戸内海に注ぎ、古くから河川交通が盛んであった。市域はこれらの河川によって形成された沖積平野及び河岸段丘からなる。

丘陵と台地は、市北東部の美嚢川より北の小野丘陵、美嚢川と小川川に挟まれた吉川丘陵、小川川と志染川に挟まれた細川丘陵、志染川の南に展開する志染丘陵、志染川上流の帝釈山地、市西部の美嚢川南岸より明石市・加古郡稲美町へ広がる東播台地の6つの地域に分けられる。これらの丘陵や台地、河川の浸食作用によって形成された開析谷を縫うように有馬道・明石道・兵庫道・姫路道などの陸上交通が発達してきた。

2 歴史的環境

三木市において、最も古く人間の行動が確認できるのは旧石器時代である。美嚢川を望む段丘上の別所町和田の白長大神社散布地、与呂木宮ノ元遺跡で後期旧石器が出土している。続く縄文時代は、志染町の窟屋1号墳下層や戸田遺跡で、土坑を検出し、その中から後期の土器が出土している。周辺の段丘上に旧石器及び縄文時代の遺跡が存在するものと思われる。

弥生時代は、市西部の美嚢川の北側丘陵で、年ノ神遺跡や和田神社遺跡などの中期から後期にかけての集落が確認されている。また、美嚢川と志染川が合流する東側段丘や志染川南側段丘でも、与呂木宮ノ元遺跡や与呂木大畠遺跡、宿原岡ノ下遺跡、小戸田遺跡などの中期から後期の集落が確認されている。

古墳時代になると、台地や斜面地、段丘の至るところに中期から後期にかけて数多くの古墳が築かれるようになる。美嚢川と加古川の合流地点、市西部の美嚢川に臨む南側及び北側丘陵、志染川の南側丘陵に集中している。前期には市内最大の全長91mの前方後円墳である愛宕山古墳（三木市指定文化財）が築かれている。年ノ神6号墳からは三角板革綴短甲、窟屋1号墳では金銅装單鳳環頭太刀柄頭が出土しており、中央との繋がりが注目されている。集落は、西ヶ原遺跡とその西側段丘で久留美田井野遺跡が確認されている。



図1 三木市の位置

奈良時代以降、三木の特色となる窯業生産が始まる。最盛期は12世紀の平安時代後期鎌倉時代初期で、尊勝寺や鳥羽離宮などの院に関係する寺院や邸宅に瓦を供給していたことが確認されている。窯跡は、跡部・久留美・平井・与呂木・宿原に分布している。

南北朝時代には、古代からの名刹の伝承をもつ高男寺庵寺遺跡より、「貞和二季」(1346)銘の入った瓦が出土している。また、三木合戦時の付城跡と考えられる和田村四合谷村ノ口付城跡からは、「嘉暦二年」(1327)銘の入った硯をはじめ、南北朝期の遺物が数多く出土していることから、暦応2年(1339)に南朝方の丹生山城を北朝方の赤松氏が攻めるために集結した「志染軍陣」の可能性が指摘されている。

室町時代になると播磨の守護を赤松氏が務めている。赤松満祐によって6代将軍足利義教が殺害された嘉吉の乱により、山名氏にその座を奪われた。応仁の乱の後、赤松氏は播磨の守護に復帰するが、やがて赤松氏に代わって実権を握っていくのは有力被官であった。その中の別所氏は、東播磨で勢力を持ち、則治が15世紀後半に三木を本拠地とし、三木城を築城したと考えられる。三木城は、本丸・二の丸・新城・鷹尾山城・宮ノ上要害からなる。本丸では二分する堀を確認し、二の丸からは備前焼大甕群や建物跡、堀などの遺構を確認している。

中国地方への勢力拡大を目指す織田信長は、毛利氏を攻める足掛かりとして天正5年(1577)に播磨攻めを家臣の羽柴秀吉に命じた。当初、別所氏の当主長治は織田方に味方していたが、天正6年(1578)3月に織田方を離反し、毛利方に与した。織田方は三木城を攻略するために三木城の周囲に付城群を築いて包囲し、兵糧攻めをおこなった。付城は毛利氏からの兵糧搬入を阻止するために、状況に応じて増やされ、40余りの付城と南側の付城を繋ぐ土塁が築かれた。やがて、三木城内の兵糧が尽き、天正8年(1580)1月17日、城主長治が自刃して開城した。

その後、織田・豊臣の支配下となり、秀吉の家臣が相次いで城主となり、関ヶ原合戦後は、姫路城主池田氏の家臣が城主となって三木城は存続したが、江戸幕府による元和元年(1615)一国一城令の政策に伴って、廢城となった。以後、城下の三木町は在郷町と性格を変え、江戸時代中期以降多くの大工職人が三木町に移住し、大工道具の需要が増えたことで金物職人も増加していく、金物の町として繁栄し現在に至っている。

(参考文献)

- 兵庫県教育委員会 1994 『与呂木遺跡』 兵庫県文化財調査報告第133冊
1996 『西ヶ原遺跡』 兵庫県文化財調査報告第151冊
1996 『田井野遺跡』 兵庫県文化財調査報告第154冊
1999 『久留美・跡部窯跡群』 兵庫県文化財調査報告第186冊
2002 『年ノ神古墳群』 兵庫県文化財調査報告第234冊
2002 『年ノ神遺跡』 兵庫県文化財調査報告第235冊
2002 『和田神社遺跡』 兵庫県文化財調査報告第238冊
2009 『窟屋1号墳』 兵庫県文化財調査報告第353冊
2012 『吉田住吉山遺跡』 兵庫県文化財調査報告第409冊

三木市 1970 『三木市史』

三木市教育委員会 2000 『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』II 三木市文化研究資料第14集

2001 『三木市遺跡分布地図』三木市文化研究資料第17集

2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』三木市文化研究資料第25集

三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会 2010 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』三木市文化研究資料第23集 三木市教育委員会

第2節 平成20・22・23年度の発掘調査

1 調査一覧

平成20・22・23年度に実施した国庫補助事業による発掘調査は6件である(表1)。このうち、加佐八ヶ坪散布地は区画整理、宿原大池1号窯・宿原大池2号窯・宿原大池遺跡は宿原大池改修に伴う確認調査であった。そして、這田村法界寺山ノ上付城跡、八幡谷ノ上明石道付城跡B・C、高木大山付城跡・高木大山土里A、二位谷奥付城跡Cは、重要遺跡範囲確認調査である。

表1 平成20・22・23年度国庫補助事業による調査一覧

No.	遺跡名	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	調査後の措置	担当者
1	加佐八ヶ坪散布地	加佐地内	平成20年11月6日 ～21年1月14日	69 m ²	明確な遺構なし 須恵器、土師器	慎重工事	松村
2	這田村法界寺山ノ 上付城跡	別所町高木三木 山国有林 237林 班イ小班	平成21年2月12日 ～3月30日	69.3 m ²	テラス状遺構、堀、 土壘、弥生土坑 弥生土器	現状保存	畠中
3	宿原大池1号窯・ 宿原大池2号窯・ 宿原大池遺跡	自由が丘本町1 丁目45番	平成22年11月15日 ～12月2日	51.5 m ²	ピット 須恵器、土師器、 瓦、窯壁	慎重工事	金松
4	八幡谷ノ上明石道 付城跡B・C	福井字三木山 2465-1	平成23年3月8日 ～3月24日	73.5 m ²	土壘、溝 弥生土器	現状保存	金松
5	高木大山付城跡・ 高木大山土里A	別所町高木三木 山国有林 236林 班イ小班・237林 班イ小班	平成23年11月7日 ～11月29日	55 m ²	堀、土壘 遺物なし	現状保存	金松
6	二位谷奥付城跡C	さつき台2丁目 (さつき台緑地)	平成24年2月13日 ～3月3日	72 m ²	溝、土壘 遺物なし	現状保存	金松

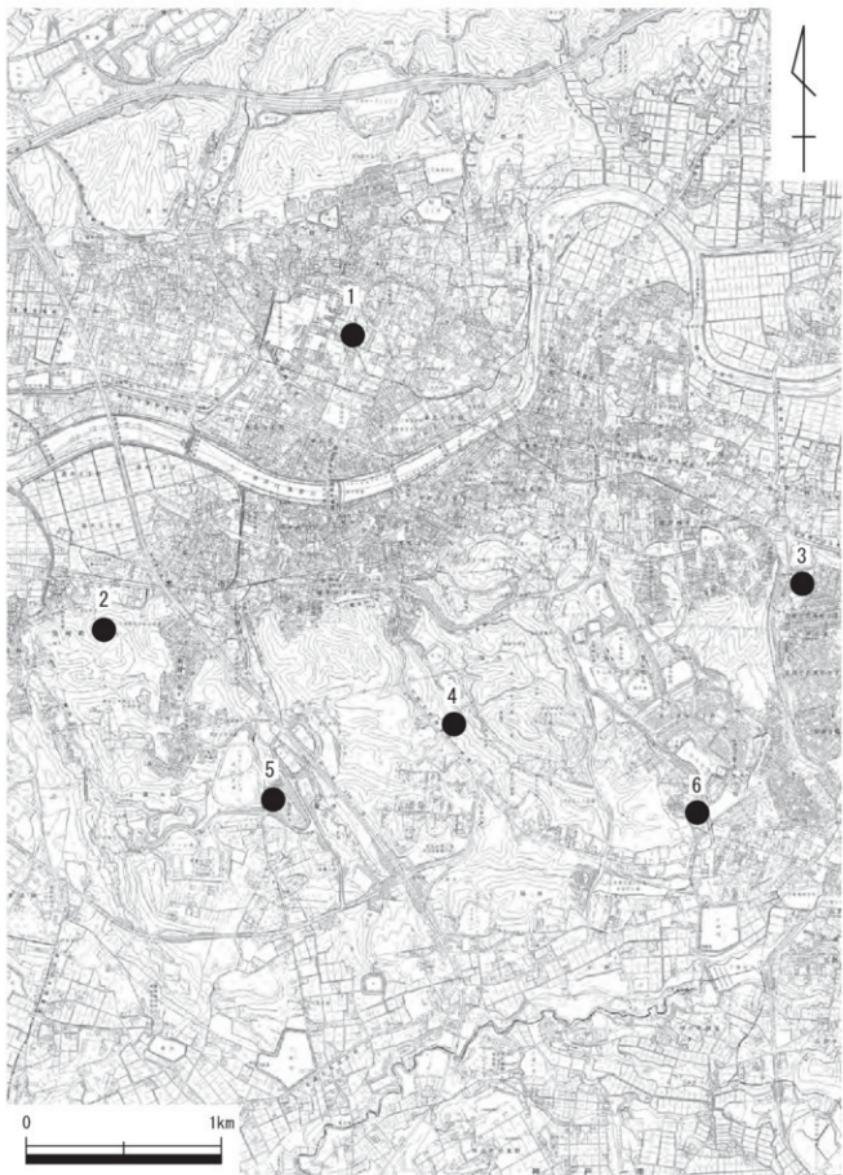


図2 平成20・22・23年度国庫補助による調査位置図

第2章 調査の成果

第1節 加佐八ヶ坪散布地

1 はじめに

加佐八ヶ坪散布地調査は、加佐地内において、加佐地区の区画整理事業に先立って実施した。当散布地は美義川右岸から北へ約750mの平地部に位置する（図3）。周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、現地踏査の結果、遺物の散布を確認し、地下構造が存在する可能性があつたことから調査を実施した。

現地調査は平成20年11月6日～平成21年1月14日に実施した。調査面積は69m²である。

2 調査の方法

区画整理事業地内に遺物の散布が見られることから、事業地内に1.4～1.5m×2.0mのグリッドを23箇所設定し（図4）、重機掘削のあと人力による面精査を行つた。

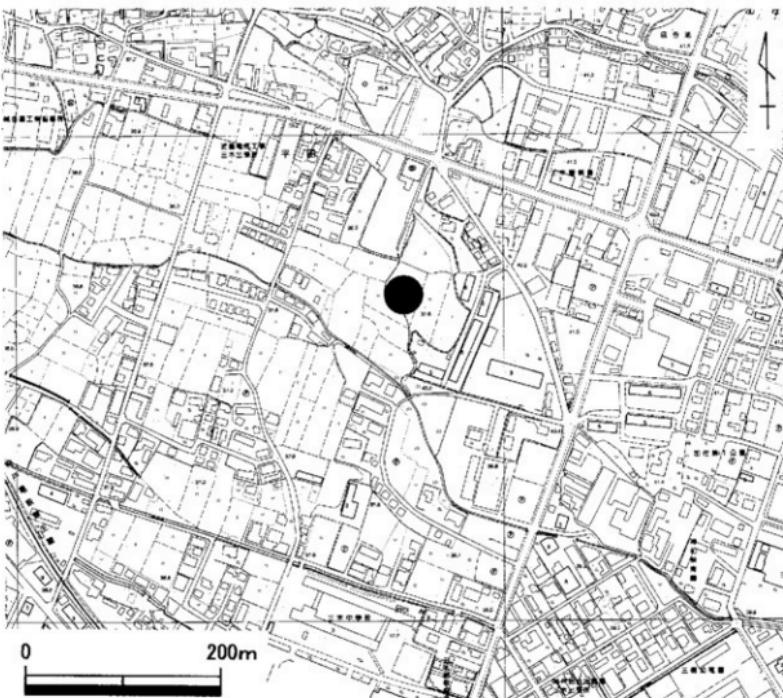


図3 加佐八ヶ坪散布地 調査位置図

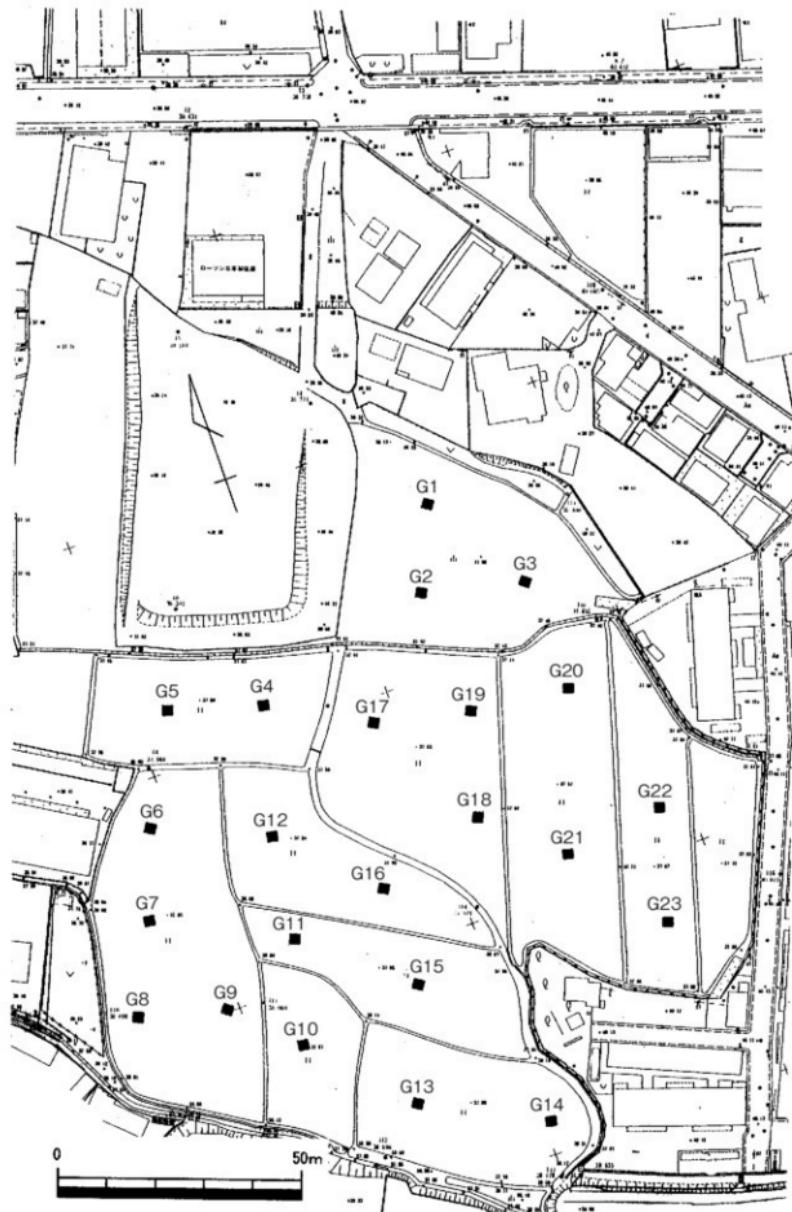


図4 グリッド配置図

3 調査の結果（図6～11）

- G 1 事業地北端に設定したグリッドである。地表下約1.1mの褐色粘質土（第6層）が地山とみられるが、激しい湧水のため、明確には確認できなかった。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G 2 G 1の約18m南側に設定したグリッドである。地表下約1.2mの褐色粘質土（第6層）が地山とみられるが、激しい湧水のため、明確には確認できなかった。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G 3 G 2の約20m東側に設定したグリッドである。地表下約1.2mの黄灰色細砂質土（第9層）が地山とみられるが、激しい湧水のため、明確には確認できなかった。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G 4 事業地中央やや北寄りの西側に設定したグリッドである。地表下0.65mの褐色細砂粘質土（第6層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、褐色粘質土（第5層）から須恵器片が出土している。
- G 5 G 4の約20m西側に設定したグリッドである。地表下0.6mの褐色細砂粘質土（第7層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、褐色粘質土（第6層）から須恵器片・土師器片が出土している。
- G 6 G 5の約24m南側に設定したグリッドである。グリッド南西隅の地表下約0.45mにおいて、黄褐色土（第5層）・にぶい黄色粘性細砂質土（第9層）の上面から土坑状の暗灰黄色砂礫（第7層）が検出された。遺物は出土していない。遺構の可能性はあるが、判然としない。
- G 7 G 6の約20m南側に設定したグリッドである。地表下約0.4mにおいて、灰黄色粘性砂質土（第5層）・暗灰黄色粘性砂質土（第6層）となる。その下層は礫を含むにぶい黄褐色砂層（第7層）・黄褐色細砂（第8層）となる。氾濫原に伴うものと考えられる。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G 8 事業地南西端に設定したグリッドである。地表下約0.3mにおいて、にぶい黄褐色砂層（第4層）となり、その下層は灰黄褐色砂礫（第5層）となる。氾濫原に伴うものと考えられる。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G 9 G 8の約20m東側に設定したグリッドである。地表下約0.3mにおいて、暗灰黄色粘性砂質土（第4層）の上面からにぶい黄褐色粗砂（第6層）が検出された。遺構ではなく、氾濫原に伴うものと考えられる。遺物は出土しなかった。
- G 10 G 9の約17m東南東側に設定したグリッドである。地表下約0.25mにおいて、にぶい黄褐色粘質土（第4層）となり、以下同系色の粘質土・礫層が堆積する。氾濫原に伴うものと考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、黄褐色粘質土（第3層）から須恵器小皿と土師器片、暗灰黄色粗砂礫（第6層）から土師器片が出土している。
- G 11 G 10の約20m北側に設定したグリッドである。地表下約0.4mにおいて、にぶい黄褐色粘質土（第8層）の上面から黄褐色粘土（第5層）が検出され、その下層は層中に黒褐色粘質土を帶状に含むにぶい黄橙色粘質土（第6層）となっている。氾濫原に伴うものと考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、褐色土（第2層）から土師器片が出土して

いる。

- G12 G11 の約 20m 北側に設定したグリッドである。地表下約 0.55m の灰黄褐色粘質土（第 7 層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、灰黄褐色砂質土（第 4 層）から須恵器片が出土している。
- G13 事業地南端中央東寄りに設定したグリッドである。地表下約 0.3mにおいて、灰黄褐色砂礫（第 4 層）となり、その下層はにぶい黄褐色砂礫（第 5 層）となる。氾濫原に伴うものと考えられる。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G14 事業地南東端に設定したグリッドである。地表下約 0.3mにおいて、灰黄褐色砂礫（第 5 層）となり、その下層は灰褐色砂（第 6 層）となる。氾濫原に伴うものと考えられる。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G15 G13 の約 25m 北側に設定したグリッドである。地表下約 0.4mにおいて、灰黄褐色砂礫（第 4 層）となり、その下層は灰褐色砂（第 5 層）となる。氾濫原に伴うものと考えられる。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G16 G15 の約 20m 北北西側に設定したグリッドである。地表下約 0.55m の灰黄褐色粘質土（第 7 層）が地山と考えられる。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。
- G17 事業地中央やや北寄りに設定したグリッドである。地表下約 0.85m の灰オリーブ極細砂（第 8 層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、黄灰色砂質土（第 4 層）・黄灰色粘性砂質土（第 5 層）から須恵器片・土師器片、灰黄褐色粘土（第 6 層）から土師器片が出土した。
- G18 事業地中央やや東寄りに設定したグリッドである。地表下約 0.85m の暗灰黄色粘質土（第 8 層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、褐灰黄色粘質土（第 6 層）から須恵器片・土師器片が出土した。
- G19 G18 の約 20m 北側に設定したグリッドである。地表下約 1.0m の灰色極細砂（第 8 層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、灰黄褐色粘土（第 6 層）から須恵器片・土師器片・磁器片が出土した。
- G20 G19 の約 20m 東側に設定したグリッドである。地表下約 0.9m の褐灰色粘土（第 8 層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、黄灰色粘土（第 7 層）から土師器片が出土した。
- G21 G20 の約 33m 南側に設定したグリッドである。地表下約 0.8m の暗灰黄色粘土（第 6 層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、暗灰黄色粘質土（第 4 層）・灰黄褐色粘質土（第 5 層）から須恵器片・土師器片が出土した。
- G22 事業地中央東端に設定したグリッドである。地表下約 0.9m の黄灰色粘土（第 7 層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、褐灰黄色粘土（第 6 层）から土師器片が出土した。
- G23 事業地南東端に設定したグリッドである。地表下約 0.95m の暗灰黄色粘土（第 8 層）が地山と考えられる。遺構は検出されなかった。遺物は、褐灰黄色粘性砂質土（第 4 層）から土師器片、灰黄褐色粘性砂質土（第 5 層）から須恵器片・土師器片、暗灰黄色粘質土（第 6 層）から土師器片が出土した。

4 出土遺物（図5）

コンテナケース 0.5 箱分の遺物が出土した。その大半が須恵器・土師器で、わずかに磁器が含まれる。いずれも小片であり、実測可能な遺物は須恵器小皿の 1 個体だけであった。

須恵器小皿は G10 第 3 層からの出土である。復元口径 5.4 cm、復元底径 2.95 cm、器高 1.4 cm である。底部が糸切りにより切り離され、口縁部はわずかに外反する。森内秀造氏が行なった久留美窯跡群の分類（森内 1999）によると小皿 I b² に該当し、12 世紀頃のものと考えられる。

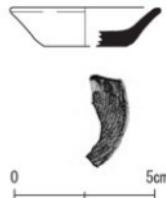


図5 出土遺物 (S=1/2)

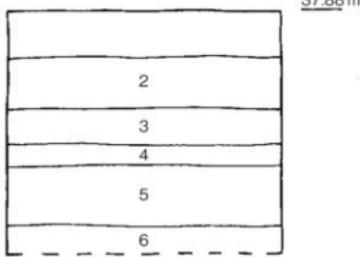
5まとめ

事業地の南側に設定した G 7・8・9・10・11・13・14・15 では、現地表下約 0.3~0.5 m で砂礫層となり、美嚢川右岸の氾濫原と考えられる。その他のグリッドでは砂礫層は見られず、灰黄褐色または黄灰色系の地山となり、その上層から摩滅した須恵器片や土師器片がわずかではあるが出土した。遺物の時期は、おおむね 12 世紀頃と考えられる。遺物が出土したグリッドは、事業地の中央部に設定したほぼすべてのグリッドで見られるが、明確な遺構の検出はなかった。氾濫原に近いことから生活に適さなかつたものと考えられ、事業地の北側に遺跡が存在する可能性が推察される。

〈引用文献〉

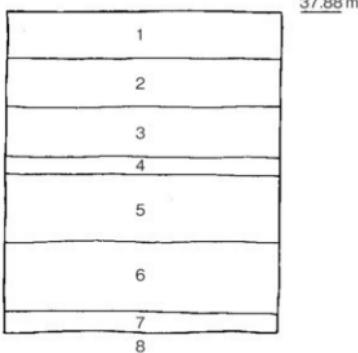
森内秀造 1999 「出土土器の検討」『久留美・跡部窯跡群』 兵庫県教育委員会

G1 東壁



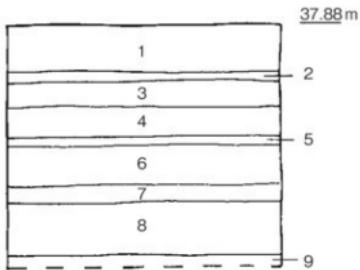
- 1 腐食層 雜草の根がらみ層
 2 耕土
 3 灰色粘性細砂質土 (5Y5/1)
 4 灰色粘性砂質土 (7.5Y5/1)
 5 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1)
 6 褐灰色粘質土 (10YR4/1)

G2 東壁



- 1 腐食層 雜草の根がらみ層
 2 耕土
 3 灰色粘性細砂質土 (5Y5/1)
 4 灰色粘性砂質土 (7.5Y5/1)
 5 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1)
 6 褐灰色粘質土 (10YR4/1)
 7 灰色粗砂 (10Y5/1)
 8 灰色粘質土 (5Y4/1)

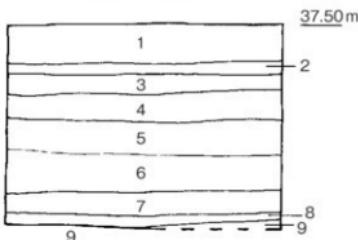
G3 東壁



- 1 耕土
 2 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)
 3 灰黄色砂礫土 (10YR5/2) 3~5cm大的礫
 4 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)
 5 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)
 6 褐灰色粘質土 (10YR4/1)
 7 黄灰色細砂 (2.5Y5/1)
 8 黑褐色粘質土 (10YR3/1)
 9 黄灰色細砂質土 (2.5Y4/1)

0 1m

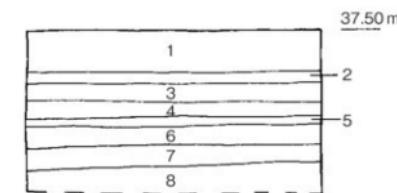
G4 西壁



- 1 耕土
 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 床土
 3 褐灰色土 (7.5YR4/1) 1cm以下の小礫
 4 灰黄褐色土 (10YR5/2) 少量含む
 5 褐灰色粘質土 (10YR5/1) Mn 多く含む
 6 褐灰色細砂粘質土 (10YR6/1) Fe 多く含む
 7 褐灰色細砂 (7.5YR6/1) Fe 多く含む
 8 灰黄色粘性極細砂 (2.5Y6/2) Fe 多く含む
 9 灰色砂層 (5Y5/1) Fe 多く含む
 Mn 少量含む

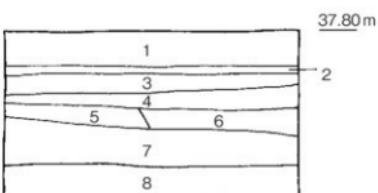
図6 グリッド断面図1

G5 西壁



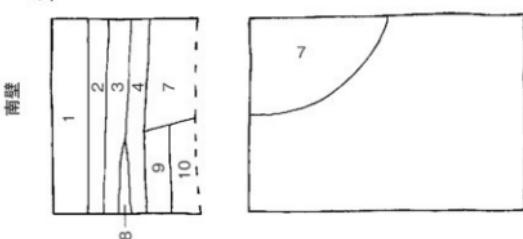
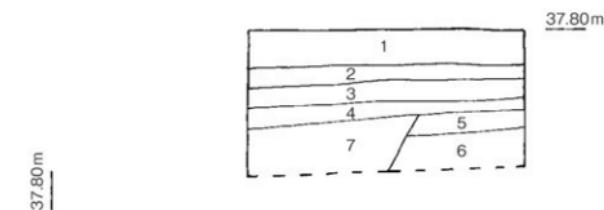
- | | |
|-------------|-----------|
| 1 耕土 | |
| 2 にぶい黄褐色土 | (10YR5/3) |
| 3 暗灰色土 | (7.5Y4/1) |
| 4 黄褐色土 | (2.5Y5/2) |
| 5 黄褐色土 やや粘性 | (10YR5/2) |
| 6 黄褐色粘性土 | (10YR5/1) |
| 7 黄褐色粘性土 | (10YR6/1) |
| 8 灰色砂層 | (5Y5/1) |
- 1cm以下の小礫 少量含む
Mn 多く含む
Mn 少量含む
Fe 多く含む
Fe Mn 沈着

G7 西壁



- | | |
|------------|-----------|
| 1 耕土 | |
| 2 暗灰色土 | (10YR4/4) |
| 3 オリーブ褐色土 | (2.5Y4/3) |
| 4 黄褐色砂質土 | (2.5Y5/3) |
| 5 灰黄色粘性砂質土 | (2.5Y6/2) |
| 6 黄褐色粘性砂質土 | (2.5Y5/2) |
| 7 にぶい黄褐色砂層 | (10YR5/3) |
| 8 黄褐色細砂 | (2.5Y5/3) |
- 5~10cm大の礫 混じる
5~10cm大の礫 混じる

G6 西壁

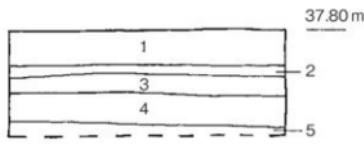


- | | |
|---------------|------------|
| 1 耕土 | |
| 2 にぶい黄褐色土 | (10YR4/3) |
| 3 暗灰色土 | (10YR4/2) |
| 4 黄褐色土 | (10YR5/6) |
| 5 黄褐色土 | (2.5Y5/4) |
| 6 黄褐色土 | (2.5Y5/3) |
| 7 暗灰黄色砂礫 | (2.5Y5/2) |
| 8 黄褐色土 | 1~5cmの礫 含む |
| 9 にぶい黄色粘性細砂質土 | (10YR5/2) |
| 10 黄褐色粘性土 | (2.5Y6/3) |

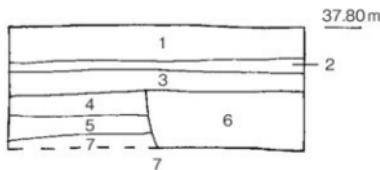


図7 グリッド断面図・平面図2

G8 西壁



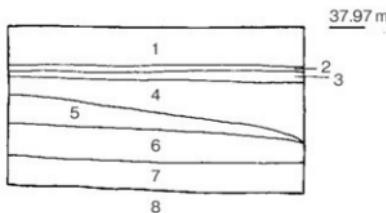
G9 東壁



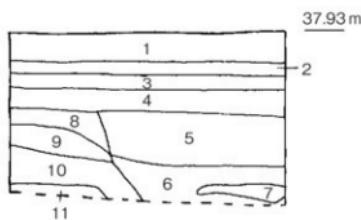
- 1 耕土
- 2 褐色土 (10YR4/4)
- 3 黄褐色土 (10YR5/6)
- 4 にぶい黄褐色砂層 やや粘性あり (10YR5/3)
- 5 灰黄褐色砂礫 (10YR5/2)

- 1 耕土
- 2 褐色土 (10YR4/4)
- 3 灰黄褐色土 (10YR5/2)
- 4 暗灰黄色粘性砂質土 (2.5Y5/2)
- 5 にぶい黄橙色粗砂 (10YR6/3)
- 6 にぶい黄褐色粗砂 (10YR5/3)
- 7 灰黄褐色砂礫 (10YR5/2)

G10 西壁



G11 西壁



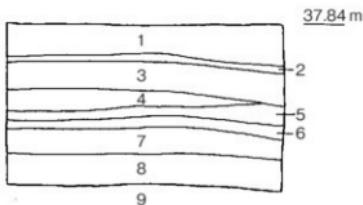
- 1 耕土
- 2 褐色土 (10YR4/4)
- 3 黄褐色粘质土 (10YR5/6)
- 4 にぶい黄褐色粘质土 (10YR5/3)
- 5 にぶい黄褐色砂质土 (10YR5/3)
- 6 暗灰黄色粗砂砾层 (2.5Y5/2) 3~10cm大的砾
- 7 にぶい黄褐色粘质土 (10YR5/4)
- 8 灰黄褐色粗砂砾层 (10YR5/2) こぶし大の砾 含む

- 1 耕土
- 2 褐色土 (10YR4/4)
- 3 灰黄褐色土 (10YR4/2)
- 4 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4)
- 5 黄褐色粘土 (2.5Y5/3)
- 6 にぶい黄橙色粘质土 (10YR6/4)
- 7 黑褐色粘质土 (10YR3/2)
- 8 にぶい黄褐色粘质土 (10YR5/3)
- 9 にぶい黄色粗砂质土 (2.5Y6/3) 2~5cm大的砾 (10YR5/2) 混じる
- 10 灰黄褐色砂 (10YR5/2)
- 11 暗褐色粗砂 (10YR3/3)

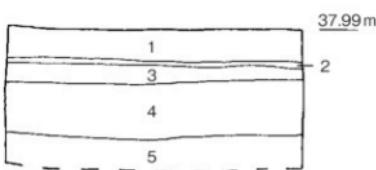


図8 グリッド断面図3

G12 西壁



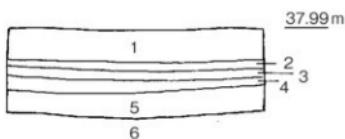
G13 西壁



1	耕土
2	褐色土 (7.5YR4/3)
3	灰黄褐色土 (10YR5/2)
4	灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)
5	にぶい黄橙色土 (10YR6/4)
6	黄褐色細砂質土 (2.5Y6/2)
7	灰黄褐色粘質土 (10YR6/2)
8	にぶい黄色細砂質土 (2.5Y6/3)
9	にぶい黄橙色細砂質土 (10YR7/4)

1	耕土
2	灰黄褐色土 (10YR4/2)
3	黄褐色土 (10YR5/6)
4	灰黄褐色砂礫 (10YR5/2) 2~10cm大の礫
5	にぶい黄褐色砂礫 (10YR5/3) 2~10cm大の礫

G14 東壁



G15 西壁

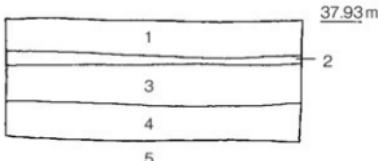
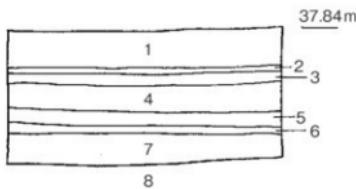


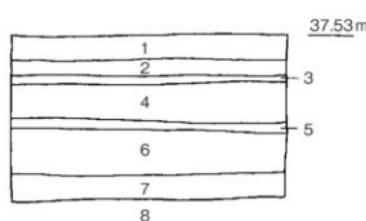
図9 グリッド断面図4

G16 西壁



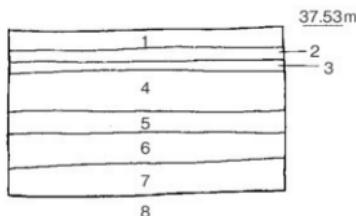
- 1 耕土
 2 褐色土 (10YR4/4)
 3 灰黄褐色土 やや粘性あり (10YR5/2)
 4 暗灰黄色砂質土 やや粘性あり (2.5Y5/2)
 5 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)
 6 黄褐色粘土 (10YR5/6)
 7 灰黄褐色粘土 (10YR5/2)
 8 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2)

G17 東壁



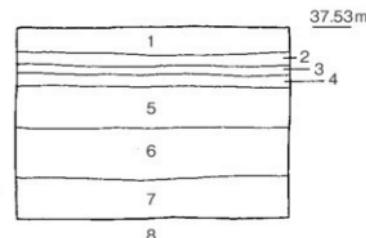
- 1 耕土
 2 耕土
 3 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)
 4 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)
 5 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y5/1)
 6 灰黄褐色粘土 (10YR4/2)
 7 黄灰色粘土 (2.5Y4/1)
 8 灰オリーブ極細砂 (5Y5/2)

G18 東壁



- 1 耕土
 2 耕土
 3 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)
 4 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)
 5 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y5/1) Mn 少量 混じる
 6 揭灰色粘性砂質土 (10YR5/1) Mn 少量 混じる
 7 黄灰色粘性極細砂 (2.5Y5/1) Fe 多く含む Mn 少量含む
 8 暗灰黄色粘土 (2.5Y5/2) Fe Mn 多く含む

G19 東壁



- 1 耕土
 2 耕土
 3 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)
 4 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)
 5 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y4/1)
 6 灰黄褐色粘土 (10YR4/2)
 7 揭灰色粘土 (10YR4/1)
 8 灰色極細砂 やや粘性あり (7.5Y5/1) Fe 多く混じる

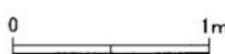
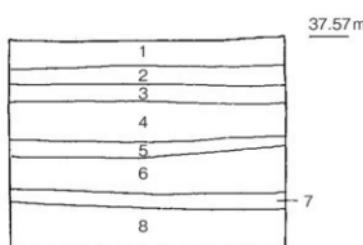
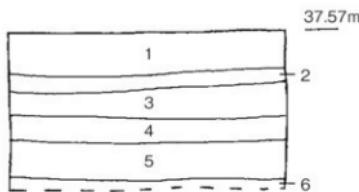


図 10 グリッド断面図 5

G20 東壁

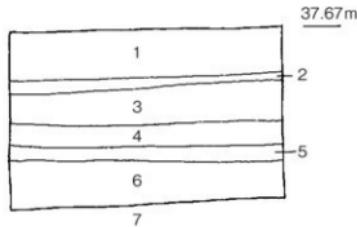


G21 東壁



- 1 耕土
2 耕土
3 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)
4 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y5/1)
5 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) Mn 混じる
6 灰黄褐色粘土 (10YR4/2) Fe 沈着 Mn 混じる
7 黄灰色粘土 (2.5Y4/1)
8 褐灰色粘土 (10YR4/1)

G22 東壁



- 1 耕土
2 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)
3 褐灰色粘性砂質土 (10YR4/1)
4 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)
5 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)
6 褐灰色粘土 (10YR4/2) Mn 含む
7 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) Fe 含む

G23 東壁

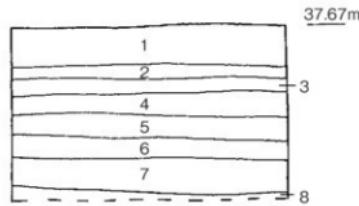


図11 グリッド断面図6

第2節 這田村法界寺山ノ上付城跡

1 はじめに

這田村法界寺山ノ上付城跡調査は、三木山国有林 237 林班い小班において、三木合戦関連遺跡の国史跡指定に向けて、その範囲や構造を確認するため実施した。

這田村法界寺山ノ上付城跡は、三木より姫路に向かう姫路道が通過する南側丘陵端にあたる法界寺の背後の山上に位置する付城跡である（図 12）。標高 78m、比高 43m である。

天正 7 年（1579）4 月に織田信忠の軍勢が築いた 6 箇所の付城の 1 つである可能性がある（三本市教育委員会 2012）。北東に位置する三木城及びその延長線上に羽柴秀吉の本陣平井山ノ上付城を見通すことができる。城主は『播磨鑑』・『別所軍記』によると、官部継潤と伝わっている。

現地調査は、平成 21 年 2 月 12 日～3 月 30 日に実施した。調査面積は 69.3 m² である。

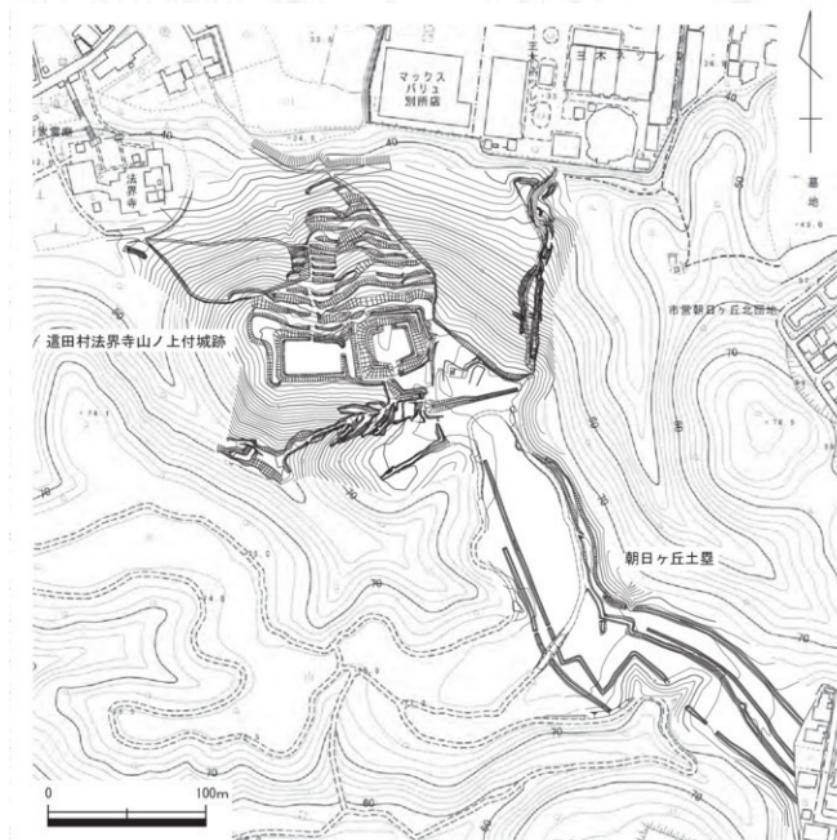


図 12 這田村法界寺山ノ上付城跡 位置図

2 繩張の概要（図 13）

這田村法界寺山ノ上付城跡は、東の主郭（I）、西の副郭（II）からなる本郭部、本郭部北側の谷部に展開する雑墳状曲輪群（III）と本郭部南側の土壙 a・b で区画された平坦地IV・Vの駐屯部からなる二重構造の付城である。主郭南側に馬出状の虎口空間を配している。城域面積は、前者は約 16700 m²であり、付城群の中で 3 番目の規模を誇る（三木市教育委員会 2012）。南東部において、朝日ヶ丘土壙と接続する。

3 調査の方法

今回の調査は、幅 1.5m、長さ 5~10.2m のトレンチ 7 箇所を設定した（図 13）。人力掘削は委託し、表土除去、土層断面・遺構面の精査及び遺構掘削などを行った。トレンチ配置図（1/500）・遺構平面図（1/50）は委託し、トータルステーション測量を行った。土層断面図（1/20）は手実測を行った。

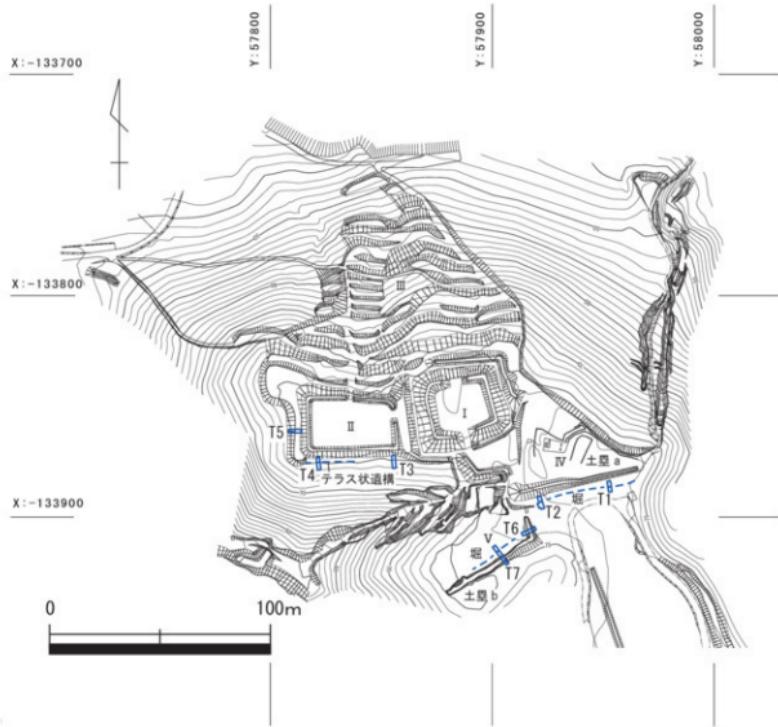


図 13 トレンチ配置図

4 調査の結果

T 1 (図 14)

土壘 a の東側南裾に幅 1.5m、長さ 5m のトレンチを設定した。トレンチ北側で、黄橙色土のベース土を掘り込むかたちで、幅 2.6m 以上、城外側からの深さ 0.9m の堀を検出した。堀の埋土は、主に明黄褐色～橙色系土であり、土壘の崩落土と考えられる。

T 2 (図 15)

土壘 a の西側南裾に幅 1.5m、長さ 5.7m のトレンチを設定した。トレンチ北側で、明黄褐色土のベース土を掘り込むかたちで、幅 2.5m 以上、城外側からの深さ 0.65m の堀を検出した。堀の埋土は、主に明黄褐色～橙色系土であり、土壘の崩落土と考えられる。トレンチ北端において、幅 0.4m にわたり土壘の基底部と考えられる明褐色土を確認した。

なお、付城遺構ベース土の下層の地山とみられる面において、径約 1m、深さ 0.3m の土坑を検出した。弥生時代中期後葉の土器片が多く含まれることから、この時期の遺構と考えられる。

T 3 (図 16)

副郭を囲む土壘の南東裾部に幅 1.5m、長さ 5.7m のトレンチを設定した。トレンチ北端において、幅 0.4m にわたり土壘の基底部と考えられる明黄褐色土を確認した。土壘以南は地山がベースとなり、緩やかに下方に傾斜していく。

T 4 (図 17)

副郭を囲む土壘の南西裾部に幅 1.5m、長さ 5.6m のトレンチを設定した。トレンチ北端において、幅 0.8m 弱にわたり土壘の基底部と考えられる明黄褐色土を確認した。土壘以南は地山がベースとなり、土壘裾端から南へ 1.25m にわたりテラス状遺構が形成され、それより南は緩やかに下方に傾斜していく。

T 5 (図 18)

副郭を囲む土壘の西辺裾部に幅 1.5m、長さ 5.9m のトレンチを設定した。トレンチ東端において、幅 0.3m にわたり土壘の基底部と考えられる明黄褐色土を確認した。土壘以西は地山がベースとなり、土壘裾端から西へ約 2m にわたりテラス状遺構が形成され、それより西は緩やかに下方に傾斜していく。

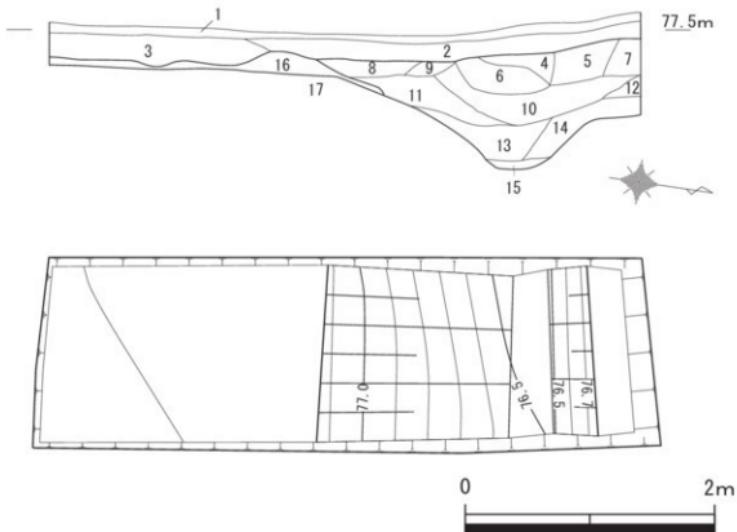
T 6 (図 19)

土壘 b の東辺に幅 1.5m、長さ 6.7m のトレンチを設定した。土壘の規模は、基底部幅約 2.8m、高さ 0.3m であり、土壘東側（城外側）において、ごく小規模ながら溝状のくぼみを検出した。土壘は、西側（城内側）は橙色粘質土の地山、東側は地山とみられる明黄褐色粘質土の上に築かれていることが判明した。

T 7 (図 20)

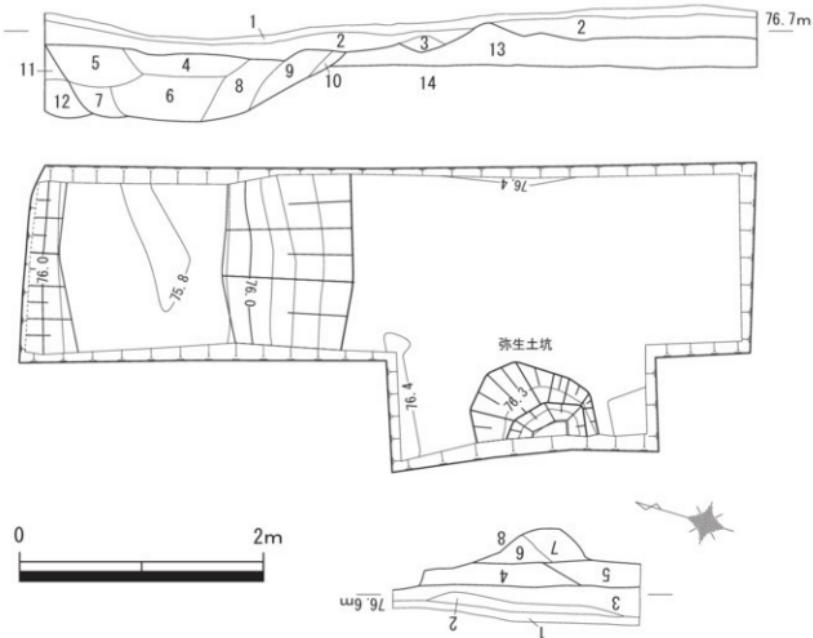
土壘 b の南辺に幅 1.5m、長さ 10.2m のトレンチを設定した。土壘の規模は、基底部幅約 4.6m、高さ 0.5m であり、土壘北西側（城内側）において、地山面より上層の黄褐色土のベース土を掘り込むかたちで、幅 2.5m、深さ 0.5m の堀を検出した。

なお、トレンチ南東端の黄橙色粘質土の地山を掘り込むかたちで、多数の弥生中期後葉の土器片を含む明褐色土の遺構を検出した。



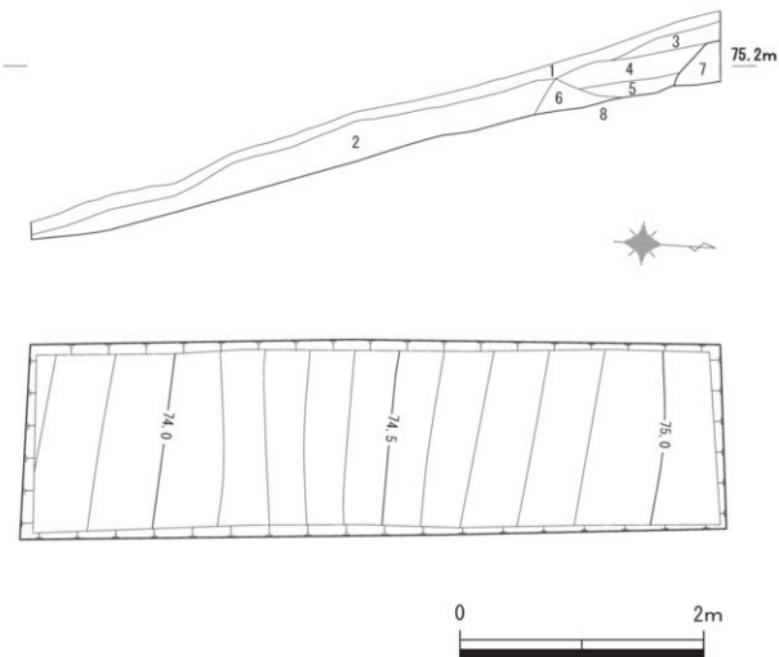
- 1 表土
- 2 にぶい黄橙色土 (10YR6/4)
- 3 明黄褐色土 (10YR6/8)
- 4 明黄褐色土 (10YR6/6) 〈堀埋土〉
- 5 明黄褐色土 (10YR6/8) 〈堀埋土〉
- 6 にぶい黄橙色土 (10YR6/4) 〈堀埋土〉
- 7 明褐色土 (7.5YR5/6) 〈堀埋土〉
- 8 にぶい黄橙色土 (10YR7/4) 〈堀埋土〉
- 9 にぶい黄橙色土 (10YR7/3) 〈堀埋土〉
- 10 にぶい黄橙色土 (10YR7/3) 石を含み砂っぽい 〈堀埋土〉
- 11 明黄褐色土 (10YR7/6) 〈堀埋土〉
- 12 橙色土 (7.5YR6/6) 〈堀埋土〉
- 13 橙色粘質土 (7.5YR6/6) 〈堀埋土〉
- 14 橙色粘質土 (7.5YR6/8) 〈堀埋土〉
- 15 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) 〈堀埋土〉
- 16 黄橙色土 (10YR7/8) 〈中世ベース〉
- 17 明褐色粘質土 (10YR6/6) 〈地山〉

図 14 T 1 平面・断面図



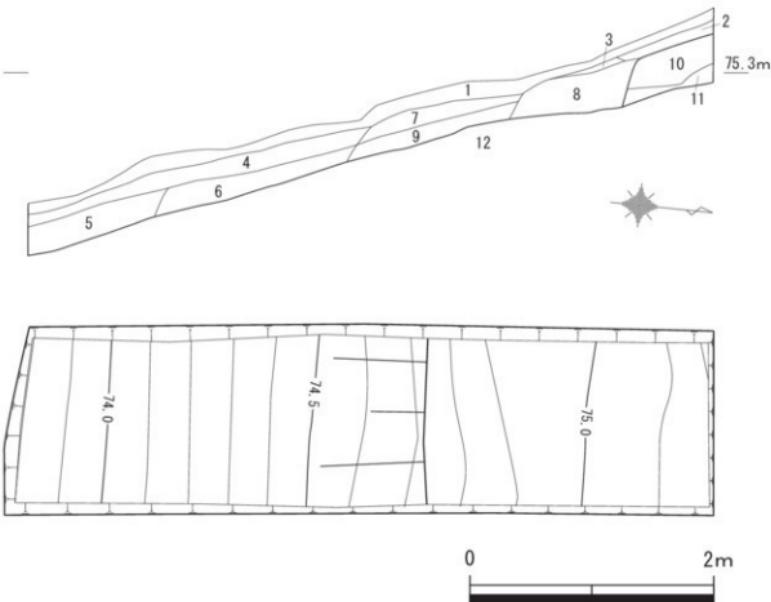
東壁		西壁	
1	表土	1	表土
2	明黄褐色土 (10YR6/6)	2	橙色土 (7.5YR6/8) 根があり、汚い
3	明黄褐色土 (10YR7/6)	3	明黄褐色土 (10YR7/6)
4	明黄褐色土 (10YR6/6) 1~5cm 大の石を含む (埴埋土)	4	黄褐色土 (10YR7/8) (中世遺構か?)
5	明褐色土 (7.5YR6/8) 砂っぽい (埴埋土)	5	明黄褐色土 (10YR6/8) (中世ベース)
6	にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 1~5cm 大の石を多く含む (埴埋土)	6	明黄褐色土 (10YR6/8) (弥生土坑埋土)
7	明黄褐色土 (10YR6/6) (埴埋土)	7	明黄褐色土 (10YR6/6) (弥生土坑埋土)
8	にぶい黄褐色土 (10YR6/4) (埴埋土)	8	明黄褐色粘質土 (10YR6/6) (弥生ベース (地山))
9	橙色土 (7.5YR6/6)	9	
10	黄褐色粘質土 (10YR5/6)	10	
11	明褐色土 (7.5YR5/6)	11	
12	明褐色土 (7.5YR5/8)	12	
13	明黄褐色土 (10YR6/8)	13	
14	明褐色粘質土 (7.5YR5/8) 3~5cm 大の石を含む (弥生ベース (地山))	14	

図15 T2 平面・断面図



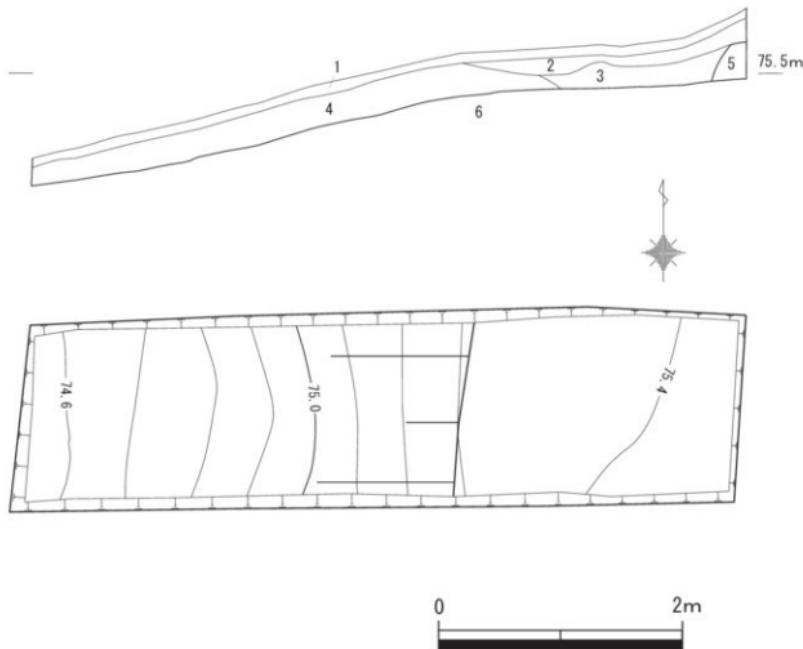
- | | | |
|---|--------|-------------------------|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 黄褐色土 | (10YR5/6) 1~10cm大の丸石を含む |
| 3 | 黄褐色土 | (2.5Y5/6) |
| 4 | 明黄褐色土 | (2.5Y6/6) 小石混入 |
| 5 | にぶい黄色土 | (2.5Y6/4) 小石混入 |
| 6 | 黄褐色土 | (2.5Y5/6) |
| 7 | 明黄褐色土 | (2.5Y6/8) 〈土塁か?〉 |
| 8 | 明褐色土 | (7.5YR5/8) 〈地山〉 |

図16 T3 平面・断面図



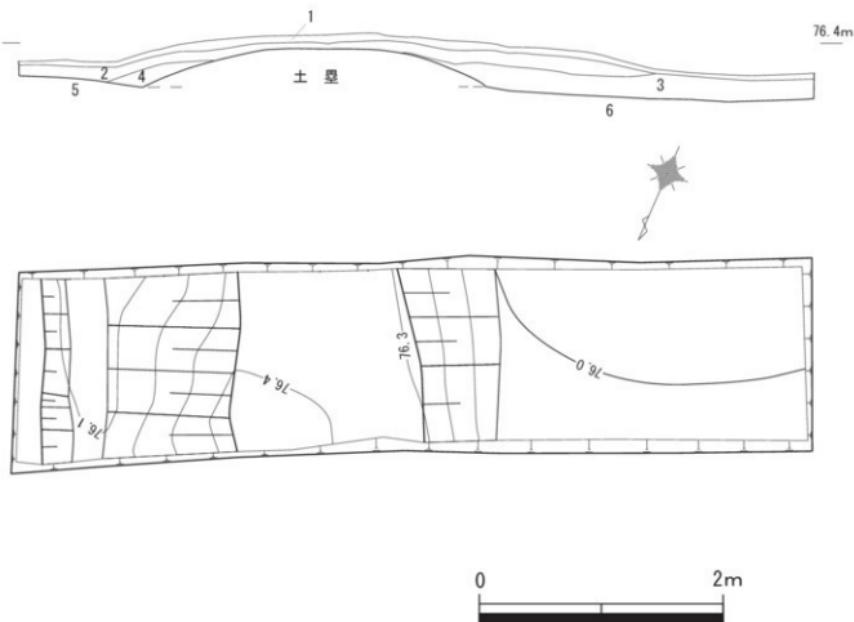
- 1 表土
- 2 黄褐色土 (10YR5/8)
- 3 黄褐色土 (10YR5/8) 下層8の4~5cm大の石を含む
- 4 黄褐色土 (10YR5/8)
- 5 褐色土 (10YR4/6) 小石を含む
- 6 明黄褐色土 (7.5YR5/8) 小石を含む
- 7 明黄褐色土 (10YR6/6) 木根の流入がひどい
- 8 明黄褐色土 (10YR6/6) 1~6cm大の石を含む
- 9 明黄褐色土 (7.5YR5/8)
- 10 明黄褐色土 (10YR6/6) 小石混入 <土壌か?>
- 11 明黄褐色土 (7.5YR5/8) <土壌か?>
- 12 明褐色土 (7.5YR5/8) 1~10cm大の丸石を含む <地山>

図 17 T 4 平面・断面図



- 1 表土
 2 黄褐色土 (10YR5/6)
 3 明黄褐色土 (10YR6/6) 1~4cm大の石を含む
 4 明黄褐色土 (10YR6/6) やや赤味を帯びる <地山混入層>
 5 明黄褐色土 (10YR6/8) <土壌か?>
 6 明褐色土 (7.5YR5/8) 1~10cm大の丸石を所々に含む <地山>

図18 T5 平面・断面図



- | | |
|-----------|------------------|
| 1 表土 | |
| 2 黄橙色土 | (10YR7/8) |
| 3 明黄褐色土 | (10YR6/8) |
| 4 明黄褐色土 | (10YR6/8) |
| 5 明黄褐色粘質土 | (10YR6/6) <地山か?> |
| 6 橙色粘質土 | (7.5YR6/6) <地山> |

図 19 T 6 平面・断面図

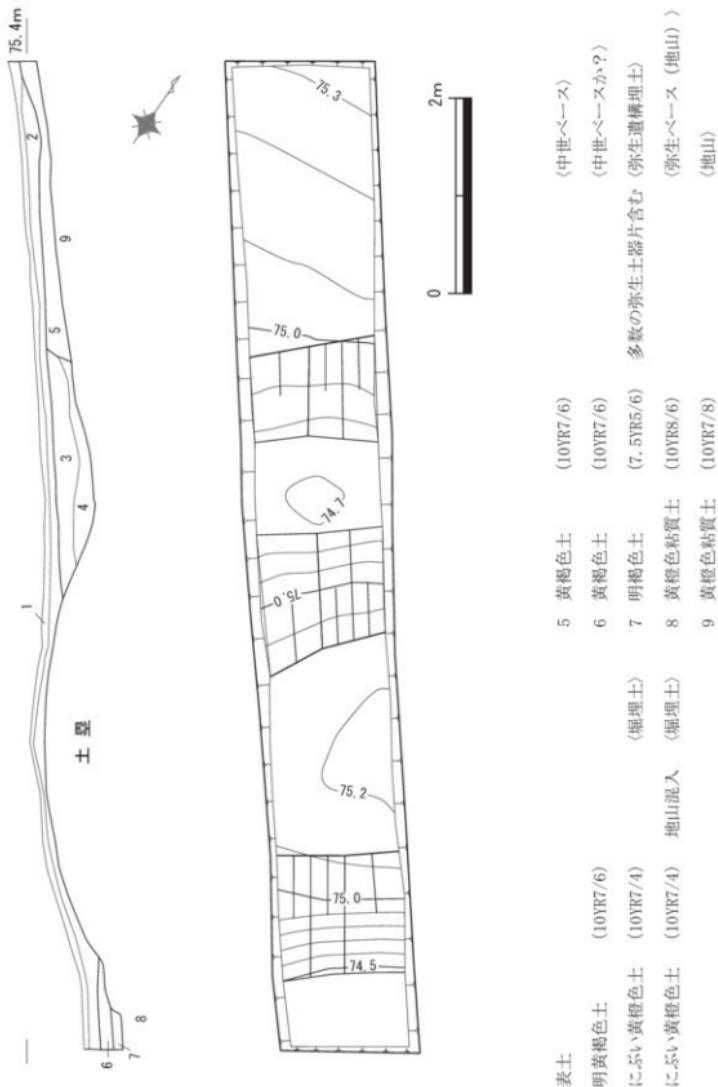


図20 T 7 平面・断面図

5 出土遺物（図21）

コンテナケース1箱分の遺物が出土した。その大半がT2・7から出土した弥生土器である。その他、T2でサヌカイト製とみられる石器剥片、T1表土から古墳時代後期の須恵器片、江戸時代以降の瓦片がわずかに含まれる。

(1)・(2)は、T2包含層から出土したもの、(3)～(7)は、T2弥生遺構面直上から出土したもの、(8)～(10)は土坑から出土したもの、(11)～(13)は、T7東端第7層から出土した遺物である。細かな計測値などは表2を参照していただきたい。

T2包含層 (1)・(2)

主に土坑上面の包含層から出土している。(1)は直口壺の口頸部とみられる。口頸部外面に5条の回線文がめぐり、口縁部端面には2列の円状浮文が互い違いにほどこされている。(2)は無頭壺の口縁～肩部とみられる。口縁部外面に5条の回線文がめぐり、その下部に櫛描直線文と櫛描波状文がほどこされている。

T2弥生遺構面直上 (3)～(7)

主に土坑上面から出土している。(3)・(4)は壺の底部とみられる。(3)・(4)ともに外面にミガキをほどこす。内面は、(3)にはハケ調整がみられるが、(4)は磨滅により確認できない。(5)は高杯の杯部とみられる。口縁部外面に3条の回線文がめぐっている。篠宮正氏が行った東播磨の弥生土器の分類(篠宮2007)によると、椀形高杯a1に該当すると考えられる。(6)は甕の口縁～肩部である。篠宮2007分類の「く字口縁甕」にあたる。磨滅しているため、調整は確認できない。(7)は直口壺の口頸部とみられる。摩滅しているが、口頸部外面端部付近に回線文とみられる痕跡が確認できる。

T2土坑 (8)～(10)

(8)は広口壺の口頸部である。頸部外面に10本からなる櫛描直線文が2条ほどこされている。口縁端部内面には2条の棒状浮文と、その間に円状浮文が1列ほどこされている。内面はハケ調整がみられる。(9)は壺の底部、(10)は甕の底部とみられる。いずれも磨滅しているが、(9)の外面にはミガキの痕跡が確認できる。

T7東端第7層 (11)～(13)

(11)は短頸壺の口縁～肩部である。口頸部はわずかに外開きする。磨滅しているが、口頸部外面に回線文がめぐっている。頸部下端には指頭圧痕による貼付突帯がほどこされている。

(12)は甕の口縁～肩部である。篠宮2007分類の「く字口縁甕」にあたる。磨滅しているため、調整は確認できない。(13)は甕の底部とみられる。摩滅しているため、調整は確認できない。

以上、これらの弥生土器は、(1)・(2)・(5)・(7)・(11)の回線文、(1)・(8)の円状浮文に特徴を見出すことができる。これらを指標とすると、篠宮2007のIV-3期におおむね収まるものと考えられ、時期は弥生時代中期後葉のものと判断できる。

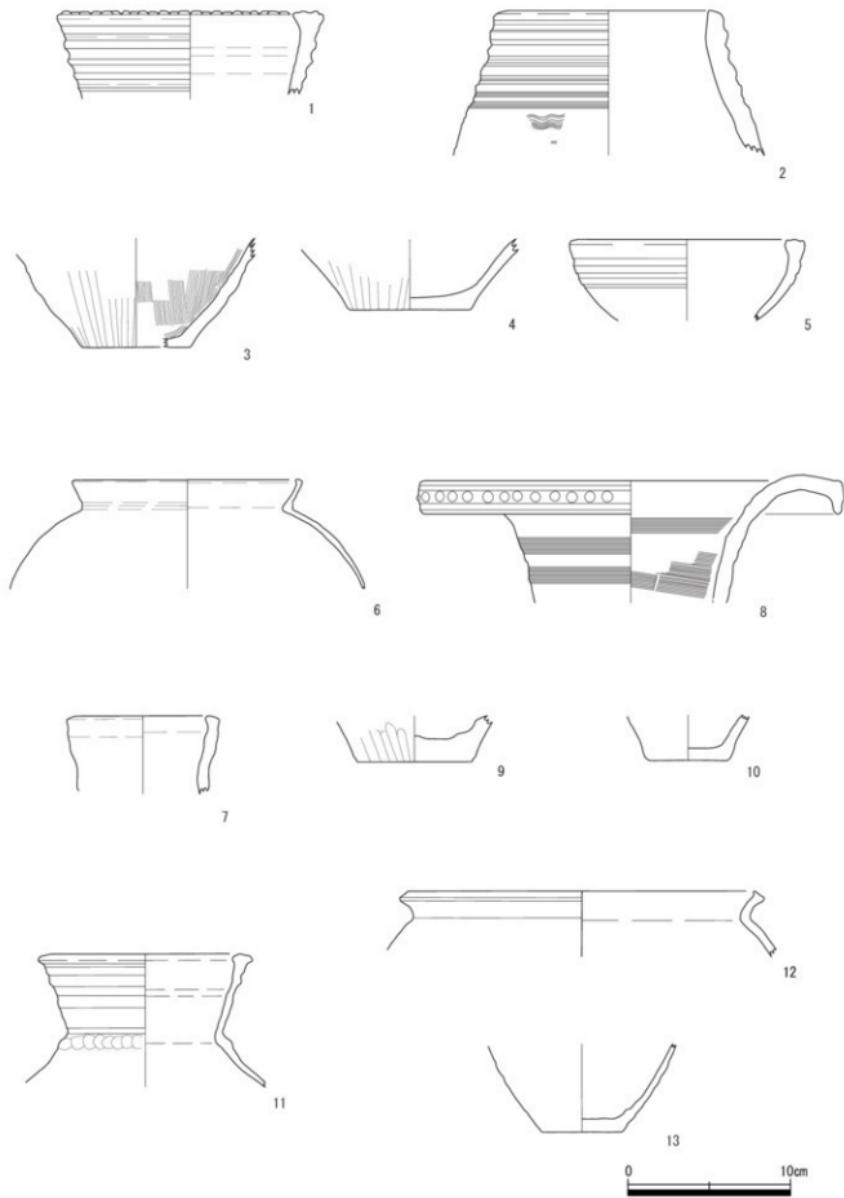


圖 21 出土遺物 ($S=1/3$)

表2 出土遺物観察表

番号	トレンチ	遺構名	遺物名	基準(部位)	色調	胎土	焼成	法量(cm)			形態的特徴・説明など
								口径	底径	推存高さ	
1	T-2	包含層	弥生土器	直口壺(口部)	外: 7.57cm/内: 黄褐色 内: 7.57cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の白色砂粒を含む	良好	12.7	—	5.5	外: 圆錐文、口縁凹場面: 円状序文 内: ハゲ
2	T-2	包含層	弥生土器	無柄壺(口縁～肩部)	外: 7.57cm/内: 黄褐色 内: 7.57cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の白色砂粒を含む	良好	(12.4)	—	8.9	外: 圆錐文、標題式施文、標題式状文 内: 圓錐文
3	T-2	弥生遺構上面	弥生土器	壺(底部)	外: 7.57cm/内: 黄褐色 内: 2.57cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の白色砂粒を含む	良好	(6.6)	—	6.7	外: 圓錐文
4	T-2	弥生遺構上面	弥生土器	壺(底部)	外: 7.57cm/内: 黄褐色 内: 2.57cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の小石、白色砂粒を含む	良好	(7.4)	—	—	外: ハガキ 内: 圓錐文
5	T-2	弥生遺構上面	弥生土器	直口壺(口部)	外: 10.98cm/内: 黄褐色 内: 10.98cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の白色砂粒、Sm1.7cmから水を含む	良好	(12.4)	—	4.05	外: 圆錐文 内: 圓錐文
6	T-2	弥生遺構上面	弥生土器	壺(口縁～肩部)	外: 7.57cm/内: 黄褐色 内: 7.57cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の白色砂粒、白色砂粒を含む	良好	(13.4)	—	6.7	外: 圆錐文 内: 圓錐文
7	T-2	弥生遺構上面	弥生土器	直口壺(口部)	外: 2.57cm/内: 黄褐色 内: 2.57cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の白色砂粒、白色砂粒を含む	良好	(8.0)	—	4.7	外: 圆錐文? 内: 圓錐文
8	T-2	土坑	弥生土器	広口壺(口部)	外: 5.97cm/内: 黄褐色 内: 5.97cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の白色砂粒、黑色砂粒を含む	良好	(25.4)	—	7.75	外: 標題式施文 内: ハケ、口縁斜面一部状状文、円状
9	T-2	土坑	弥生土器	壺(底部)	外: 7.57cm/内: 黄褐色 内: 10.98cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の白色砂粒、黑色砂粒を含む	良好	—	7.0	2.7	外: ハガキ 内: 圓錐文
10	T-2	土坑	弥生土器	壺(底部)	外: 10.98cm/内: 黑灰色 内: 2.57cm/内: 黑灰色	やや粗い表(0mm以下)の白色砂粒を含む	良好	—	4.8	2.7	外: 圓錐文 内: 圓錐文
11	T-7	トレンチ実験 第1層	弥生土器	無柄壺(口縁～肩部)	外: 7.57cm/内: 黄褐色 内: 7.57cm/内: 黄褐色	表(0mm以下)の黄色砂粒を含む	良好	(13.2)	—	8.2	外: 圆錐文、斜村実験
12	T-7	トレンチ実験 第7層	弥生土器	壺(口縁～肩部)	外: 7.57cm/内: 黄褐色 内: 7.57cm/内: 黄褐色	やや粗い表(0mm以下)の白色砂粒を含む	良好	(21.3)	—	3.95	外: 圓錐文
13	T-7	トレンチ実験 第7層	弥生土器	壺(底部)	外: —	表(0mm以下)の白色砂粒、黑色砂粒を含む	良好	—	4.9	5.4	外: 圓錐文

6まとめ

T 1・2は堀、T 3は自然地形、T 4・5は幅 1.25~2 m のテラス状遺構、T 6は土塁と溝状のくぼみ、T 7は堀・土塁を検出した。

以上、副郭の南・西側については移動のためのテラス状遺構、また土塁 a・b の掘について防護と土取りのための堀が存在していたことが明らかとなった。

なお、T 2・7 から弥生時代中期後葉の遺構と土器群が確認できた。土器の出土状況から、弥生期の遺構を半壊し、城が築造されたと考えられる。平成 9 年度に実施した朝日ヶ丘土塁の確認調査でも、ほぼ同時期の土坑と甕が確認されていることから（三木市教育委員会 1998）、この丘陵一帯に弥生時代中期後葉の高地性集落が広がっていたものと考えられる。

〈引用文献〉

三木市教育委員会 1998 「三木山多重土塁発掘調査概要」『社会教育活動状況報告書』平成 9 年度

2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』

篠宮正 2007 「東播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年一播磨編一』 大手前大学史学研究所

第3節 宿原大池 1号窯・宿原大池 2号窯・宿原大池遺跡

1 はじめに

宿原大池 1号窯・宿原大池 2号窯・宿原大池遺跡調査は、自由が丘本町1丁目45番地において、兵庫県北播磨県民局（加古川流域土地改良事務所）が実施する宿原大池の改修事業に伴い、事業に先立ってその内容を確認し、事業者と協議する資料を得るために実施した（図22）。

宿原大池 1号窯・宿原大池 2号窯は鎌倉時代の登窯、宿原大池遺跡は鎌倉時代の遺物散布地とされる。いずれも平成10年度の三木市遺跡分布調査により確認された遺跡である。

現地調査は平成22年11月15日～12月2日に実施した。調査面積は51.5m²である。

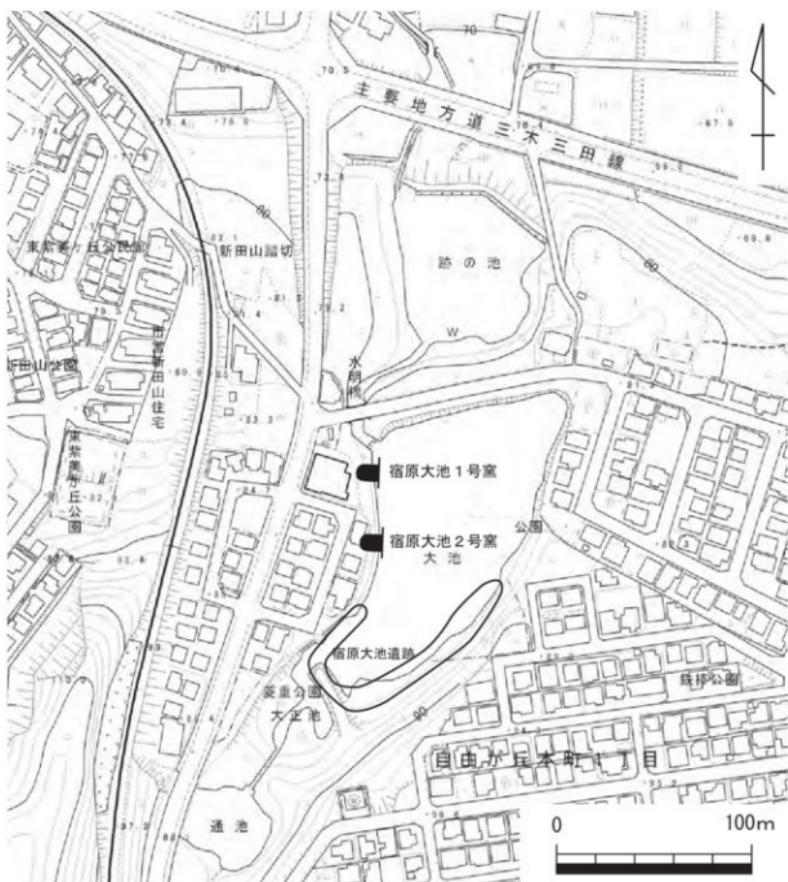


図22 宿原大池 1号窯・宿原大池 2号窯・宿原大池遺跡 位置図

2 調査の方法

調査前にため池北西斜面地（1号窓～2号窓間）の伐採作業を実施した後、遺跡の内容を確認するため9箇所の調査トレンチを設定した（図23）。人力掘削は委託し、表土除去、土層断面・遺構面の精査及び遺構掘削などを行った。トレント配置図はトータルステーションによる調査杭の測量を行い、遺構平面図（1/20）及び土層断面図（1/20）は手実測を行った。

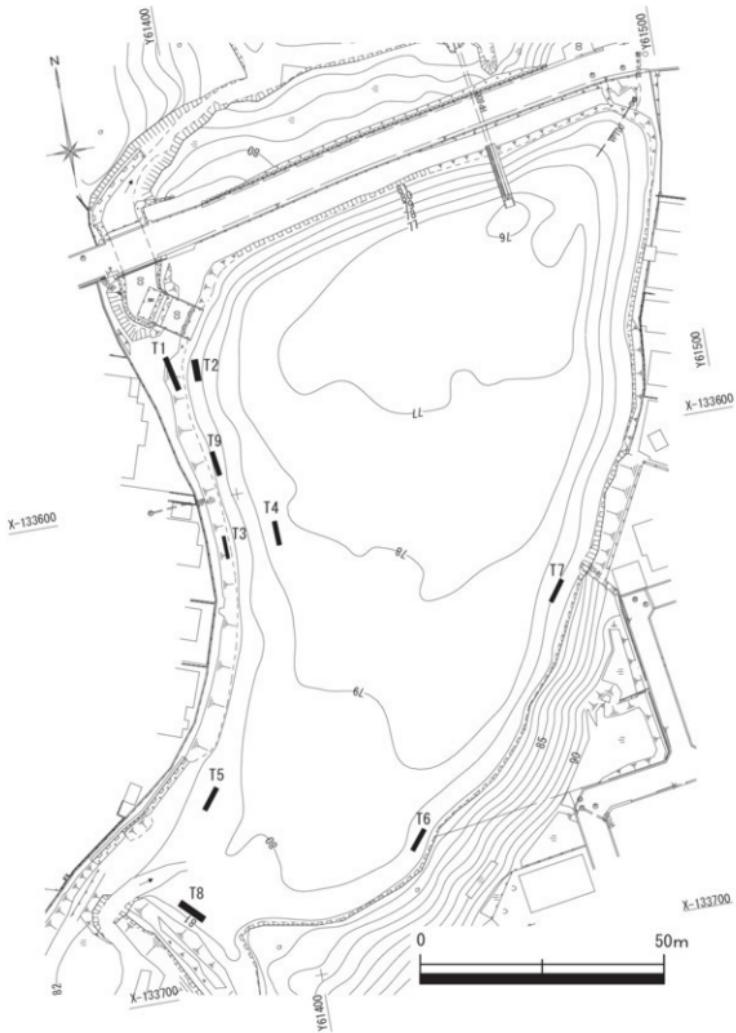


図23 トレント配置図

3 調査の結果

(1) 宿原大池1号窯

T 1 (図24)

地表面観察では窯体・灰原が確認できなかつたため、その可能性のある南北方向の凹凸がみられる斜面地に幅1m、長さ7mのトレンチを設定した。斜面地凸部上面が登窯の可能性が考えられたが、斜面地が堆積土で形成されていたことが明らかとなつた。堆積土は大別すると、A～Fの6層に分けられる。Aはコンクリート片等を含む固く締まる現代盛土、Bは黄褐色系の砂礫、Cは黄褐色系砂礫・砂質土層、Dはにぶい黄色砂質土・明黄褐色砂礫層、Eは主ににぶい黄褐色砂質土で構成される層、Fは主ににぶい黄褐色砂質土と同系色の砂礫層からなる。南から北に向かって堆積している。なお、F最上層において、近世の平瓦が出土している。地表下1.2mにおいて、地山とみられる礫を含むにぶい黄色砂質土が確認された。

堆積土からは、12世紀中葉とみられる須恵器片、瓦片のほか窯壁片が若干出土したが、窯跡及び灰原は確認できなかつた。これらのことから、付近に存在したとみられる窯の土砂の一部がT1付近の谷部分に流入した可能性がある。

T 2 (図25)

T 1において窯体・灰原ともに確認できなかつたが、灰原の検出を目的に、T 1東のにぶい黄色砂礫に幅1.5m、長さ4.2mのトレンチを設定した。表土直下で遺跡地図に登録される以前のバックホーによる土取り坑を検出した。土取り坑からは、現代のタイルのほか、須恵器片等が出土した。なお、灰原は確認できなかつた。

(2) 宿原大池2号窯

T 3 (図26)

地表に露出した断面で焼土状の土層が見られた斜面地に幅0.8m、長さ5mのトレンチを設定した。しかし、焼土状土層は近年の産業廃棄物によるものと確認できた。T 1同様、斜面地は主に浅黄色砂質土からなる流入土により形成されていることが断面観察により確認できた。当時の遺構・遺物とともにみられなかつた。

T 4 (図27)

T 3で窯体は確認できなかつたが、灰原を確認するために、2号窯の東の灰黄色粗砂層に幅1m、長さ5mのトレンチを設定した。表面で炭片が散見できたが、これは近年の野焼きによるものであることが確認できた。地表下約0.3mでにぶい黄色シルト質粘土の地山を検出したが、遺構は検出されず、遺物もみられなかつた。

(3) 宿原大池遺跡

T 5 (図28)

宿原大池南西沢のオリーブ褐色細砂層に幅1m、長さ5.2mのトレンチを設定した。遺跡地図に登録される以前の擁壁工事により、周辺がすでに改変を受け、整地されていることが明らかとなつた。断ち割りにより、地表下0.5mにおいて灰オリーブ細砂からなる溜池堆積層、同0.75mにおいてオリーブ灰色粘土からなる地山(池底)を確認した。遺構・遺物とともにみられなかつた。

T 6 (図29)

宿原大池南東沢の黄褐色礫層に幅1m、長さ5mのトレンチを設定した。地表下0.15mにおいて

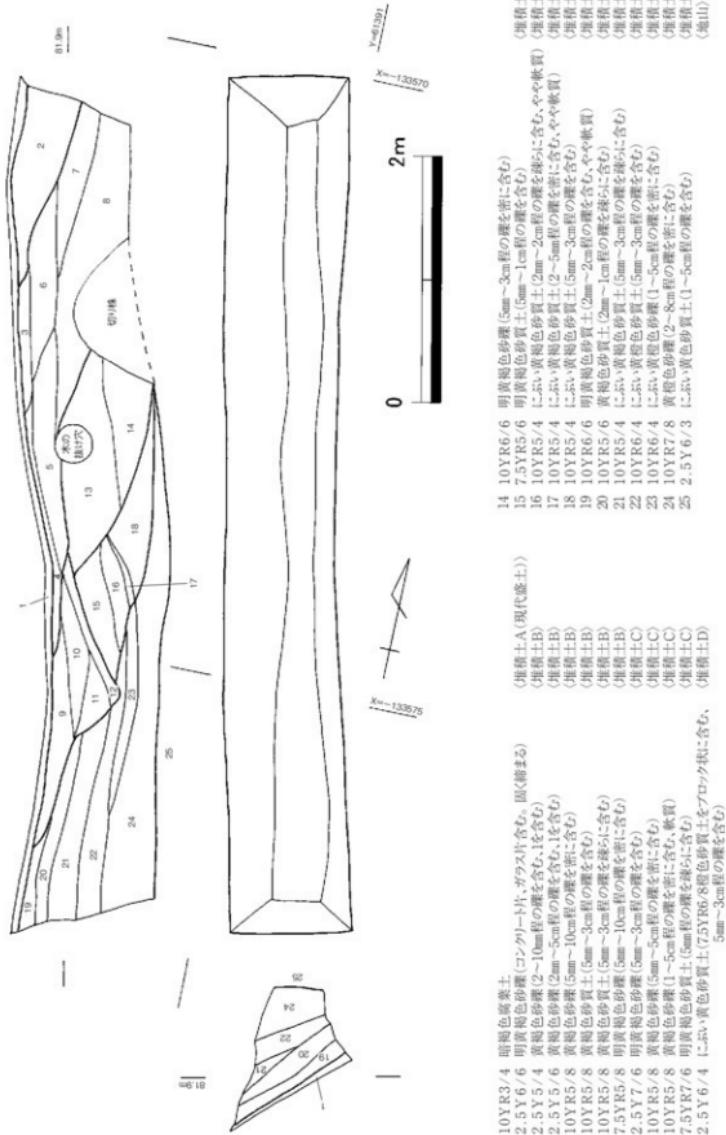
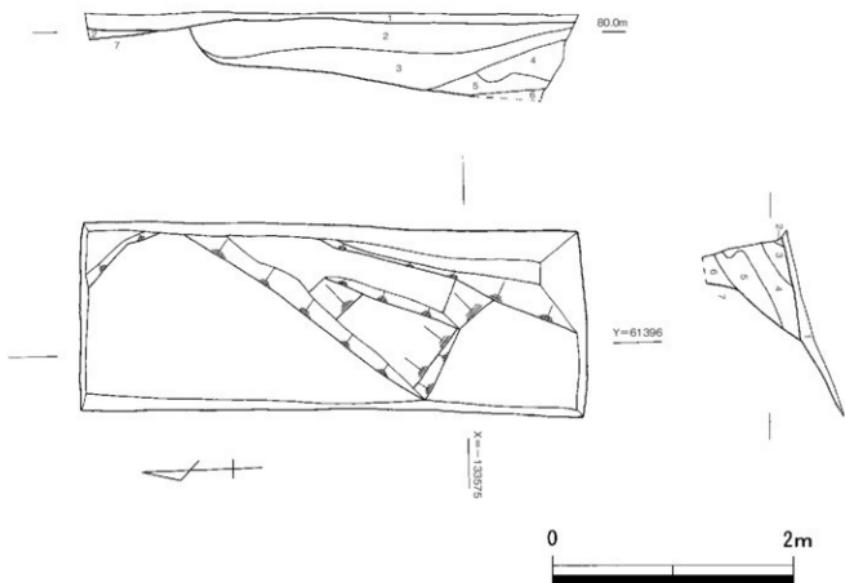
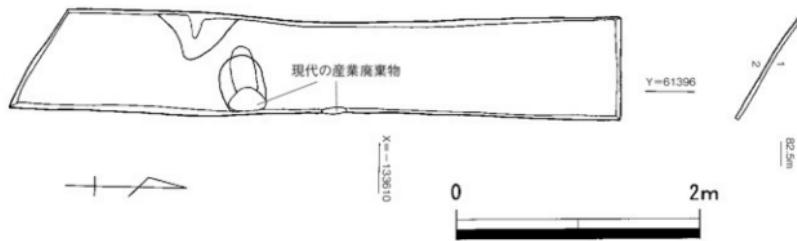


図 24 T1 平面・断面図



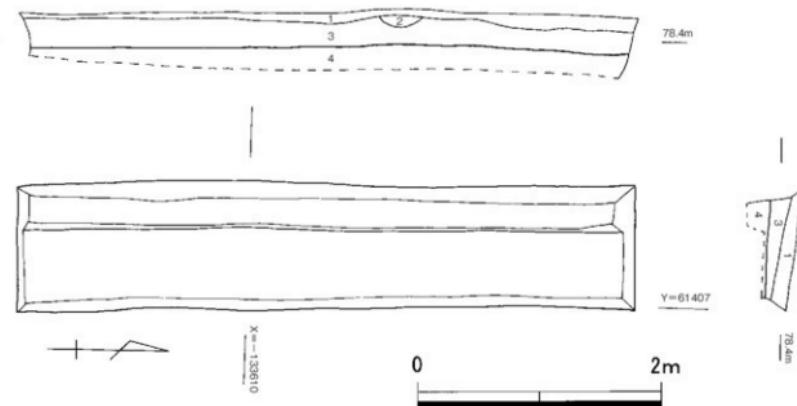
- | | | |
|-----------|-----------------------------|--------|
| 1 2.5Y6/3 | にぶい黄色砂礫 (2mm~10cm程の円礫を密に含む) | |
| 2 10YR5/6 | 黄褐色砂礫 (粘土質をブロック状に含む) | 〈現代搅乱〉 |
| 3 2.5Y4/6 | オリーブ褐色砂礫 (粘土質をブロック状に含む) | 〈現代搅乱〉 |
| 4 10YR5/8 | 黄褐色粘土質 (2mm~5cm程の円礫を含む) | 〈現代搅乱〉 |
| 5 2.5Y6/4 | にぶい黄色砂礫 (粘土質をブロック状に含む) | 〈現代搅乱〉 |
| 6 2.5Y6/6 | 明黄褐色粘土質 (2mm~2cm程の円礫を含む) | 〈現代搅乱〉 |
| 7 2.5Y7/3 | 浅黄色砂質土 (2mm~10cm程の円礫を密に含む) | 〈地山〉 |

図25 T2 平面・断面図



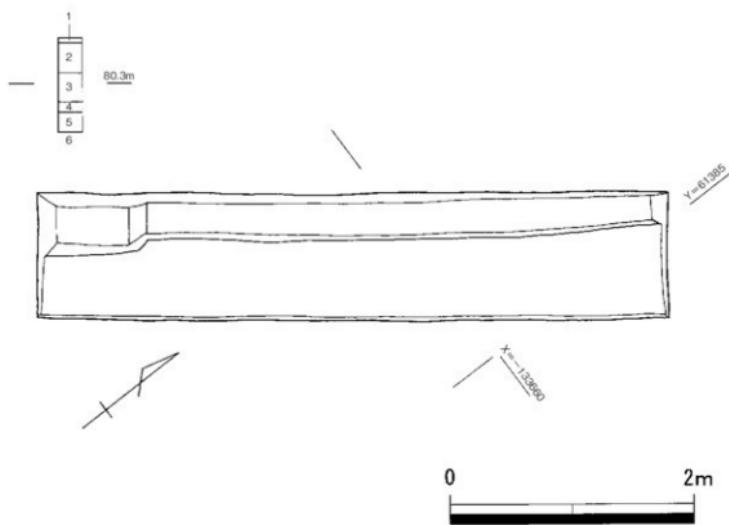
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土（軟質） 〈腐葉土〉
 2 2.5Y7/4 浅黄色砂質土（2mm～10cm程の円礫を含む） 〈堆積土〉

図 26 T 3 平面・断面図



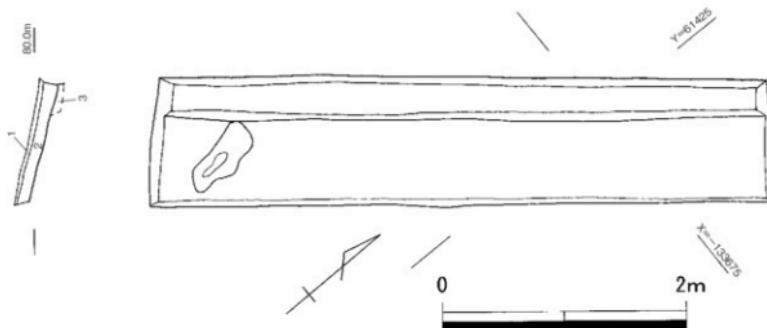
- 1 2.5Y6/2 灰黄色粗砂（2～5mm程の礫含む、ビニール、プラスチック、炭片含む） 〈現代堆積層〉
 2 N2/ 黒色炭
 3 2.5Y5/3 黄褐色砂礫（2.5Y7/6明黄褐色シルト質粘土を互層に含む、ビニール、プラスチック含む） 〈現代の野焼〉
 4 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質粘土（細砂及び2mm～10cm程の円礫を疎らに含む） 〈地山〉

図 27 T 4 平面・断面図



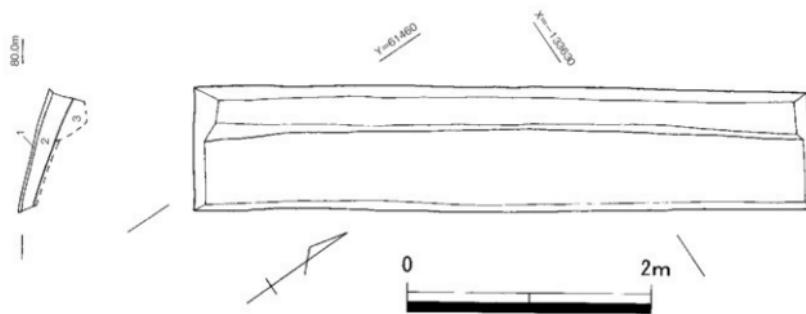
1	2.5Y4/4	オリーブ褐色細砂	〈現代堆積土〉
2	2.5Y6/8	明黄褐色砂礫（固くしまる）	〈現代整地土〉
3	5Y5/4	オリーブ色砂質土（ブロック状粘土、2~5mm程の疊合む）	〈現代盛土〉
4	5Y4/2	灰オリーブ色細砂	〈溜池堆積層〉
5	5Y5/2	灰オリーブ色粗砂	〈溜池堆積層〉
6	2.5Y5/1	オリーブ灰色粘土	〈地山〉

図28 T5 平面・断面図



- 1 2.5Y5/3 黄褐色礫（1~10cm程の礫主体、細砂含む）
 2 2.5Y6/2 灰黄色細砂～礫（5mm~2cm程の礫を密に含む、ビニール片含む）
 3 2.5Y8/2 灰白色砂質土（1~5cm程の礫を疎らに含む）
- （表土）
 （現代堆積層）
 （地山）

図 29 T 6 平面・断面図



- 1 2.5Y5/3 黄褐色礫（1~10cm程の礫主体、細砂含む）
 2 10YR5/6 黄褐色砂質土（5mm~2cm程の礫をわずかに含む）
 3 7.5YR5/8 明褐色粘質土（2~10cm程の礫を疎らに含む、
 2.5Y7/4浅黄色シルトを含む）
- （表土）
 （堆積層（無遺物層））
 （地山）

図 30 T 7 平面・断面図

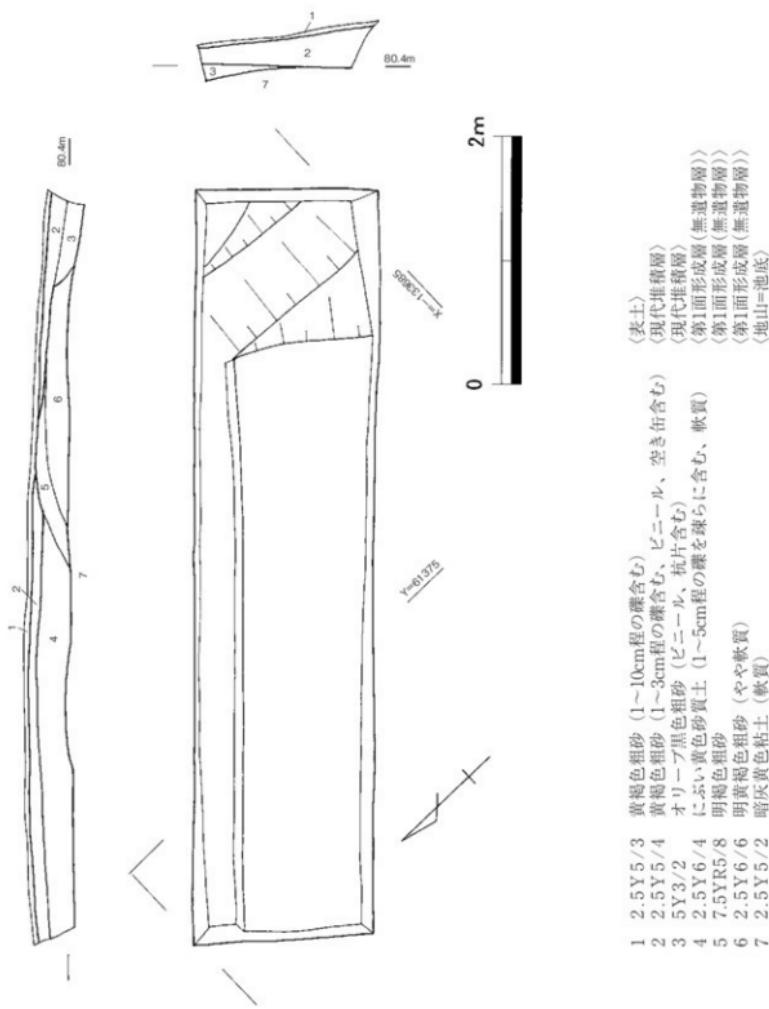
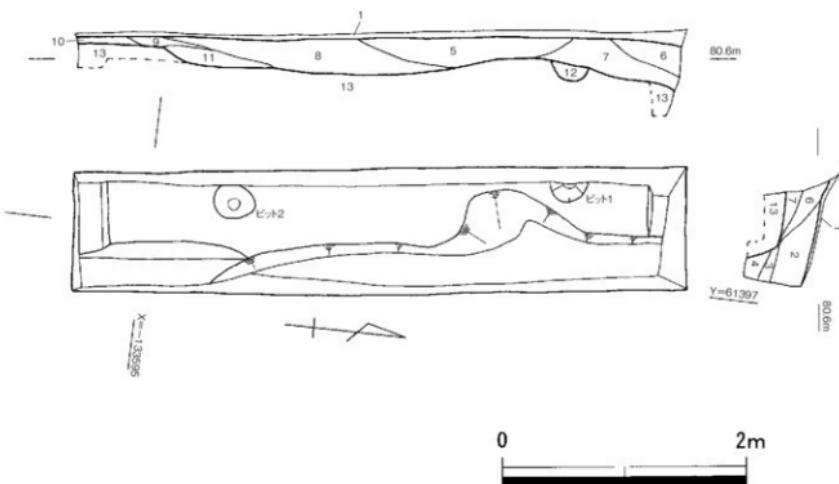


図 31 T 8 平面・断面図



- | | | | |
|----|---------|-------------------------------|--------|
| 1 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色砂礫（腐葉土を含む） | 〈表土〉 |
| 2 | 2.5Y5/6 | 黄褐色砂礫（1~10cm程の礫を含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 3 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色砂礫（粗砂~5cm程の礫を含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 4 | 2.5Y5/6 | 黄褐色粘質土（5mm程の礫を含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 5 | 2.5Y6/6 | 明黄褐色砂礫（粗砂~5cm程の礫を密に含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 6 | 10YR6/6 | 明黄褐色粘質土（1~3cm程の礫を含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 7 | 2.5Y6/3 | にぶい黄色砂質土（1~2cm程の礫を疎らに含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 8 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色砂質土（2~10cm程の礫を含む、細砂を含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 9 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 | 〈現代搅乱〉 |
| 10 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘質土（13を密に含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 11 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘質土（13を疎らに含む） | 〈現代搅乱〉 |
| 12 | 10YR4/4 | 褐色粘質土（13をわずかに含む、須恵器片を含む） | 〈ピット1〉 |
| 13 | 10YR4/6 | 褐色粘質土（Mnを密に含む、1~5cm程の礫を疎らに含む） | 〈地山〉 |

図32 T9 平面・断面図

て灰白色砂質土の地山を確認したが、遺構・遺物ともにみられなかつた。

T 7 (図 30)

宿原大池東沢の遺跡北端の黄褐色礫層に幅 1m、長さ 5m のトレンチを設定した。地表下 0.2 mにおいて明褐色粘質土の地山を確認したが、遺構・遺物ともにみられなかつた。

T 8 (図 31)

宿原大池南沢の黄褐色粗砂層に幅 1.5m、長さ 6m のトレンチを設定した。表土からビニール類に混じり須恵器片が 1 点出土した。約 0.25m のにぶい黄色砂質土と明褐色系粗砂からなる無遺物層が第 1 面を形成しており、東端において現代の流水部分を確認した。地山（池底）は暗灰黄色粘土である。

(4) 宿原大池 1 号窯～宿原大池 2 号窯間

T 9 (図 32)

遺跡範囲外ではあるが、遺構・遺物を確認するためににぶい黄褐色砂礫層に幅 1m、長さ 5m のトレンチを設定した。全面において遺跡地図に登録される以前のバックホーによる土取り坑を検出した。土取り坑に切られるかたちで、地表下 0.25m において褐色粘質土の地山からピットを 2 基検出した。表土からはビニール類に混じり須恵器片・瓦片が出土したほか、ピット 1 からは須恵器片が 1 点出土した。

4 出土遺物 (図 33)

コンテナケース 1 箱分の遺物が出土した。その大半が須恵器・瓦・窯壁である。

(1)・(2) は北東沢で表探したもの、(3)～(5) は T 1 堆積層上面から出土したもの、(6)～(10) は T 1 堆積層から出土したもの、(11) は T 9 の表土から出土した遺物である。細かな出土層位、計測値などは表 3 を参照していただきたい。

須恵器塊

(1) は底部が糸切りにより高台状に切り残され、体部がやや内湾気味に立ち上がる。森内秀造氏が行なった久留美窯跡群の分類（森内 1999）によると塊 I b に該当し、12 世紀中葉に属するものと考えられる。(3)～(6) についても、塊 I b に該当し、12 世紀中葉のものとみてよからう。

須恵器小皿

(8) は底部が糸切りにより切り離され、口縁部はわずかに肥厚し外反する。小皿 I b に該当し、12 世紀代のものと考えられる。

須恵器鉢

(9) は口縁の内側端面を上方に小さく引き出す。口縁端部の断面は三角形状を呈す。鉢 II a に該当し、12 世紀中葉のものと考えられる。

軒平瓦

(11) は均整唐草文である。尊勝寺 254 型式（杉山・岡田 1961）の界線がみられない同文と判断できる。尊勝寺 254 型式の同氾が神出古窯跡群から出土していることから（上原 1978）、その関連性が注目される。時期は 12 世紀代のものと考えられる。平瓦と瓦当との接合には包み込み技法が用いられている。

丸瓦

(2) は筒部凹面に布目がみられず、縦方向のナデをほどこしていることから、粘土紐を巻き上げて成形したと考えられる。筒部凸面は縦方向のタタキがほどこされている。玉縁部は両面ともに回転ナデがほどこされている。筒部側面・玉縁端部はヘラケズリの後、粗くナデがほどこされており、雑な仕上がりである。

平瓦

(10) は凹面に布目がみられないことから、粘土紐を巻き上げて成形したと考えられる。凸面はタタキの後、縦方向のナデがほどこされている。凹面はタタキの後、横方向のナデをほどこしている。側面・端部はヘラケズリの後、ナデがほどこされている。

以上、須恵器・瓦のほか窯壁が出土していることから考えて、これらは瓦陶兼用窯に関連する遺物といえるだろう。時期は概ね 12 世紀中葉とみられる。

5まとめ

1号窯・2号窯では、窯体・灰原は確認できず、登窯の存在は否定された。宿原大池遺跡においても窯体・灰原は確認できず、登窯が存在していた可能性は極めて低いと考えられる。北西沢は以前のため池改修工事により、その大部分がバックホーによる土取りが行われていたことが明らかとなった。以上のことから、12世紀中葉の遺物が採集されるのは、遺構に伴うものではなく、後世に周辺の窯から持ち運ばれた灰原の2次堆積に伴うものと考えられる。東隣の皿池に所在する宿原1～3号窯（三木市教育委員会 2004・2007）がその候補としてあげられよう。

なお、1号窯・2号窯間に設定したT9では、バックホーによる破壊を受けてはいるものの2基のピットを検出した。ため池形成以前のものと考えられるが、詳細は明らかにならない。

全体として、大池北西沢から反時計回りに遺物が表探された北東沢までの一带が、基本的に12世紀中葉の遺物散布地として捉えることができよう。

〈引用文献〉

- 上原真人 1978 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 元興寺文化財研究所考古学研究室
杉山信三・岡田茂弘 1961 「尊勝寺跡発掘調査報告書」『平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡』 奈良国立文化財研究所
三木市教育委員会 2004 「宿原古窯発掘調査」『社会教育活動状況報告書』平成15年度
2007 「宿原3号窯確認調査」『社会教育活動状況報告書』平成18年度
森内秀造 1999 「出土土器の検討」『久留美・跡部窯跡群』 兵庫県教育委員会

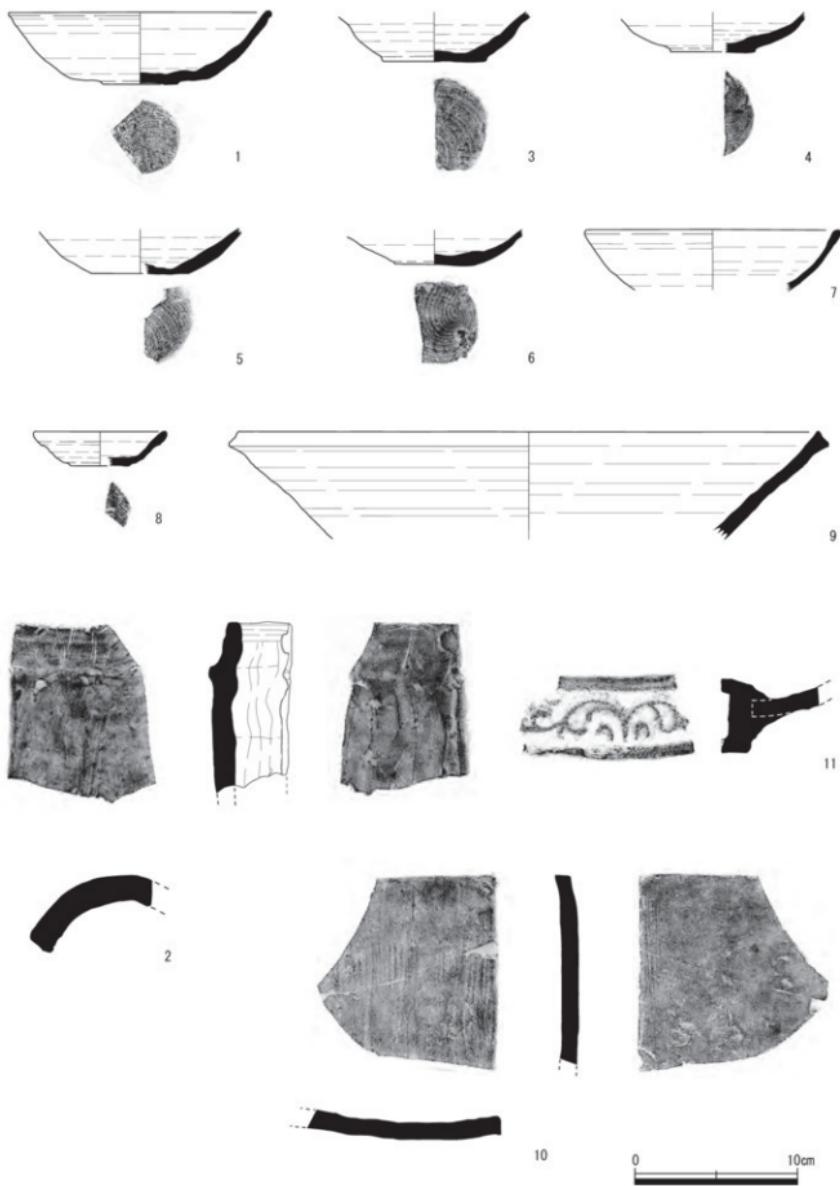


図33 出土遺物 (S=1/3)

表3 出土遺物観察表

番号	トレンチ	遺構名	遺物名	断面(部位)	色調	胎土	焼成	法量(cm)	()は復元値	形態的特徴・調整など	
										口径	底径
1	北東沢	礎層 表様	須恵器	塊	外面：2.5G7T/1 明オリーブ灰褐色 内面：2.5G7W/1 オリーブ灰褐色	密(2mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	(16.2)	4.6	4.4	外面部：回旋ナデ 内面部：回旋ナデ
2	北東沢	礎層 表様	丸瓦	玉縁	凸面：7.5T6/1 灰色 凹面：N6/1 灰色	やや密(2mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	長さ10.5 幅7.5	厚さ1.8	玉縁部：回転ナデ 玉縁部：回転ナデ	底部：無
3	T1	堆積層 上面	須恵器	塊(底部)	外面：7.5TR7/1 明地灰褐色 内面：7.5TR7/1 明地灰褐色	密(1mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	(6.2)	3.0	2.4	外面部：回旋ナデ 内面部：回旋ナデ
4	T1	堆積層 上面	須恵器	塊(底部)	外面：N6/1 灰色 内面：N7/1 灰白色	密(1mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	(5.0)	2.4	2.7	外面部：回旋ナデ 内面部：回旋ナデ
5	T1	堆積層 上面	須恵器	塊(底部)	外面：5T8/1 灰白色 内面：5T8/1 灰白色	密(1mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	(6.2)	2.7	2.1	外面部：回旋ナデ 内面部：回旋ナデ
6	T1	堆積層 (砂礫)	須恵器	塊(底部)	外面：2.5T8/1 灰白色 内面：2.5T8/1 灰白色	密(1mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	(5.2)	1.5	1.2	底部：無
7	T1	堆積層 (砂礫)	須恵器	塊(口縁部)	外面：7.5T6/1 灰色 内面：7.5T7/1 灰白色	密(1mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	(15.6)	3.7	3.7	外面部：回旋ナデ 内面部：回旋ナデ
8	T1	堆積層 (砂礫)	須恵器	小皿(口縁～底部)	外面：7.5T6/1 灰色 内面：7.5T6/1 灰色	密(2mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	(8.2)	(3.6)	2.1	外面部：回旋ナデ 内面部：回旋ナデ
9	T1	堆積層 (砂礫)	須恵器	钵(口縁部)	外面：5T6/1 灰色 内面：2.5T8/1 灰白色	密(1mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	(35.6)	6.7	6.7	外面部：回転ナデ 内面部：回転ナデ
10	T1	堆積層 (砂礫)	平瓦	凸面：5T6/1 灰色 凹面：5T7/1 灰白色	密(1mm以下)の灰白色の砂粒含む	良好	長さ12.0 幅12.7	厚さ1.1	瓦当部厚4.5	凸面：タキのちナデ 凹面：タキのちナデ	底部：無
11	T9	表土	軽平瓦	瓦当部	凸面：7.5T7/1 灰白色 凹面：N6/1 灰色	少々窓無い(2mm以下)の白色砂粒、黒色砂粒含む	良好	長さ6.0 幅14.2	4.5	4.5	凸面：ナデ 凹面：ナデ

第4節 八幡谷ノ上明石道付城跡B・C

1 はじめに

八幡谷ノ上明石道付城跡B・C調査は、福井字三木山 2465-1において、三木合戦関連遺跡の国史跡指定に向けて、その範囲や構造を確認するため実施した。

八幡谷ノ上明石道付城跡B・Cは、兵庫県立三木山森林公園の丘陵に立地する付城跡である。三木・明石間をつなぐ明石道の東側尾根上に位置する（図34）。Bは標高103m・比高43m、Cは標高108m・比高48mである。

城主は『播磨鑑』・『別所軍記』によると、間島氏勝・福原長堯とされている。天正7年（1579）9月9・10日の平田大村合戦後、10月7日に包囲網を縮小して築かれた「八幡山」（『播州御征伐之事』）に相当すると考えられている（三木市教育委員会2012）。

現地調査は、平成23年3月8日～3月24日に実施した。調査面積は73.5m²である。

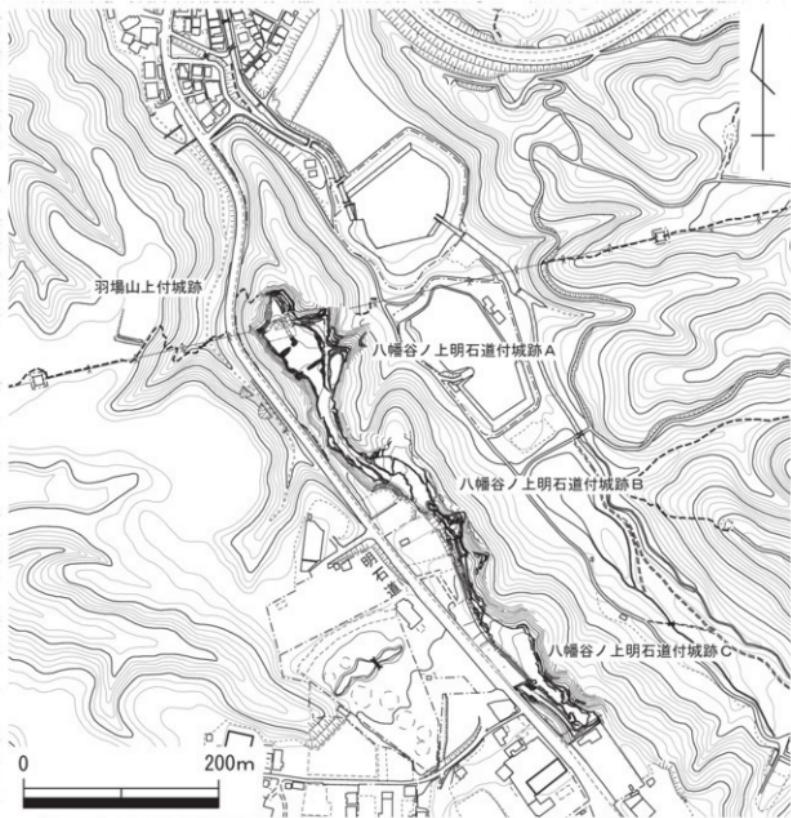


図34 八幡谷ノ上明石道付城跡B・C 位置図

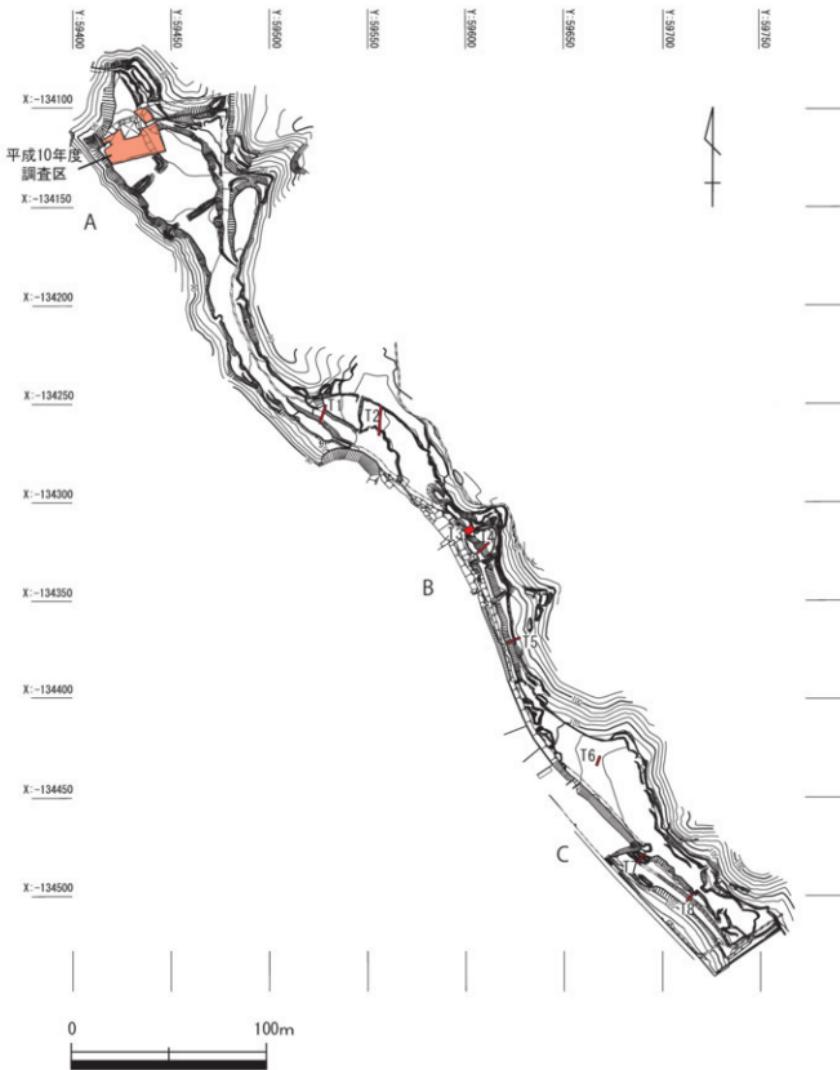


図 35 トレンチ配置図

2 繩張の概要（図 35）

八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・Cは、一城別郭構造を呈し、全長は約 550m、城域面積は約 14000 m²に及び、付城群の中で4番目の規模である（三木市教育委員会 2012）。

Aは平成 10 年度に実施した本発掘調査により、主郭が土塁のほかに空堀で囲まれていたことが確認され、さらに内部では柱穴群と 1 間 × 1 間の掘立柱建物跡、主郭東脇の通路から門跡とみられる礎石が検出されたことから、中核を担っている地区といえる（三木市教育委員会 1999）。一方、Bは土塁で囲まれた中核となる曲輪があり、最高 1.5m の西辺土塁が南へ延び、C の方向へ続いている。Cについては、B から続くなだらかな尾根の南西側において、南北に延びる小規模な溝と土塁ラインによって、駐屯部が形成されている。

A・B に設けられている土塁囲みの曲輪が中心部と考えられ、それを繋ぐ A・B 間の尾根及び B・C 間の尾根、C が駐屯部として利用されたものといえよう。

以上、八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・Cは、山全体を城郭化して大軍勢の駐屯が可能であることから、力攻めを意識した最前線の付城と評価できる。

3 調査の方法

今回の調査は、八幡谷ノ上明石道付城跡 B に 5 箇所 (T 1 ~ 5)、八幡谷ノ上明石道付城跡 C (T 6 ~ 8) に 3 箇所の調査トレンチを設定した（図 35）。人力掘削は委託し、表土除去、土層断面・遺構面の精査などを行った。トレンチ配置図 (1/500)・遺構平面図 (1/50) は委託し、トータルステーション測量を行った。土層断面図 (1/20) は手実測を行った。

4 調査の結果

(1) 八幡谷ノ上明石道付城跡 B

T 1 (図 36)

付城跡 A とつながる通路状遺構とそれを挟む一段高くなった盛土状遺構を横断するかたちで幅 1 m、長さ 10m のトレンチを設定した。断ち割りを設け、土層断面を確認したところ、通路状遺構を挟んで北側が約 0.2m、南側が約 0.3m の盛土（やや軟質の黄褐色系砂質土）で構成されており、中央が地山（明褐色砂質土）を削り出して通路状遺構を形成していたことが確認できた。

T 2 (図 37)

T 1 の約 30m 東の盛土状遺構において、幅 1 m、長さ 15m のトレンチを設定した。断ち割りを設け、土層断面を確認したところ、明黄褐色砂質土のベース上に約 0.3m のやや軟質の黄褐色系砂質土によって北側から順に 2 段階に分けて盛土造成されていることが確認できた。北端で弥生土器の小片が出土した。

T 3 (図 38)

付城跡 B の主郭北西隅の虎口と推定される箇所において、3.5m × 4.5m のトレンチを設定した。西側の固く締まる明褐色砂質土で構築された主郭西辺土塁の切れ目において盛土状の通路が確認できた。北東端において、堅壠状通路の落ち込み際を検出した。トレンチ中央やや南側において、土塁盛土と遺構面ベース土（明黄褐色砂質土）の境界を検出した。なお、盛土状通路の上面において、後世のものと推定される土坑を検出した。

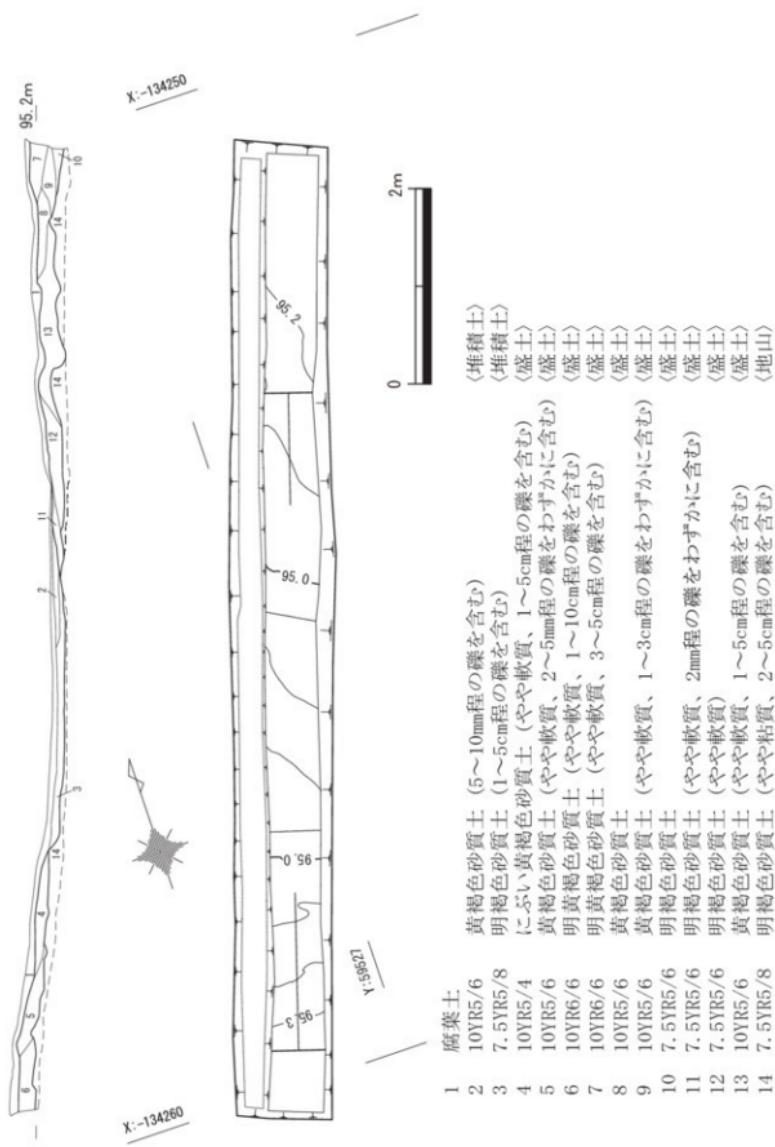


図 36 T 1 平面・断面図

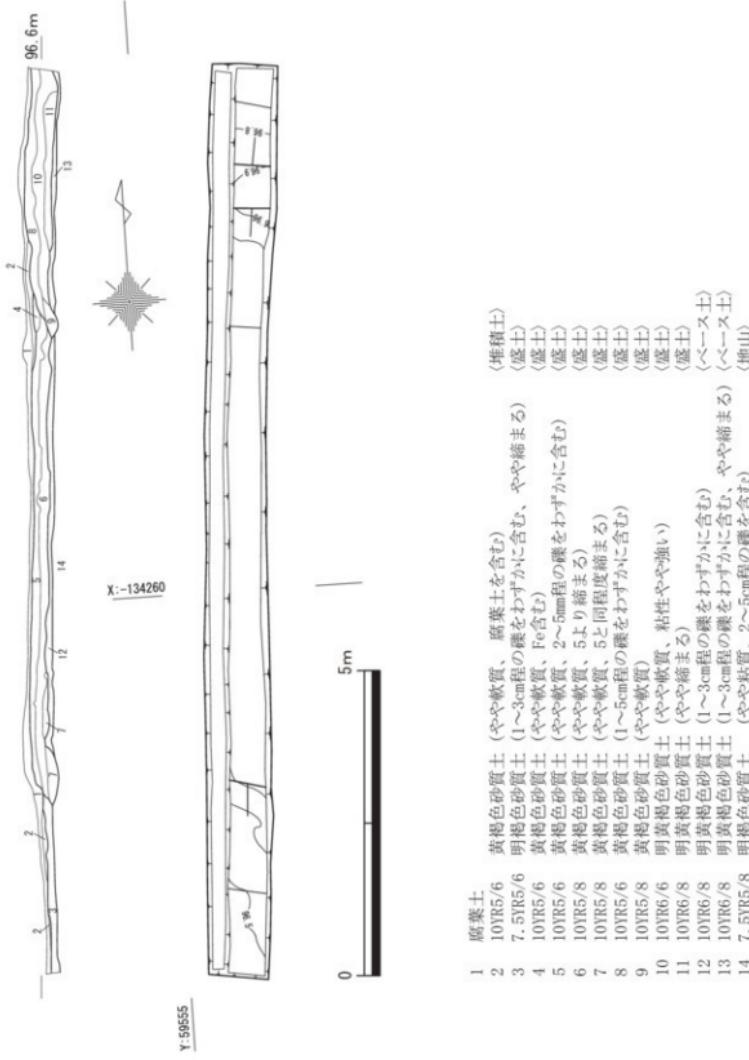
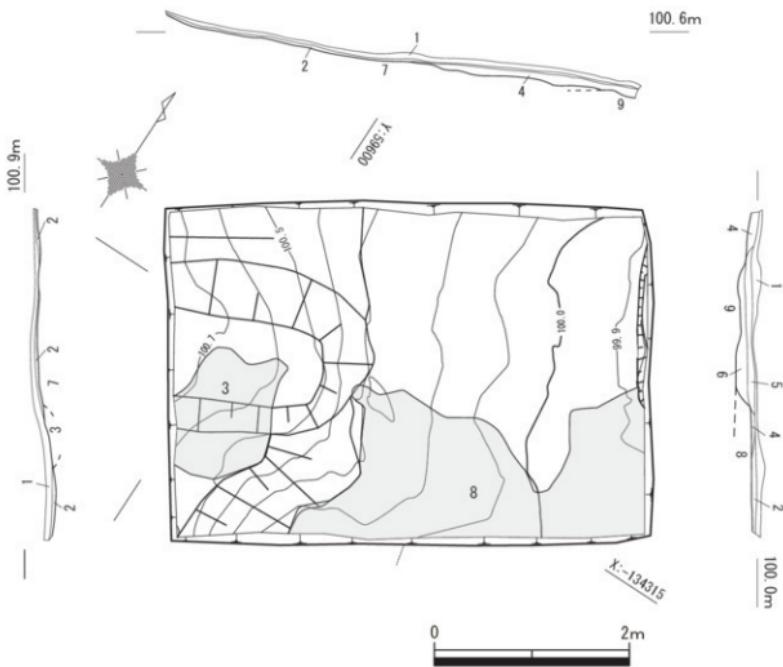


図 37 T 2 平面・断面図

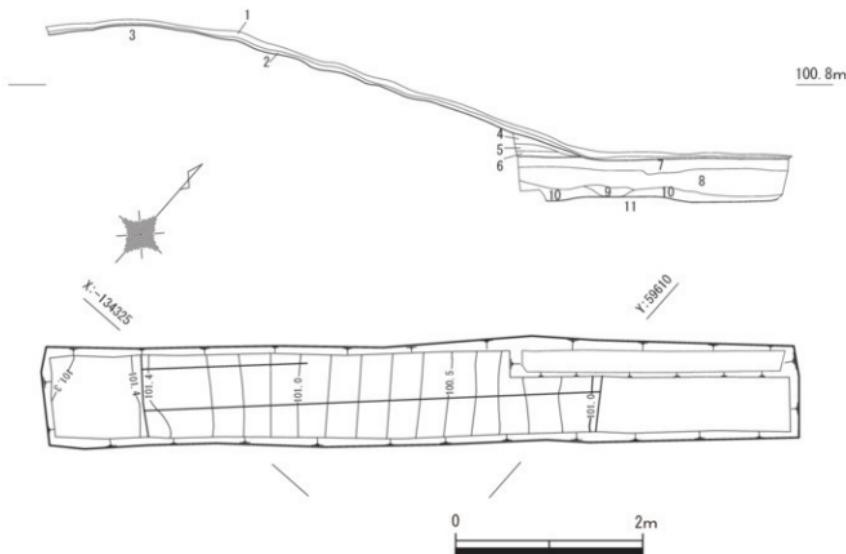


- 1 腐葉土
 2 10YR5/6 黄褐色砂質土（やや軟質、腐葉土を含む）
 3 7.5YR4/4 褐色砂質土（5mm～5cm程の礫を密に含む）
 4 10YR4/6 褐色砂質土（やや軟質、5mm～3cm程の礫を密に含む）
 5 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土（2～5mm程の礫を含む）
 6 10YR4/6 褐色砂質土（1～3cm程の礫を密に含む）
 7 7.5YR5/6 明褐色砂質土（固く縮まる、1～5cm程の礫を含む）
 8 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土（やや粘質、やや縮まる）
 9 7.5YR5/8 明褐色砂質土（固く縮まる、1～5cm程の礫を含む）

図 38 T 3 平面・断面図

T 4 (図 39)

主郭西辺土塁を直交するかたちで、幅 1 m、長さ 8 m のトレンチを設定した。土塁裾部以東に断ち割りを設け、土層断面を確認したところ、にぶい黄褐色砂質土のベース上に高さ約 1.45 m の土塁が造成されていたことが判明した。土塁盛土については、断ち割りを行った裾部では、明褐色系砂質土と明褐色砂礫の互層で造成されていたことが確認できた。

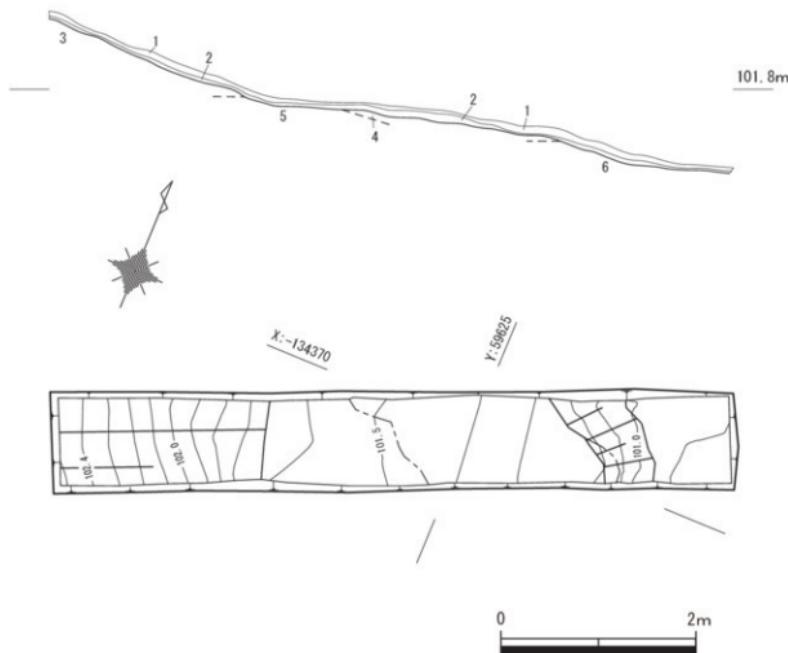


- | | | |
|----|---|-------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 10YR5/6 黄褐色砂質土 (やや軟質、腐葉土を含む) | （堆積土） |
| 3 | 7.5YR5/6 明褐色砂質土 (やや固く締まる、1~3cm程の礫を密に含む) | （土塁） |
| 4 | 7.5YR4/6 暗褐色砂質土 (2~5mm程の礫を含む) | （土塁） |
| 5 | 7.5YR5/6 明褐色砂礫 (2~7cm程の礫主体) | （土塁） |
| 6 | 7.5YR5/8 明褐色砂質土 (やや粘質) | （土塁） |
| 7 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 (1~5cm程の礫を含む) （遺構面ベース土） | |
| 8 | 10YR5/6 黄褐色砂質土 (3~5cm程の礫を含む) | |
| 9 | 10YR5/8 黄褐色砂質土 (3cm程の礫をわずかに含む) | |
| 10 | 10YR6/8 明黄褐色砂質土 (3~5cm程の礫を含む) | |
| 11 | 10YR5/6 明褐色砂質土 (やや粘質、5~10cm程の礫を密に含む) | （地山） |

図 39 T 4 平面・断面図

T 5 (図 40)

主郭南側に展開する帯曲輪南端において、その西辺土壘部を直交するかたちで、幅 1 m、長さ 7 m のトレーニチを設定した。帯曲輪（幅 2.9~3.5m）は、褐色砂質土とやや軟質の明黄褐色砂質土の盛土によって造成されていることが判明した。そして、褐色砂質土の帯曲輪上に土壘（黄褐色砂質土）が構築されていたことが確認できた。なお、帯曲輪の切岸は地山とみられる明赤褐色砂質土となっている。



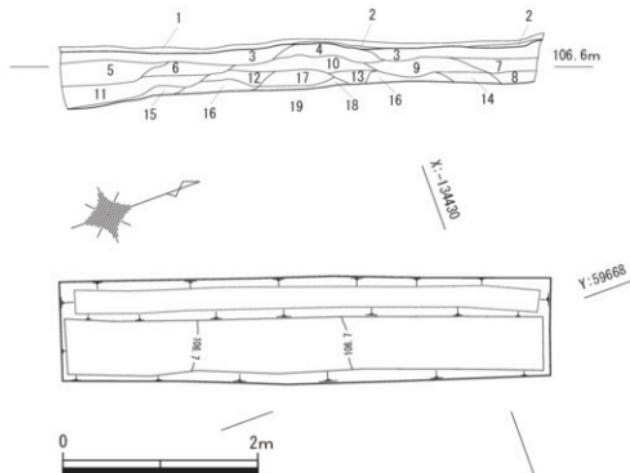
- | | | |
|---|---------------------------------------|---------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 10YR5/6 黄褐色砂質土（やや軟質、腐葉土を含む） | 〈堆積土〉 |
| 3 | 10YR5/8 黄褐色砂質土（1~3cm程の礫をわずかに含む） | 〈土壘〉 |
| 4 | 10YR6/6 明黄褐色砂質土（やや軟質、5mm~3cm程の礫を密に含む） | 〈テラス盛土〉 |
| 5 | 10YR4/6 褐色砂質土 | 〈テラス盛土〉 |
| 6 | 5YR5/6 明赤褐色砂質土（やや締まる） | 〈地山〉 |

図 40 T 5 平面・断面図

(2) 八幡谷ノ上明石道付城跡C

T 6 (図 41)

平坦地が広がる空間において、幅 1m、長さ 5m のトレンチを設定した。断ち割りを設け、土層断面を確認したところ、やや固く締まる明褐色砂質土地山上に、礫混じりの黄褐色砂質土・明黄褐色砂質土がトレンチ中央を基点に 0.4~0.5m 積み重なっている状況が判明した。しかし、これが自然堆積によるものか、盛土造成によるものかは判然としない。



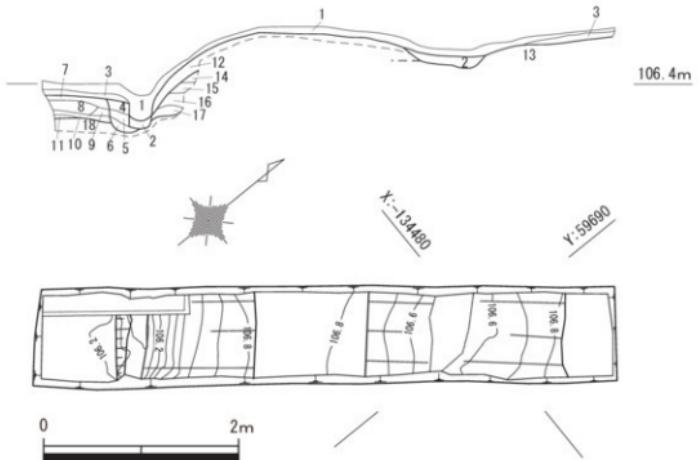
- | | | | |
|----|----------|----------------------------------|-----------|
| 1 | 腐葉土 | | |
| 2 | 10YR5/6 | 黄褐色砂質土 (やや軟質、腐葉土を含む) | (堆積土) |
| 3 | 10YR5/6 | 黄褐色砂質土 (やや軟質、2~10mm程の礫を含む) | (遺構面ベース土) |
| 4 | 10YR5/6 | 黄褐色砂質土 (軟質) | (遺構面ベース土) |
| 5 | 10YR5/8 | 黄褐色砂質土 (6よりやや軟質) | |
| 6 | 10YR5/6 | 黄褐色砂質土 | |
| 7 | 10YR5/8 | 黄褐色砂質土 | |
| 8 | 10YR6/6 | 明黄褐色砂質土 (2~5mm程の礫をまばらに含む) | |
| 9 | 10YR5/8 | 黄褐色砂質土 (3~5cm程の礫をまばらに含む) | |
| 10 | 10YR5/8 | 黄褐色砂質土 (2~7cm程の礫をまばらに含む) | |
| 11 | 10YR6/6 | 明黄褐色砂質土 (粗砂をまばらに含む) | |
| 12 | 10YR6/6 | 明黄褐色砂質土 (やや軟質) | |
| 13 | 10YR6/6 | 明黄褐色砂質土 (3~5cm程の礫を含む) | |
| 14 | 10YR5/8 | 黄褐色砂質土 (2~5cm程の礫をまばらに含む) | |
| 15 | 7.5YR5/6 | 明褐色砂質土 (2~5cm程の礫をまばらに含む) | |
| 16 | 7.5YR5/6 | 明褐色砂質土 (やや粘質) | |
| 17 | 10YR6/6 | 明黄褐色砂質土 (軟質) | |
| 18 | 7.5YR5/6 | 明褐色砂質土 (2mm程の礫を含む、やや粘質) | |
| 19 | 7.5YR5/6 | 明褐色砂質土 (やや固く締まる、5mm~5cm程の礫を密に含む) | (地山) |

図 41 T 6 平面・断面図

T 7 (図 42)

付城跡C南側の北西から南東方向に延びる土壙・溝ラインの北西端において、それを直交するかたちで、幅1m、長さ6mのトレーニングを設定した。断ち割りを設け、土層断面を確認したところ、土壙上面は客土とみられる軟質の黄褐色砂質土が堆積し、その下層に比較的縮まった黄褐色系砂質土で構築されていることが判明した。土壙据部両側において、小規模な溝を検出した。土壙の規模は、基底部幅2.8m、高さは城外側で0.9m、城内側で0.2mである。

土壙西側の平坦面は固く縮まっており、後述のT 8で推測される機械造成によって整地されたものと考えられる。土壙西側の溝も土壙西端をほぼ垂直に削って、整地土の上面から掘られていくことが確認できた。これらのことから、土壙西側の溝と平坦面は近現代になされたものと判断できる。



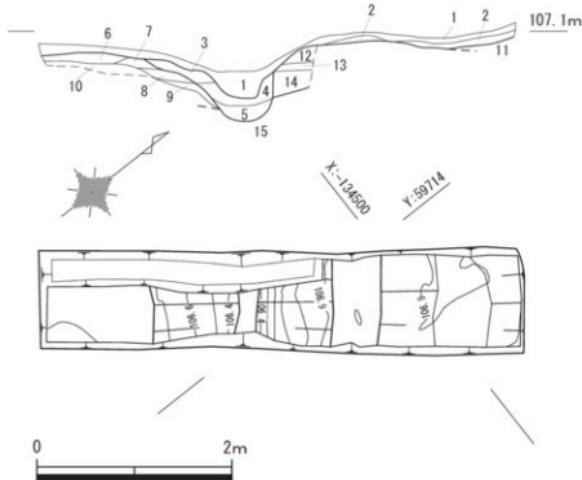
1	腐葉土		
2	10YR3/4	暗褐色砂質土（軟質）	（堆積土）
3	10YR5/6	黄褐色砂質土（やや軟質、腐葉土を含む）	（堆積土）
4	10YR5/6	黄褐色砂質土	（溝埋土）
5	10YR5/8	黄褐色砂質土（やや粘質、1cm程の礫をわずかに含む）	（溝埋土）
6	10YR6/8	明褐色砂質土（やや粘質、5mm~1cmの礫をわずかに含む）	（溝埋土）
7	2.5YR5/6	黄褐色砂質土（1~3cm程の礫を密に含む、礫は他のところのものの可能性）	（整地土（近現代か））
8	10YR5/8	黄褐色砂質土（やや粘質、やや固く縮まる、5mm~1cm程の礫を密に含む）	（整地土（近現代か））
9	7.5YR5/6	明褐色砂質土（やや粘質、やや固く縮まる、2mm程の礫をわずかに含む）	（整地土（近現代か））
10	7.5YR5/6	明褐色砂質土（やや粘質、やや固く縮まる、18をまばらに含む）	（整地土（近現代か））
11	7.5YR5/6	明褐色砂質土（やや粘質、やや固く縮まる、18を密に含む）	（整地土（近現代か））
12	10YR5/8	黄褐色砂質土（やや軟質、5mm~5cm程の礫を含む）	（客土か？）
13	10YR5/8	黄褐色砂質土（2~5cm程の礫をまばらに含む）	（盛土）
14	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質土（やや軟質、5~10mm程の礫をまばらに含む）	（土壙）
15	10YR6/6	明褐色砂質土	（土壙）
16	10YR5/8	黄褐色砂質土（2~10mm程の礫をまばらに含む）	（土壙）
17	10YR6/8	明褐色砂質土（やや固く縮まる、18を密に含む）	（土壙）
18	7.5YR6/8	橙色砂質土（固く縮まる、粗砂~2mm程の礫を密に含む、バイラン土）	（地山）

図 42 T 7 平面・断面図

T 8 (図 43)

先述の土壘・溝ラインの中央付近において、それを直交するかたちで、幅 1m、長さ 5m のトレンチを設定した。断ち割りを設け、土層断面を確認したところ、土壘は地山（固く締まる礫混じり明褐色砂質土）の上面ににぶい黄色砂質土・明黄褐色砂質土などで構築されていることが判明した。土壘据部両側において、小規模な溝を検出した。土壘の規模は、基底部幅 1.7m、高さは城外側で 0.8m、城内側で 0.1m である。

土壘西側の平坦面は極めて固く締まっており、なおかつ地山に含まれるものとは質の異なる黒色の小礫が密に含まれることから、客土を用いて機械造成によって整地されたものと考えられる。土壘西側の溝も土壘西端をほぼ垂直に削って、整地土の上面から掘られていること確認できた。これらのことから、土壘西側の溝と平坦面は近現代になされたものと判断できる。



1	腐葉土		
2	10YR5/6	黄褐色砂質土（やや軟質、腐葉土を含む）	（堆積土）
3	2.5Y5/6	黄褐色砂質土（軟質）	（近現代堆積土）
4	2.5Y6/8	明黄褐色砂質土	（近現代堆積土）
5	10YR5/8	黄褐色砂質土（2～5cm程の礫をわずかに含む）	（近現代堆積土）
6	10YR5/8	黄褐色砂質土（極めて固く締まる、5mm～3cm程の礫を密に含む）	（近現代整地土）
7	2.5Y5/4	黄褐色砂質土（5mm～10mm程の礫を含む）	（近現代整地土）
8	2.5Y4/6	オリーブ褐色砂質土（細砂を密に含む）	（近現代整地土）
9	10YR5/6	黄褐色砂質土（固く締まる、5mm～10mm程の礫を含む）	（近現代整地土）
10	10YR5/4	黄褐色砂質土（固く締まる、5mm～3cm程の礫を密に含む）	（近現代整地土）
11	10YR5/6	黄褐色砂質土（5mm～3cm程の礫をまばらに含む）	（盛土）
12	2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土（やや軟質、1～3cm程の礫をまばらに含む）	（土壘）
13	2.5Y6/6	明黄褐色砂質土（やや軟質、3～5cm程の礫をわずかに含む）	（土壘）
14	10YR5/8	黄褐色砂礫（5～10cm程の礫主体）	（土壘）
15	7.5YR5/8	明褐色砂質土（固く締まる、3～5cm程の礫を密に含む）	（地山）

図 43 T 8 平面・断面図

5　まとめ

八幡谷ノ上明石道付城跡Bは、北側の軍勢の駐屯地と考えられる空間は自然地形をそのまま利用したものではなく、盛土・切土で造成されていること、主郭部の土壘は比較的締まった盛土によって構築されていること、南側に続く土壘も帶曲輪上面に構築されていたことが確認できた。そして、主郭西辺土壘は帶曲輪西辺土壘と比較して、しっかり造成されていることが判明した。

八幡谷ノ上明石道付城跡Cは、北側の平坦面が軍勢の駐屯地として利用されていたと考えられるが、盛土造成か自然堆積かは判別しがたい。土壘・溝ラインについては、土壘の盛土は丁寧には築かれておらず、付城跡Bよりも劣ることが分かった。そして、土壘西側の溝と平坦面が近現代によるものである可能性が高いことが判明した。おそらく、土壘を境界線として何らかの利用がなされていたものと考えられる。

〈引用文献〉

- 三木市教育委員会 1999 「八幡谷ノ上明石道付城発掘調査概要」『社会教育活動状況報告書』平成10年度
2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』

第5節 高木大山付城跡・高木大山土壘A

1 はじめに

高木大山付城跡・高木大山土壘A調査は、別所町高木三木山国有林 236 林イ小班・237 林班イ小班において、三木合戦関連遺跡の国史跡指定に向けてその範囲や構造を確認するため実施した。

両遺跡は、三木ホースランドパークの正門手前北側の「物見台」と現地案内されている山林に位置する（図44）。標高91m、比高31mである。

天正6年（1578）～8年にかけて繰り広げられた三木合戦に伴う、織田方の付城跡及び多重土壘とされている。特に、高木大山付城跡は、天正7年（1579）4月に織田信忠の軍勢が築いた6箇所の付城の1つである可能性が考えられている（三木市教育委員会2012）。城主は不明である。

現地調査は、平成23年11月7日～11月29日に実施した。調査面積は55m²である。



図44 高木大山付城跡・高木大山土壘A 位置図

2 繩張の概要（図 45）

高木大山付城跡は、曲輪に折れを伴い、周辺に比較的平坦な台地が広がる。城域面積は約 500 m²を測り、小規模である（三木市教育委員会 2012）。城内は北西側が昭和 30 年頃の土取りのため一段低くなり、東辺・南西辺の堀状の凹地についても、土取りによって削られている。西隣に神戸営林署三木苗畠があつたことなどから、遺構の多くが破壊されている。

高木大山土塁 A は、付城の南側に近接して東西に延びる。苗畠造成前の昭和 22 年米軍撮影の空中写真及び昭和 36 年国土地理院撮影の空中写真により、高木大塚土塁内側（三木城側）ラインの延長線上にあたるとみられる（図版 2）。高木大山土塁 A の南側に近接して高木大山土塁 B・C が南北方向に延びる。外側ラインは高木大山土塁 D と接続する（三木市教育委員会 2012）。

高木大山土塁 B・C・D は、平成 8 年度に本調査が実施されている。基本的に両側もしくは片側に土取りのための溝を掘り、その土を盛って簡単な整形を行った上で築かれていることが判明している（三木市教育委員会 2000）。なお、高木大山土塁 B は消滅し、土塁 C・D は部分的に残存している。



図 45 トレンチ配置図

3 調査の方法

今回の調査は、4箇所の調査トレンチを設定した（図45）。人力掘削は委託し、表土除去、土層断面・遺構面の精査などを行った。トレンチ配置図（1/500）・遺構平面図（1/50）は委託し、トータルステーション測量を行った。土層断面図（1/20）は手実測を行った。

4 調査の結果

T 1（図46）

一段低い曲輪の北辺を直交するかたちで $1 \times 5\text{m}$ のトレンチを設定した。断ち割りを設けたところ、土星状遺構の北側にその上面から幅 2.9m 以上、深さ約 1.8m の落ち込みを検出した。横堀になるとみられる。現状の地形で、これほどの土量が堆積するとは考えにくいことから、曲輪の高さが現状よりも高かった可能性が高い。おそらく、一段高い曲輪に近いレベルになるとみられる。土星状遺構は土取りによる曲輪の削り残しによるものとみられる。

T 2（図47）

付城中央を横断するかたちで $1 \times 23\text{m}$ のトレンチを設定した。断ち割りを設けたところ、西端土星状遺構に沿う横堀（幅約 3m 、深さ約 1.4m ）を検出した。T 1同様、現状の地形で、これほどの土量が堆積するとは考えにくいことから、曲輪の高さが現状よりも高かった可能性が高い。おそらく、一段高い曲輪に近いレベルになるとみられる。土星状遺構は曲輪の削り残しによるものとみられる。

また、土星状遺構の東裾にビニール袋が含まれる層を切るかたちでトレンチに対し南北に直交する敷石暗渠が検出された。このことから、一段低い曲輪は現代に改変されて、利用されていたことが明らかとなった。

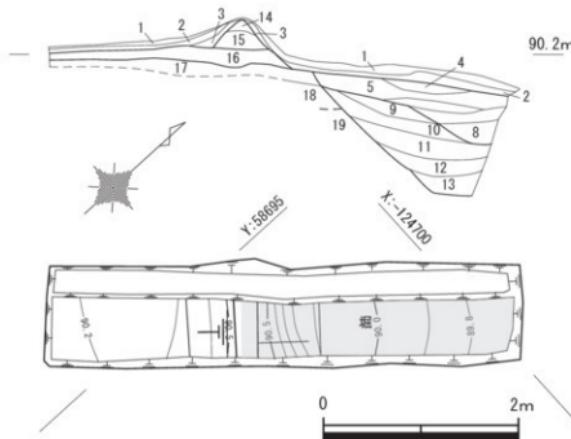
一段高い曲輪は、明黄褐色砂質土のベース上に軟質の黄褐色・オリーブ褐色砂質土の盛土によって造成されていることが確認できた。地山からの高さは約 1m である。東・西側法面が急傾斜にも関わらず、その下に土がほとんど堆積していないことから、これについても土取りによるものと断定できる。

東端については、断ち割りにより、幅 2.5m 、城内側からの深さ約 1.1m 、城外側からの深さ 0.45m の横堀が検出された。曲輪盛土上面からの深さは約 1.9m を測る。横堀以東はテラス状遺構（幅 1.5m 以上）となっている。

T 3（図48）

曲輪南側西辺を直交するかたちで $1 \times 9\text{m}$ のトレンチを設定した。断ち割りを設けたところ、西端土星状遺構に沿って横堀（幅約 2.8m 、深さ約 1.1m ）を検出した。土星状遺構東側の堀状遺構については垂直にえぐられているにも関わらず、その下に土がほとんど堆積していないことから、土取りによるものと断定できる。西端横堀は曲輪切岸から崩落した土によって埋まったものといえる。すなわち、土星状遺構は横堀の堆積と土取りによって、後世に形成されたものであることが明らかとなった。

曲輪については、T 2同様、軟質の盛土によって地山から 0.9m 造成されていることが確認できた。曲輪盛土上面からの横堀の深さは約 1.6m を測る。



- | | | |
|----|---|-----------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土 (1を含む) | 〈堆積土〉 |
| 3 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 (軟質、1を含む) | 〈盛土流出土?〉 |
| 4 | 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土 (2~5cm程の礫を密に含む) | 〈埋土上層〉 |
| 5 | 2.5Y6/8 明黃褐色砂質土 (ややシルト質) | 〈埋土上層〉 |
| 6 | 2.5Y6/8 明黃褐色砂質土 (1~3cm程の礫をまばらに含む、やや軟質) | 〈埋土上層〉 |
| 7 | 2.5Y6/8 明黃褐色砂質土 (やや軟質、5mm~3cm程の礫をまばらに含む) | 〈埋土上層〉 |
| 8 | 7.5YR5/8 明褐色砂質土 (5~10cm程の礫を密に含む) | 〈埋土上層〉 |
| 9 | 2.5Y6/8 明黃褐色砂質土 (わざかに軟質) | 〈埋土下層〉 |
| 10 | 2.5Y5/6 黄褐色砂質土 (軟質、2~5cm程の礫をまばらに含む) | 〈埋土下層〉 |
| 11 | 2.5Y5/6 黄褐色砂質土 (軟質、2cm程の礫を僅かに含む) | 〈埋土下層〉 |
| 12 | 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土 (やや軟質) | 〈埋土下層〉 |
| 13 | 7.5YR5/6 明褐色砂質土 (10cm程の礫をまばらに含む) | 〈埋土下層〉 |
| 14 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 (軟質、5~10mm程の礫をまばらに含む) | 〈曲輪盛土〉 |
| 15 | 2.5Y5/8 黄褐色砂質土 (やや粘質) | 〈曲輪盛土〉 |
| 16 | 2.5Y5/8 黄褐色砂質土 (15より粘質) | 〈曲輪盛土〉 |
| 17 | 10YR6/8 明黃褐色砂質土 | 〈連構面ベース土〉 |
| 18 | 7.5YR5/8 明褐色砂質土 (1~3cm程の礫を僅かに含む) | |
| 19 | 5YR5/8 明赤褐色砂質土 (固く締まる、3~5cm程の礫を密に含む、
2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土を粒上に含む) | 〈地山〉 |

図46 T1 平面・断面図

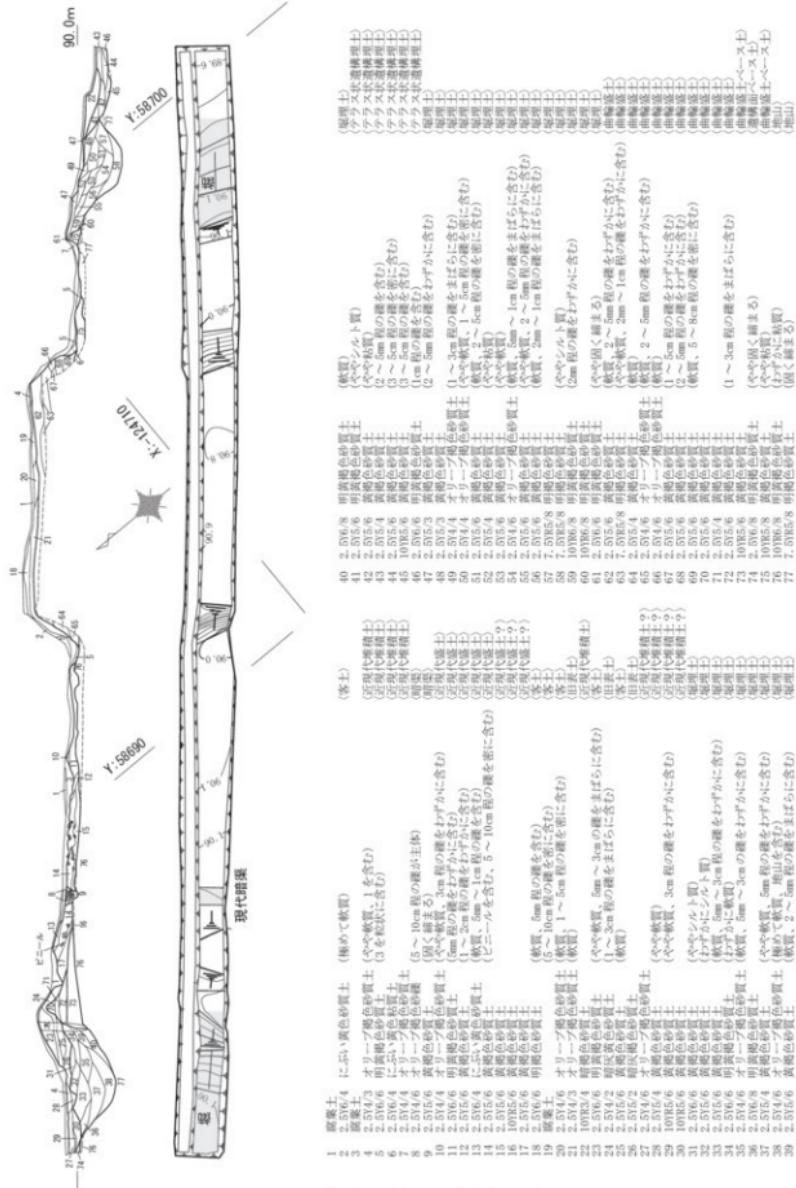
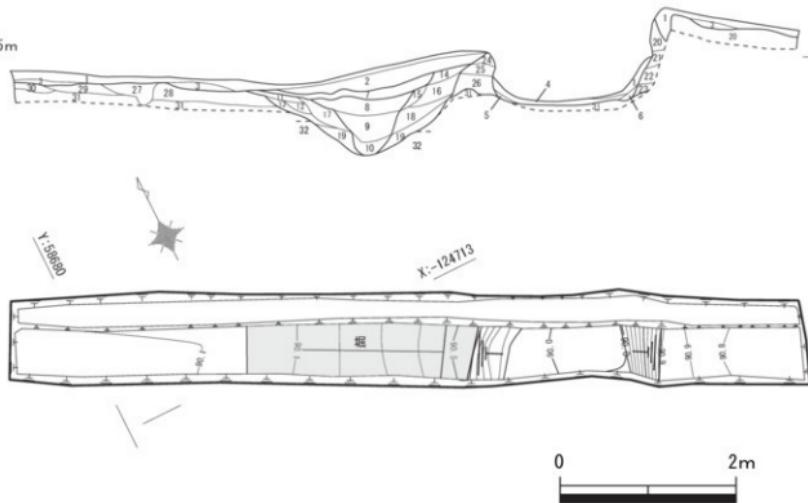


図47 T2 平面・断面図

90.5m



- 1 腐葉土
 2. 515/6 黄褐色砂質土 (5mm~5cm程の縦をわざかに含む)
 3 101R4/6 褐色砂質土 (1を粒状に含む) (客土)
 (現代堆積土)
 4. 2. 514/4 オリーブ褐色砂質土
 (現代堆積土)
 5. 2. 516/4 にじみ黄色砂質土
 (現代堆積土)
 6. 2. 516/4 にじみ黄色砂質土 (やや粘質)
 (現代堆積土)
 7 101R3/3 暗褐色砂質土 (軟質)
 (旧表土)
 8. 2. 515/4 黄褐色砂質土 (極めて軟質、わざかに結質)
 (堆埋土)
 9. 2. 514/6 オリーブ褐色砂質土 (極めて軟質、わざかに結質、5mm~5cm程の縦を含む)
 (堆埋土)
 10. 101R5/6 褐色砂質土 (やや軟質)
 (堆埋土)
 11. 101R5/4 にじみ黄褐色砂質土
 (堆埋土)
 12. 2. 515/6 褐褐色砂質土 (やや軟質)
 (堆埋土)
 13. 2. 515/6 褐褐色砂質土 (1より軟質)
 (堆埋土)
 14. 2. 515/6 褐褐色砂質土 (やや軟質)
 (堆埋土)
 15. 2. 515/4 褐褐色砂質土 (軟質)
 (堆埋土)
 16. 2. 515/4 黄褐色砂質土 (やや軟質)
 (堆埋土)
 17. 2. 515/4 褐褐色砂質土 (軟質)
 (堆埋土)
 18. 2. 515/6 黄褐色砂質土 (やや軟質)
 (堆埋土)
 19. 101R5/8 黄褐色砂質土 (やや軟質)
 (堆埋土)
 20. 2. 515/6 黄褐色砂質土 (軟質、2~5mm程の縦をまばらに含む)
 (曲輪盛土)
 21. 101R5/8 黄褐色砂質土 (やや軟質、2~5mm程の縦をまばらに含む)
 (曲輪盛土)
 22. 2. 514/6 オリーブ褐色砂質土 (2より軟質)
 (曲輪盛土)
 23. 2. 515/4 褐褐色砂質土 (軟質)
 (曲輪盛土)
 24. 2. 515/6 黄褐色砂質土 (やや軟質、5mm~2cm程の縦をわざかに含む)
 (曲輪盛土)
 25. 2. 515/4 黄褐色砂質土 (軟質、2~5mm程の縦をわざかに含む)
 (曲輪盛土)
 26. 2. 515/4 黄褐色砂質土 (25より軟質)
 (曲輪盛土)
 27. 2. 515/4 褐褐色砂質土
 (遺構面ベース土?)
 28. 101R5/8 黄褐色砂質土
 (遺構面ベース土)
 29. 101R4/6 褐色砂質土
 (遺構面ベース土)
 30. 101R5/6 黄褐色砂質土 (わざかに粘質)
 (遺構面ベース土)
 31. 101R6/8 明るい褐色砂質土 (わざかに粘質)
 (露床ベース土)
 32. 5YR5/8 明るい褐色砂質土 (固く結まる、3~5cm程の縦を密に含む。2. 516/4にぶい黄色砂質土を粒状に含む) (地山)

図 48 T 3 平面・断面図

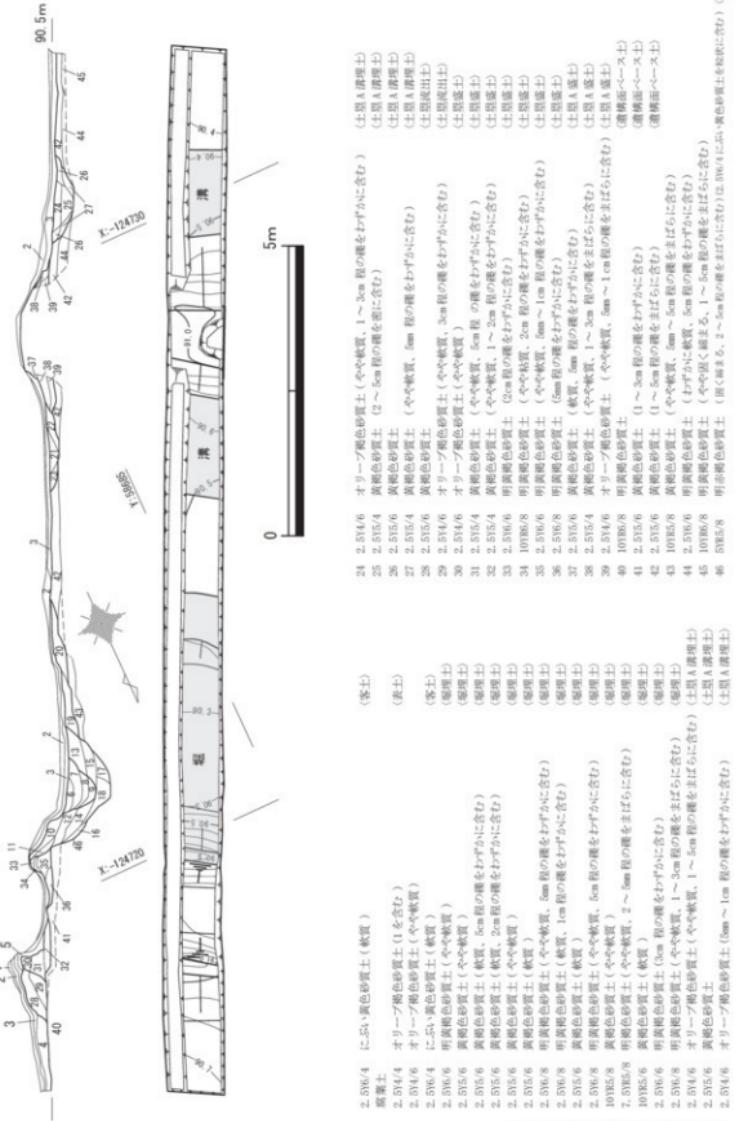


図49 T4 平面・断面図

T 4 (図 49)

高木大山付城跡曲輪南辺から高木大山土壘Aを縦断するかたちで1×18mのトレンチを設定した。断ち割りを設け、土層断面を確認したところ、曲輪南辺はT 3 東端において確認された曲輪盛土ではなく、T 3 の第31層に相当する明黄褐色砂質土が遺構面を形成していることが判明した。そして、その上面に主に黄褐色・明黄褐色砂質土からなる土壘状の盛土（基底部幅約 2.5m）がなされ、その中央が土取りされていたことが確認できた。そして、それに沿って地表面観察により確認できていた横堀については、さらに規模が大きくなり、幅約 4.5m、城内側からの深さ約 1.4m、城外側からの深さ約 1mとなることが明らかとなった。

土壘Aは基底部幅約 4m、高さ約 0.7mである。比較的軟質な盛土により造成されていたことが確認できた。両裾に幅約 1.5m・深さ 0.15～0.3mの溝が検出されたことから、両裾から検出された溝の土を掻き上げて土壘が設けられたものといえよう。

5 まとめ

高木大山付城跡は、城内は北西側が昭和30年頃の土取りのため一段低くなり、東辺・南西辺の堀状の凹地についても、土取りによって削られていることが明らかとなった。周囲には横堀（幅 2.5～4.5m、深さ 1.4～1.9m）が設けられ、曲輪は比較的軟質な盛土により造成され、南辺には土壘が設けられていた可能性が高いことが確認できた。なお、土壘については、堀に堆積した土量を考慮に入れると、曲輪南辺以外にもめぐっていた可能性も否定できない。

高木大山土壘Aは、土壘両側裾に溝を掘り、その土を掻き上げて盛られていたことが明らかとなった。比較的軟質な盛土により造成されていることから、ほかの多重土壘同様急ごしらえであったものと考えられる。

高木大山付城跡は土取り等による破壊により、残存状況は良好とはいはず、調査前においては付城跡と断定できる状況ではなかった。しかし、調査の結果、付城跡と確認できたことは大きな成果であった。

今後の課題として、横堀の切れ目を特定し、虎口の存在を明らかにすることがあげられよう。

〈引用文献〉

- 三木市教育委員会 2000 『高木古墳群・高木多重土壘』 1
2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』

第6節 二位谷奥付城跡C

1 はじめに

二位谷奥付城跡C調査は、さつき台2丁目（さつき台緑地）において、三木合戦関連遺跡の国史跡指定に向けて、その範囲や構造を確認するため実施した。

当遺跡は三木城に向かう兵庫道が通過する東側丘陵端に位置する（図50）。標高123m、比高21mである。天正6年（1578）～8年にかけて繰り広げられた三木合戦に伴う、織田方の付城跡とされている。城主は『別所軍記』によると、「中尾二位谷奥浅野弥兵衛、二位谷ハ御横目衆一柳小兵衛」とある。

現地調査は、平成24年2月13日～3月3日に実施した。調査面積は72m²である。

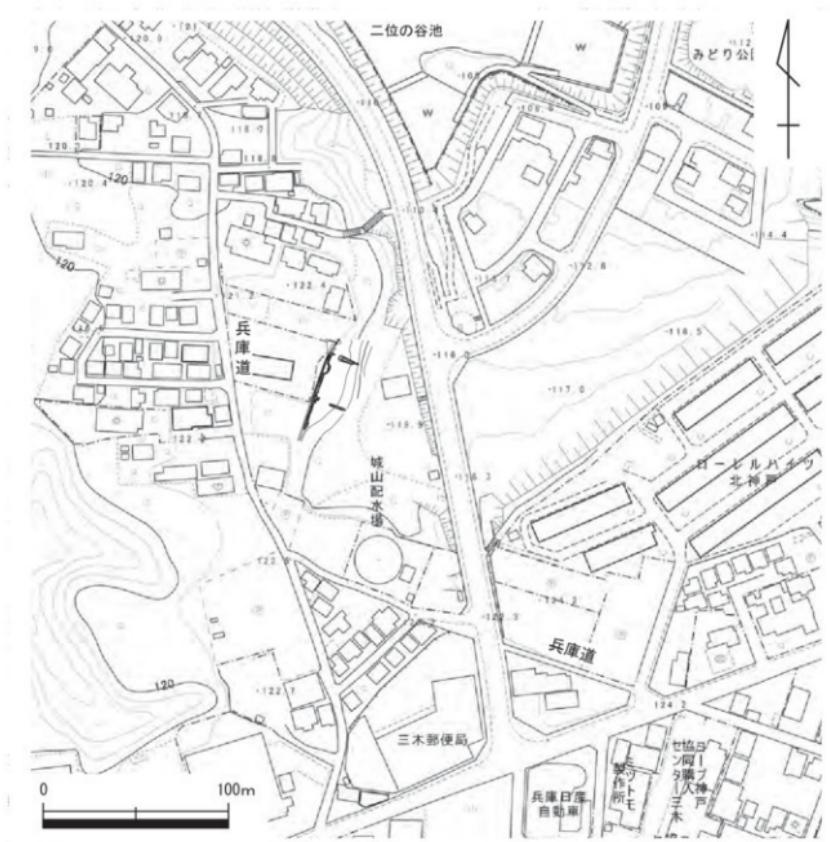


図50 二位谷奥付城跡C 位置図

2 縄張の概要（図 51）

二位谷奥付城跡Cは、西辺に南北に延びる土壘ラインを配し、北辺に東西に延びる土壘ラインで城域を画す。北辺土壘西端と西辺土壘北端の開口部が虎口と考えられる。城域は約 850 m²であり、小規模である。土壘によって区画されている空間及び周囲に広がる高低差が少ない尾根が、軍勢の駐屯部として利用されたものと考えられる。なお、西辺土壘は間隔を空けて北側へ続いていることから、二位谷奥付城跡A・Bとの連携が想定される（図版2）。

二位谷奥付城跡Aは、平成9・10年度に全面にわたって本発掘調査が実施された結果、主郭と重ね馬出しからなる本郭部、溝状遺構・柱穴群・二位谷土壘Aで区画された駐屯部の二重構造の付城であり、主郭には4棟の掘立柱建物が規則的に配置されていたことが確認できた（兵庫考古学研究会 1998）。二位谷奥付城跡Bは、二位谷奥付城跡Aから南東約350mの尾根上に位置していた。平成9・10年度に兵庫考古学研究会により発掘調査が実施され、12m四方と極めて小型で北西と南西の2方向に土壘を設け、他が崖面に面していた。曲輪北側において、L字形の土壘に沿つて1間×3間の掘立柱建物が検出された（兵庫考古学研究会 1998）。なお、A・Bともに遺跡は消滅している。

二位谷奥付城跡A・B・Cについては、同7年10月に織田方が包囲網を縮小した第3期に築かれた可能性が高く、同一尾根上に全長約580mにわたって立地するという点において、一城別郭構造として評価した方が適切ともいえる（三木市教育委員会 2012）。

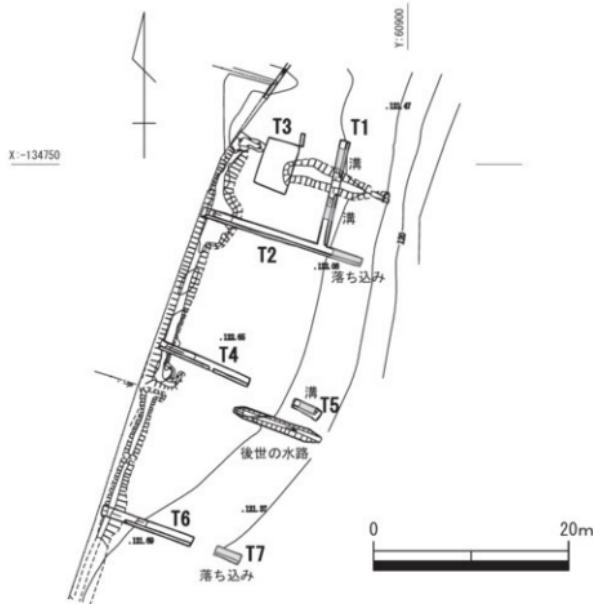


図 51 トレンチ配置図

3 調査の方法

今回の調査は、7箇所の調査トレンチを設定した（図51）。人力掘削は委託し、表土除去、土層断面・遺構面の精査などを行った。トレンチ配置図（1/500）・遺構平面図（1/50）は委託し、トータルステーション測量を行った。土層断面図（1/20）は手実測を行った。

4 調査の結果

T 1（図52）

東西に延びる北辺土塁を直交するかたちで $1 \times 11m$ のトレンチを設定した。断ち割りを設けたところ、土塁両裾において、溝（北側幅1.9m、深さ0.65m、南側幅1.3m、深さ0.8m）が検出された。

土塁は地山より上層の黄褐色系砂質土上面にやや軟質の黄褐色・明黄褐色砂質土を簡単に積み上げて築かれていることが判明した。両裾に掘った溝の土を搔き上げて造成されたものであろう。土塁の規模については、溝の最深部を基準とすると、基底部幅6.4m、高さ1.3mを測る。

T 2（図52）

南北に延びる西辺土塁の櫓台状に広がる箇所を直交し、城域を横断するかたちで $1 \times 17m$ のトレンチを設定した。断ち割りを設けたところ、櫓台状遺構については、当時の土塁上に現代の客土が積まれて形成されたものであることが判明した。土塁は地山より上層の黄褐色砂質土上面に主に明黄褐色砂質土を西側から積み上げて築かれていることが判明した。土塁西側はフェンス造成により破壊を受けている。土塁の規模については、基底部幅2.6m以上、高さ0.45mを測る。なお、東端において、落ち込みを検出した。

T 3（図53）

西辺土塁と北辺土塁が直交する開口部に $3 \times 5m$ のトレンチを設定した。西辺土塁が北端で東に折れる箇所については、現代の客土によるものであることが判明した。北東隅に延長したサブトレンチでは、北辺土塁の両裾の溝が検出されなかったことから、この開口部が虎口と判断できる。なお、虎口に伴う礎石等は検出されなかった。

T 4（図54）

南北に延びる西辺土塁の中央を直交するかたちで $1 \times 11m$ のトレンチを設定した。断ち割りを設けたところ、土塁は地山より上層の黄褐色砂質土上面に黄褐色・明黄褐色砂質土を西側から積み上げて築かれていることが判明した。土塁西側はフェンス造成により破壊を受けている。土塁の規模については、基底部幅3.8m以上、高さ0.35mを測る。

T 5（図54）

T 4の東側において溝の存在を確認するために、5m延長線上において $1 \times 3m$ のトレンチを設定した。断ち割りを設けたところ、幅1.0m、深さ0.45mの溝を検出した。

T 6（図55）

南北に延びる西辺土塁の南側を直交するかたちで $1 \times 10m$ 弱のトレンチを設定した。土塁裾部以東に断ち割りを設けたところ、土塁は地山より上層の黄褐色砂質土上面に明黄褐色砂質土を積み上げて築かれていることが判明した。土塁西側はフェンス造成により破壊を受けている。土塁の規模については、基底部幅4.7m以上、高さ0.75mを測る。

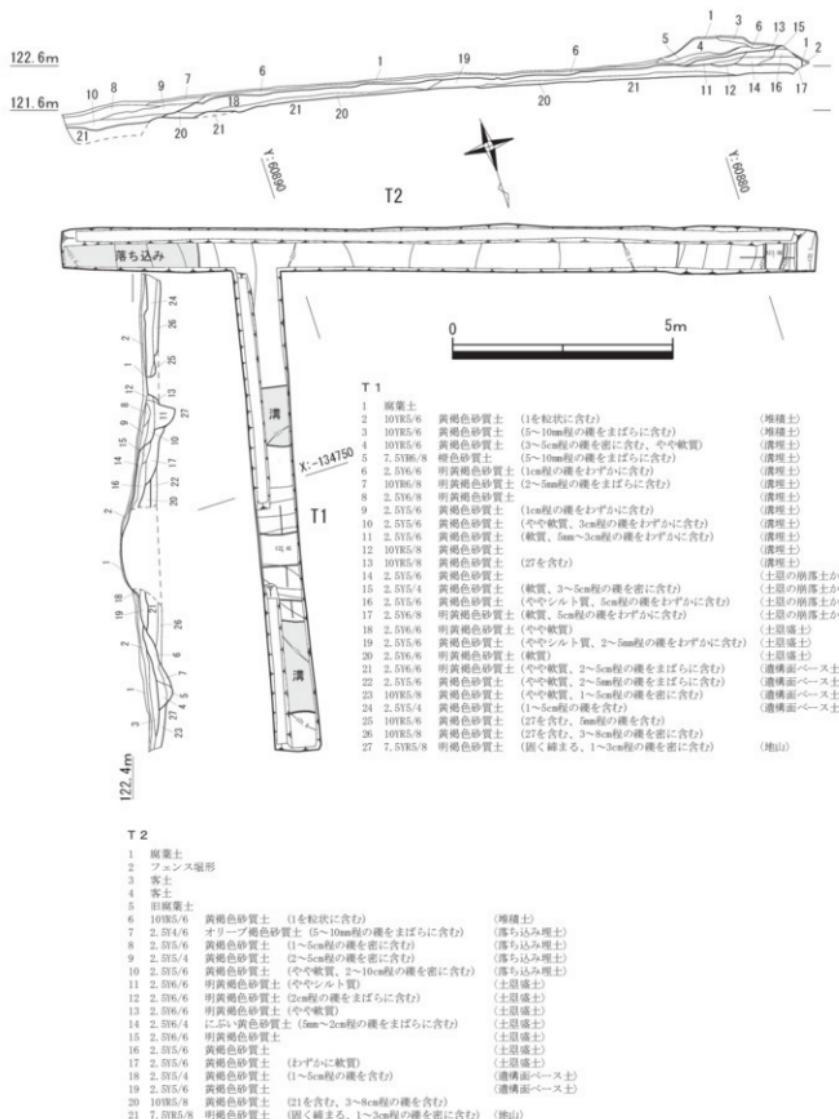


図 52 T 1・2 平面・断面図

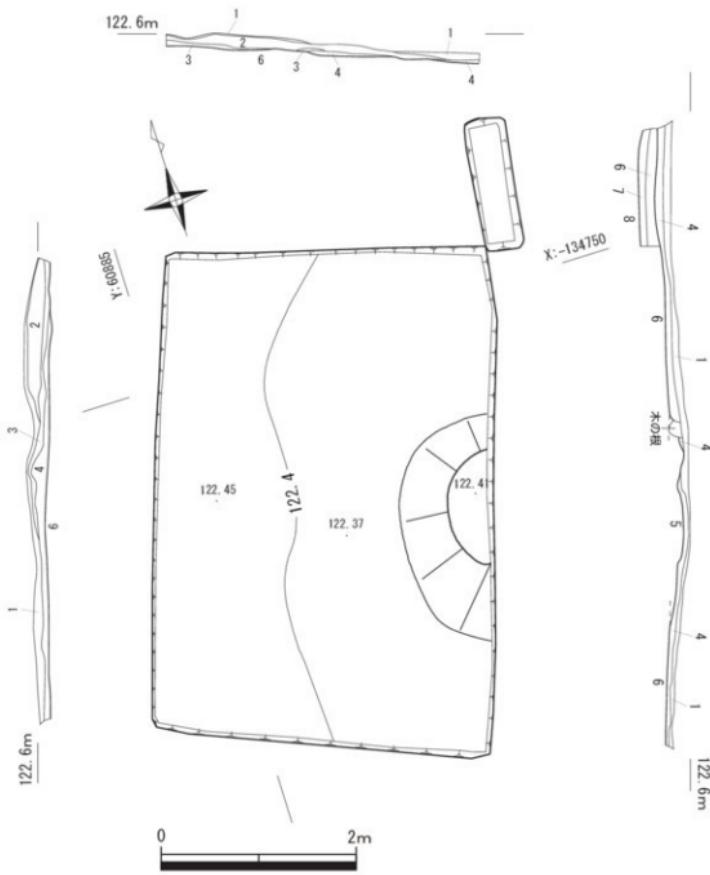
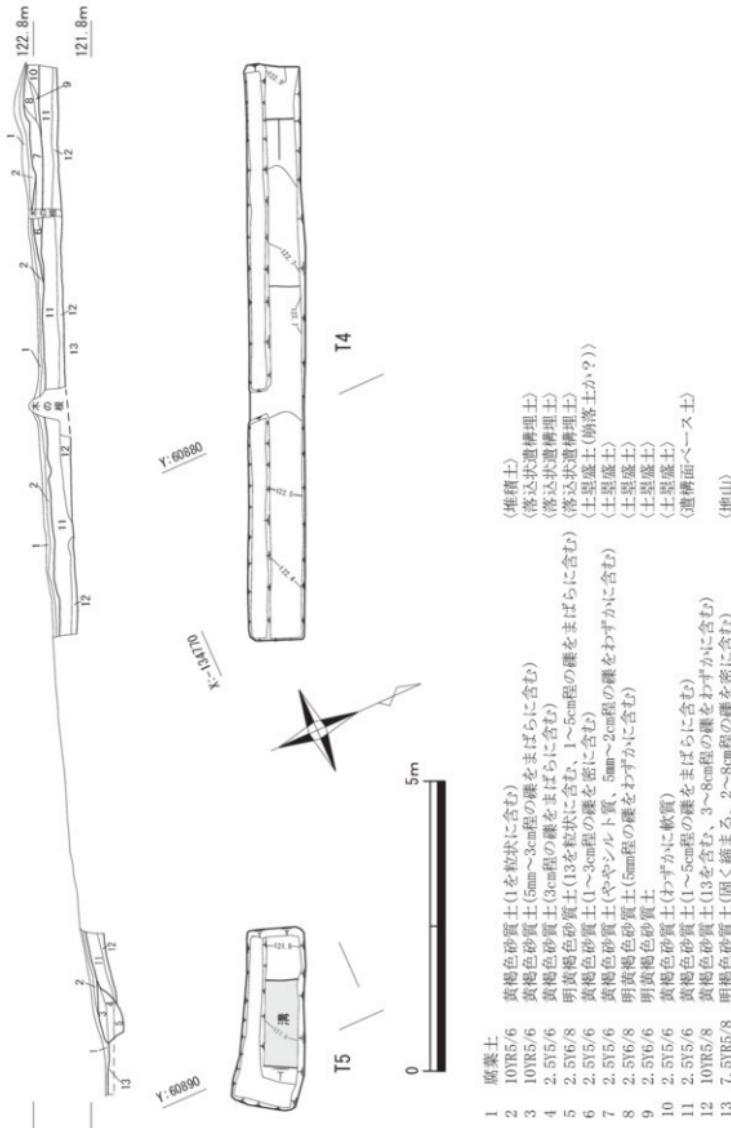


図53 T3 平面・断面図



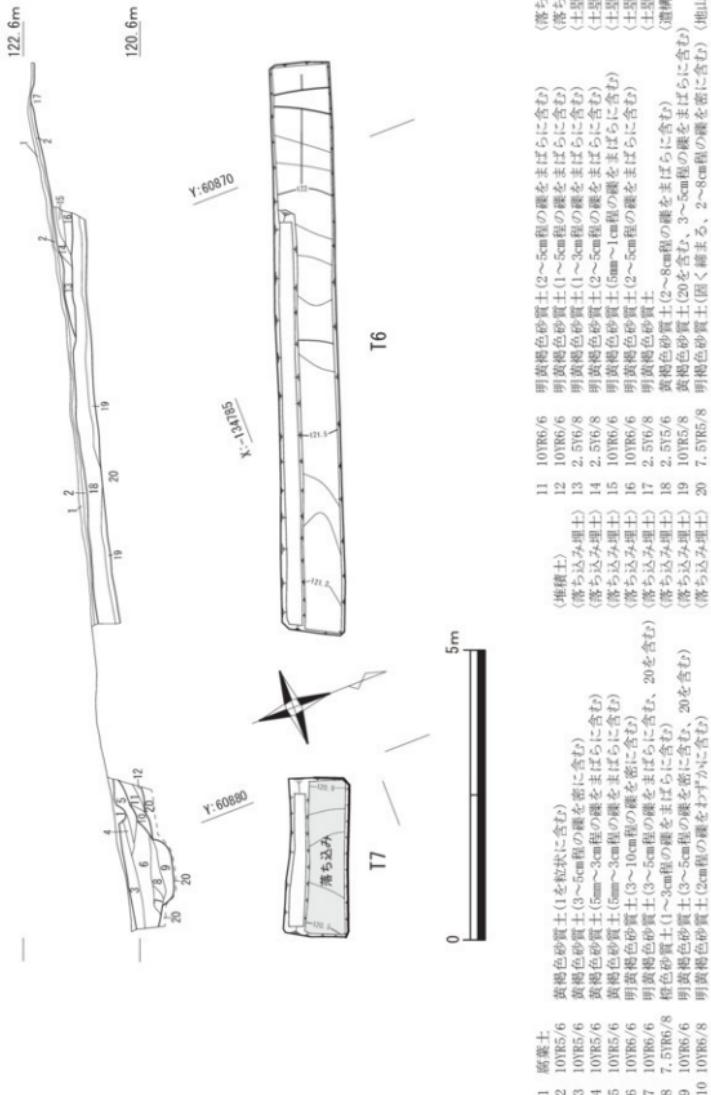


図 55 T 6・7 平面・断面図

T 7 (図 55)

T 6 東側延長線上において溝の存在を確認するために、1×3m弱のトレンチを設定した。断ち割りを設けたところ、全面が落ち込みであることが判明した。落ち込みの規模は幅2.7m以上、深さ1.0m以上を測る。溝であった可能性が考えられる。

5まとめ

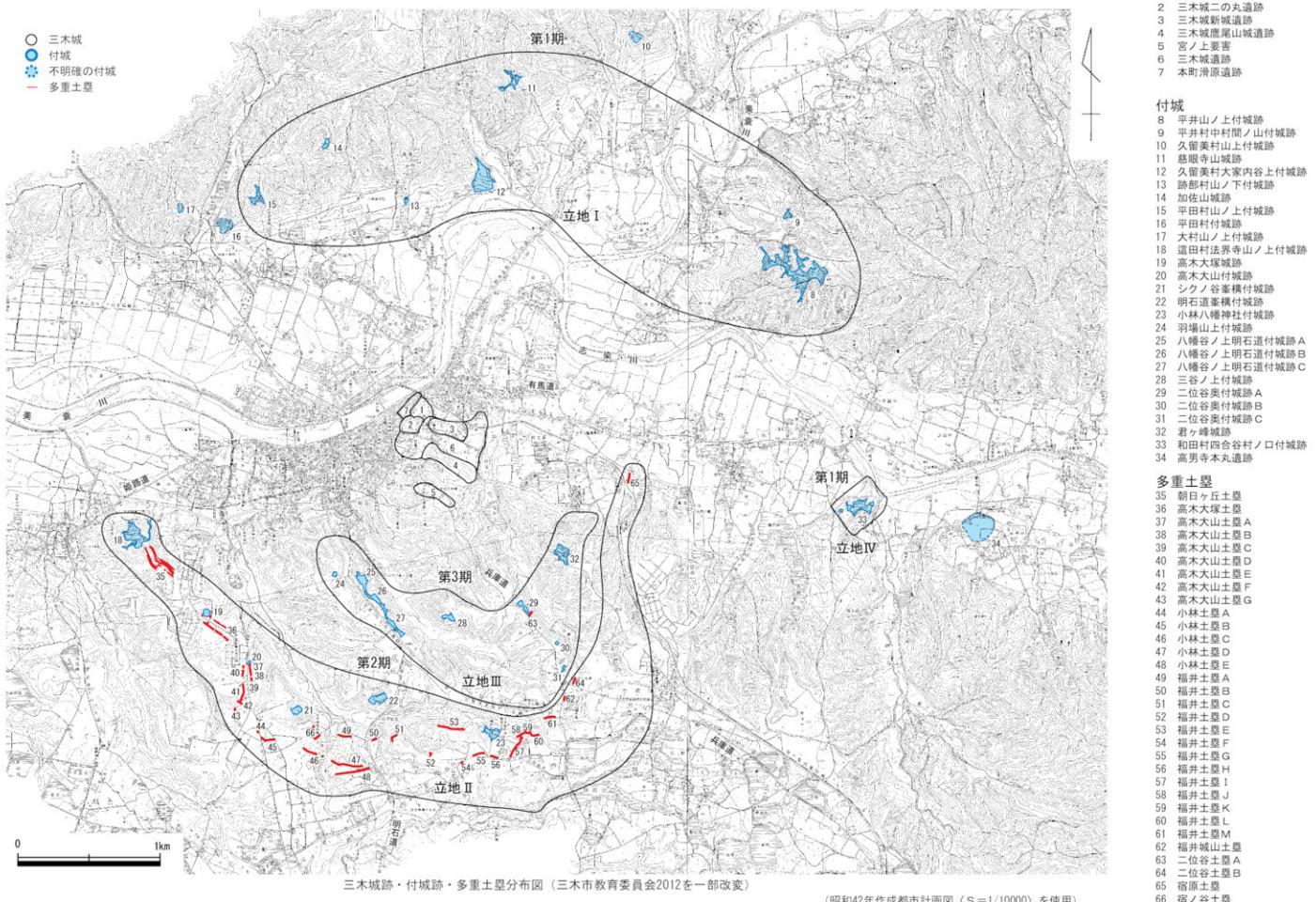
二位谷奥付城跡Cは、西辺に南北に延びる土塁ラインを配し、北辺に東西に延びる土塁・溝ライン、東辺に落ち込み、溝を設けて城域を画す構造であることが判明した。周辺には高低差が少ない尾根が広がる。これらのことから、当城は軍勢の駐屯部として利用されたものと考えられる。

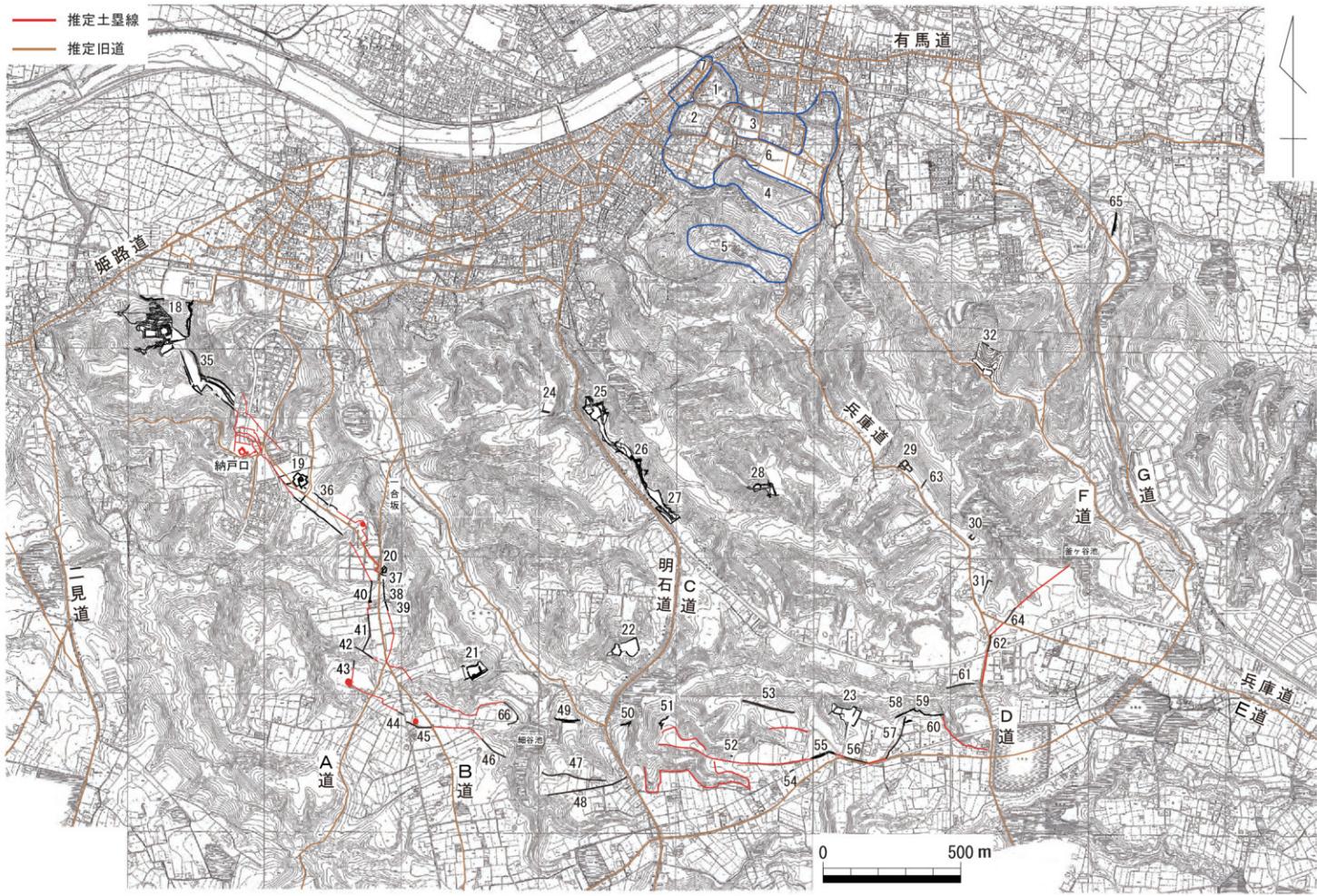
〈引用文献〉

兵庫考古学研究会 1998 『播磨三木城攻め付城二位谷奥付城現地説明会資料』

三木市教育委員会 2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』

図 版





多重土堀・旧道復元図（三木市教育委員会2012を一部改変）

(昭和44年作成 三木市都市計画図 (S=1/2500) を使用)





G7西壁(東から)



G8西壁(東から)



G14東壁(西から)



G15西壁(東から)



G19東壁(西から)



G23東壁(西から)



航空写真(上が北)



T1 全景(南から)



T2 全景(南から)



T3 全景(南から)



T4 全景(南から)



T5 全景(西から)



T6 全景(東から)



T7 全景(南東から)

図版9 宿原大池1号窯・宿原大池2号窯・宿原大池遺跡(1)





T 1 西壁土層断面
(北東から)



T 2 全景 (南から)



T 3 表土除去状況
(東から)



T 4 全景（北から）



T 5
南西隅断ち割り状況
(南東から)



T 6 全景（北東から）



T 7 全景（北東から）



T 8 全景（南東から）



T 9 全景（北から）



付城跡 B
近景（北西から）



T 1 全景（南から）



T 2 全景（南から）



T 3 全景（北東から）



T 5 全景（東から）



T 6 全景（南西から）



T 7 全景（南西から）



T 8 全景（南西から）



T 7 断ち割り状況（南東から）



航空写真（上が北）



T 1 全景（南西から）



T 1 全景（北東から）



T2 西側全景 (北西から)



T2 東側全景 (北西から)



T2 西端横堀土層断面 (西から)



T 2
曲輪盛土 (北西から)



T 2
東端横堀土層断面
(南から)



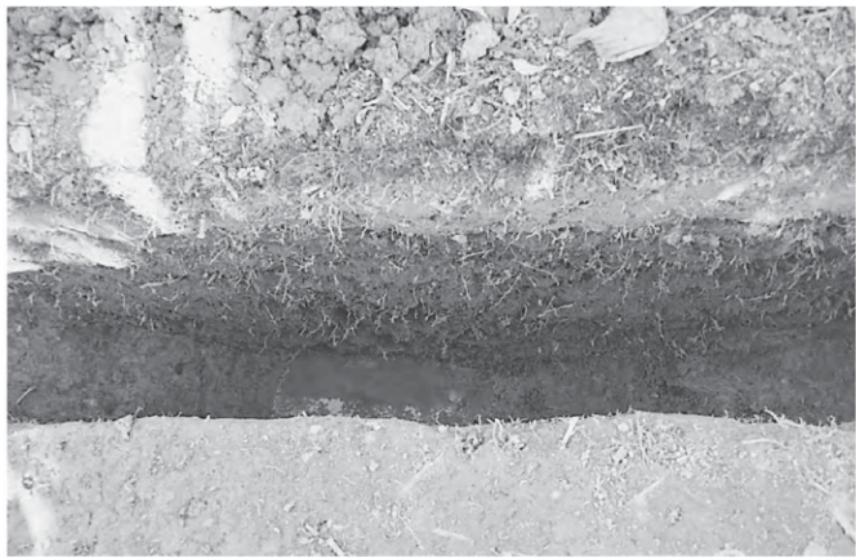
T 2
曲輪盛土 (南から)



T3 全景（東から）



T3 西端横堀断ち割り状況（西から）



T3 西端横堀土層断面（南から）



T 4 全景（南から）



T 4 全景（北から）



T 4 高木大山土壘A
土層断面（北西から）



T 4 横堀土層断面（西から）



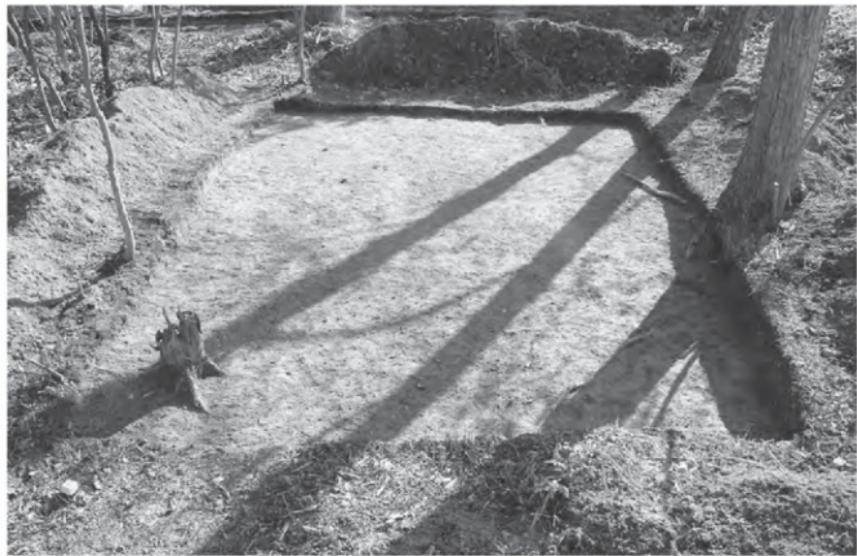
近景（北から）



T 1 全景（北から）



T 2 全景（東から）



T 3 全景（北から）



T 4 全景（東から）



T 5 全景（西から）



T 4 西辺土壘 土層断面 (北から)



T 5 溝 土層断面 (北から)



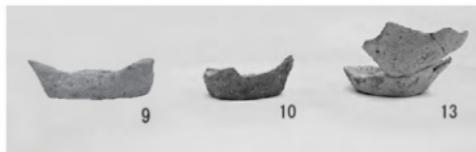
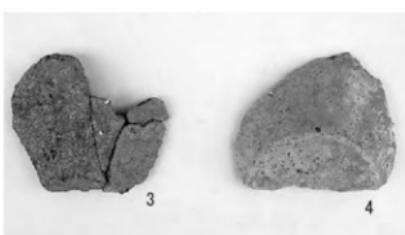
T 6 全景 (東から)

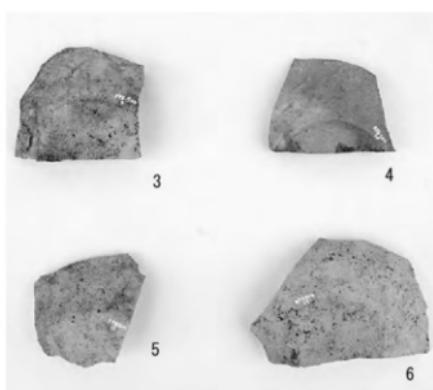
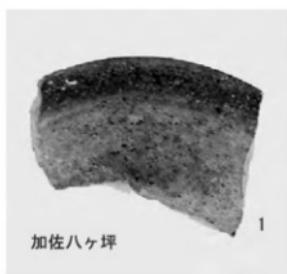


T 7 全景 (東から)



T 7 落ち込み 土層断面 (北から)





報告書抄録

ふりがな	みきしへいせいにじゅう・にじゅうに・にじゅうさんねんどこっこほじょによるはくつちょうさほうこくしよ
書名	三木市平成20・21・23年度国庫補助による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	三木市文化研究資料
シリーズ番号	第26冊
編著者名	金松誠
編集機関	三木市教育委員会
所在地	〒673-0492 三木市上の丸町10番30号 Tel:0794-82-2000
施行年月日	平成25年(西暦2013) 3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
かしまはしづかさんどち 加佐八ヶ坪散布地	三木市加佐地内	28215	—	34° 48' 18"	134° 58' 45"	2008.11.6~ 2009.1.14	69m ²	市内遺跡確認 調査	
ぼうがむらわくわいじやまのうづつけじらあと 道田村法界寺山ノ上付城跡	三木市別所町高木 木三木山国有林 237林班い小瓶	28215	160282	34° 47' 26"	134° 57' 50"	2009.2.12~ 2009.3.30	69.3m ²	重要遺跡範囲 確認調査	
しゆばらおおいけいじやま 宿原大池1号墓	三木市自由が丘 本町1丁目45番	28215	—	—	—	2010.11.15~			
しゆばらおおいけいじやま 宿原大池2号墓			160598	—	34° 47' 37"	135° 00' 15"	2010.12.2	51.5m ²	宿原大池改修
しゆばらおおいけいじやま 宿原大池遺跡				—	—	—			
はくさんじやまのうづつけじらあと 八幡谷ノ上明石道行城跡B	三木市福井字三 木山2465-1	28215	160362	34° 47' 14"	134° 59' 07"	2011.3.8~	73.5m ²	重要遺跡範囲 確認調査	
はくさんじやまのうづつけじらあと 八幡谷ノ上明石道行城跡C			160363	—	—	2011.3.24			
たかぎおおいけいじやまと 高木大山村城跡	三木市別所町高木 木三木山国有林 236林班い小瓶 237林班い小瓶	28215	160325	34° 47' 01"	134° 58' 28"	2011.11.7~	55m ²	重要遺跡範囲 確認調査	
たかぎおおいけいじやまと 高木大山上塚A			160326	—	—	2011.11.29			
たかぎおおいけいじやまと 二位谷奥付城跡C	三木市さつき台 2丁目(さつき 台跡)	28215	160367	34° 47' 08"	134° 59' 54"	2012.2.13~ 2012.3.3	72m ²	重要遺跡範囲 確認調査	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かしまはしづかさんどち 加佐八ヶ坪散布地	散布地	平安時代後期	—	須恵器、土師器、磁器	
ぼうがむらわくわいじやまのうづつけじらあと 道田村法界寺山ノ上付城跡	城跡	戦国時代	テラス状遺構、堀、土塁、弥生土坑	弥生土器、須恵器、石器	
しゆばらおおいけいじやま 宿原大池1号墓	—	—	—	—	竪跡ではなかったため全域消滅
しゆばらおおいけいじやま 宿原大池2号墓	—	—	—	—	竪跡ではなかったため全域消滅
しゆばらおおいけいじやま 宿原大池遺跡	散布地	平安時代後期	ピット	須恵器、瓦、竪壁	遺跡範囲を拡大
はくさんじやまのうづつけじらあと 八幡谷ノ上明石道行城跡B	城跡	戦国時代	土壘	土師器	
はくさんじやまのうづつけじらあと 八幡谷ノ上明石道行城跡C			土壘・溝	—	
たかぎおおいけいじやまと 高木大山村城跡	城跡	戦国時代	堀、土壘、盛土	—	
たかぎおおいけいじやまと 高木大山上塚A			土壘、溝	—	
たかぎおおいけいじやまと 二位谷奥付城跡C	城跡	戦国時代	土壘、溝	—	

三木市文化研究資料 第26集

三木市

平成20・22・23年度国庫補助事業
による発掘調査報告書

平成25年3月31日発行

編集・発行 三木市教育委員会

〒673-0492

兵庫県三木市上の丸町10番30号

印刷 小野高速印刷株式会社